八尾市文化財調査報告20
平成元年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ

1990.3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は古代から近世に至るまで大和と難波を結ぶ交通の要路としてわが国の歴史上重要な役割を果たしてきた土地であり、全国有数の遺跡の宝庫である。八尾市教育委員会では、近年急速な都市化の波に変貌しつつある現状において、古文化財の保存と顕彰に努めたいと願っているところであるが、限られた予算の範囲では対応にも限界があることは否めない。しかしながら平成元年度においても、市内の発掘調査で貴重な遺構、遺物が出土し、埋蔵文化財の重要性を改めて痛感させられた次第である。本書は、これら遺跡保存の為の基礎資料として市域の土木、開発工事に先だち実施した小規模な遺構確認調査を収録したものであるが、このような地道な調査成果の蓄積が、貴重な文化財の発見につながっていることもまた事実である。本書が今後の埋蔵文化財保存、活用の基礎資料として将来にわたって活用されることを願ってやまない。

平成２年３月31日

八尾市教育委員会
教育長　西谷信次

例　　言

1．本書は、平成元年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として八尾市内各遺跡で実施した遺構確認調査の報告書である。

2．発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長　森田康夫）が事業者に協力を求めて実施した。

3．調査は八尾市教育委員会文化財室の米田敏幸、青木勘時（現　財団法人八尾市文化財調査研究会職員）、近江俊秀（昭和63年度分、現橿原考古学研究所員）が担当し調査にあたった。

4．本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。

5．本書の作成にあたっては、米田、青木、近江の他、岡田清一、徳谷尚子が執筆を分担し、編集を行なった。

6．山賀遺跡出土土器の胎土観察については、市立刑部小学校教諭奥田尚氏に依頼して分析、執筆をいただいた。

目　　次

1．東郷遺跡（88－425）の調査……1

2．東郷遺跡（88－499）の調査……4

3．八尾南遺跡（89－028）の調査……7

4．小阪合遺跡（89－008）の調査……10

5．東郷遺跡（89－037）の調査……13

6．亀井遺跡（88－586）の調査……15

7．郡川遺跡（89－224）の調査……21

8．亀井遺跡（89－041）の調査……23

9．楽音寺遺跡（89－167）の調査……25

10．亀井遺跡（89－284）の調査……27

11．久宝寺遺跡（88－245）の調査……29

12．小阪合遺跡（89－255）の調査……31

13．中田遺跡（89－331）の調査……46

14．矢作遺跡（89－039）の調査……48

15．小阪合遺跡（89－424）の調査……50

16．山賀遺跡（89－213）の調査……52

17．中田遺跡（89－484）の調査……64

18．久宝寺遺跡（85－191）の調査……66

平成元年度国庫補助事業関係八尾市内遺跡遺構確認調査一覧表……72

平成元年度八尾市内遺跡立会調査一覧表……75

図　版　目　次

図版１　東郷遺跡（88－499）　調査区全景
（89－37）　調査区全景
図版２　八尾南遺跡（88－128）　北グリット遺構検出状況
北グリット溝断面
図版３　八尾南遺跡（89－028）　北グリット調査区全景
北グリット遺物出土状況
図版４　八尾南遺跡（89－028）　南グリット遺構検出状況
南グリット遺構検出状況
図版５　小阪合遺跡（89－008）　東グリット溝検出状況
西グリット遺物出土状況
図版６　郡川遺跡（89－224）　塚本塚古墳現状
発掘調査風景
図版７　郡川遺跡（89－224）　トレンチ北壁断面
トレンチ全景
図版８楽音寺遺跡（89－167）　調査区全景
中田遺跡（89－331）グリット断面
図版９小阪合遺跡（89－255）　遺構検出状況、南トレンチ東側
遺構検出状況、南トレンチ西側
図版10小阪合遺跡（89－255）　北トレンチ
南トレンチ
図版11山賀遺跡（89－213）　調査区全景
調査区全景
図版12山賀遺跡（89－213）　ＳＫ０２
図版13小阪合遺跡（89－424）　グリット全景
遺物出土状況
図版14亀井．久宝寺．小阪合．中田各遺跡出土遺物
図版15山賀遺跡（89－213）出土遺物

1．東郷遺跡（88-425）の調査

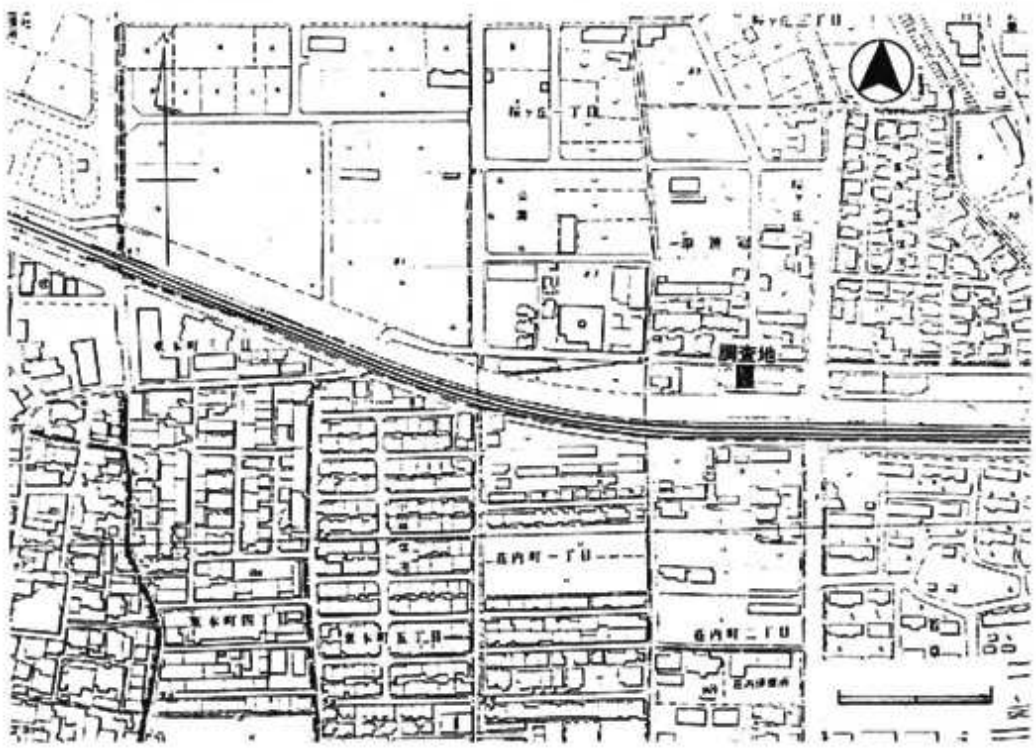
調査地　　桜ケ丘1丁目91番地

調査期間　平成元年2月20日

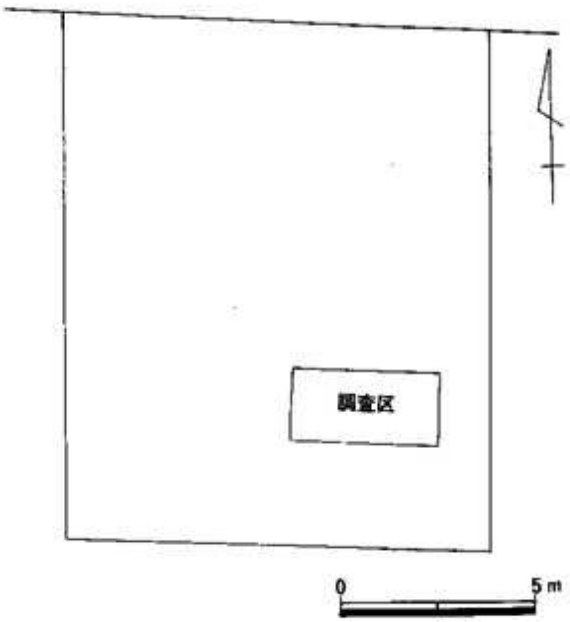
1．調査の概要

東郷遺跡は河内平野ほぼ中央に位置する弥生時代から中世に至るまでの複合遺跡である。今回の調査は個人住宅建設に伴うもので昭和62年度に(財)八尾市文化財調査研究会が発掘調査を行い、多数の庄内期の方形周溝墓を検出した調査地から東へ約20mの地点にあたる。

調査は調査地南東に1.3×3.5mのトレンチを設定し、表土から手掘りで掘削を行った。調査地の基本層序は厚さ約10cm程度の盛土を除去すると厚さ50cmの黄褐色粘土層が堆積する。この層は布留～中世までの土層を包含しているがその数はさほど多くない。検出した遺構には、ベースである黄褐色粘質土を掘り込む土坑、落ち込みなどがある。ＳＫ-01は、直径約40cm、深さ10cm程度の円形の土坑で遺物は出土しなかった。ＳＫ-02はトレンチ南東隅で確認された長径約90cm、短径約70cmの深さ約45cmの長円形の土坑で、埋土４層には多量の炭化物を含んで



第１図　調査地周辺図（1/10000）

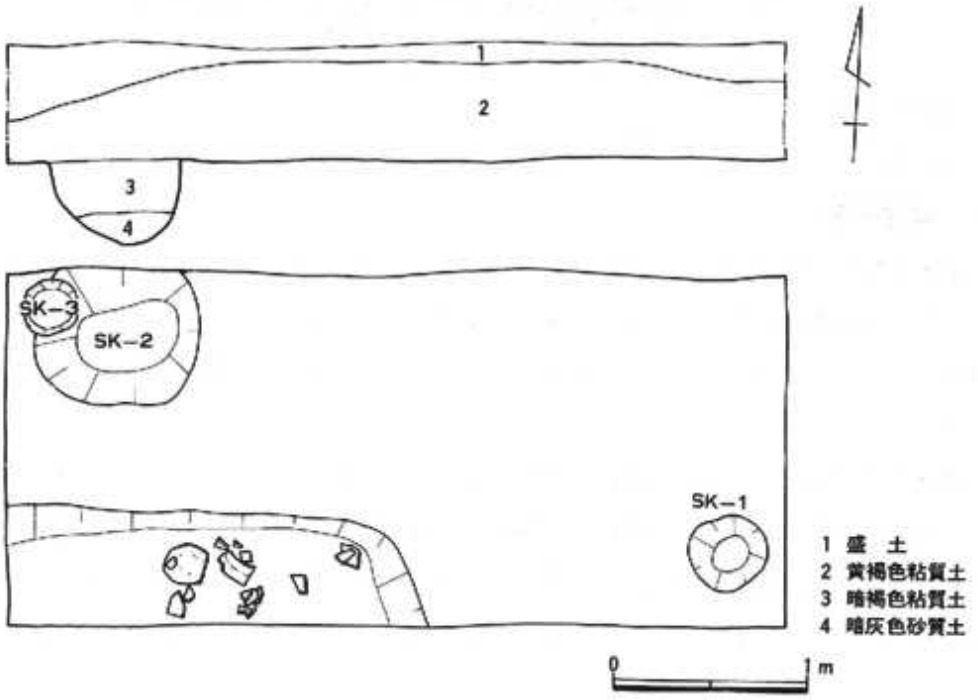


第2図　調査区設定図（1/200）

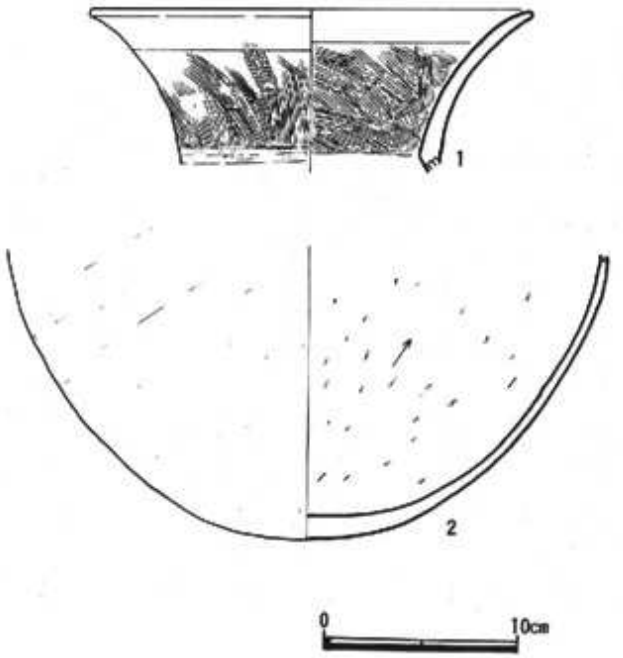
いるが、遺物はほとんど出土しなかった。ＳＫ-03はＳＫ-02を切る土坑で、直径28㎝、深さ７～８㎝の浅い土坑で遺物は出土しなかった。落ち込みは、トレンチ北東隅で検出しその性格は不明であるが、溝となる可能性もある。深さは約10㎝と浅いが、埋土より布留甕の底部や壺の口縁部をはじめとする多量の土器が出土した。

２．まとめ

今回の調査地は、東郷遺跡の中心部にあたり、当初予想できた通り庄内期の遺構、遺物の出土をみた。この付近には、まだ多くの遺構が眠っているものと思われるが、調査地付近ではまだ大規模な調査が行われておらず、集落の実態については不明な点が多い。今回行った調査も小規模で不十分なものではあったが、今後も当該遺跡内で連続的に行われる小規模開発に先立って何らかの調査を行う事が必要であろう。（近江）



第3図 調査区平断面図 (1/40)



第4図 SX-01出土遺物 (1/4)

2．東郷遺跡（88-499）の調査

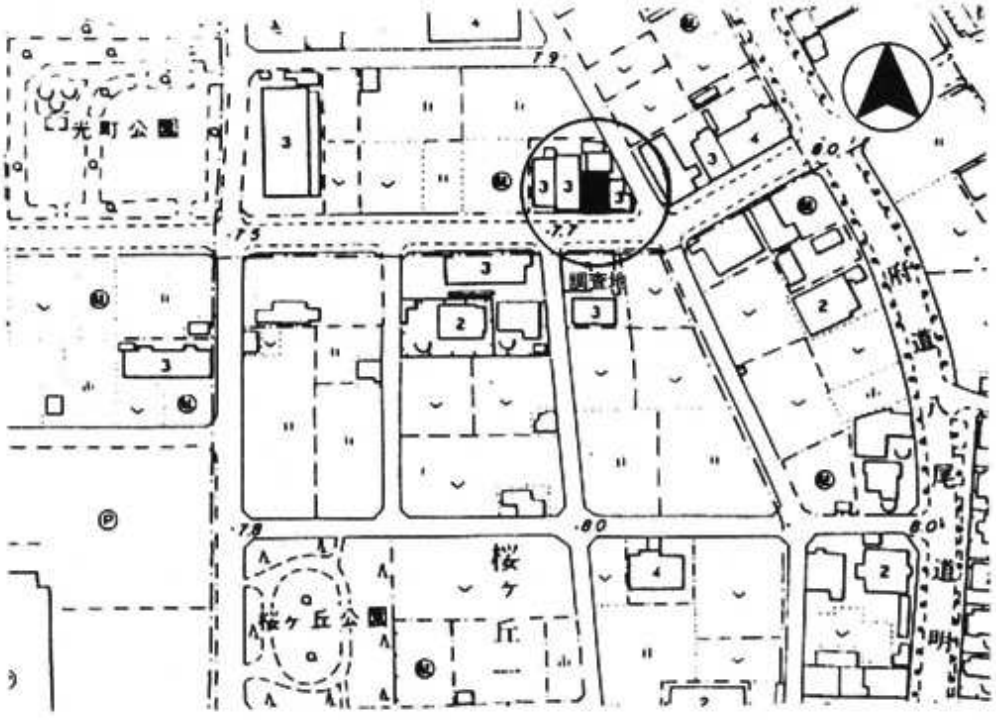
調査地　　桜ケ丘３丁目119

調査期間　平成元年３月22日～３月25日

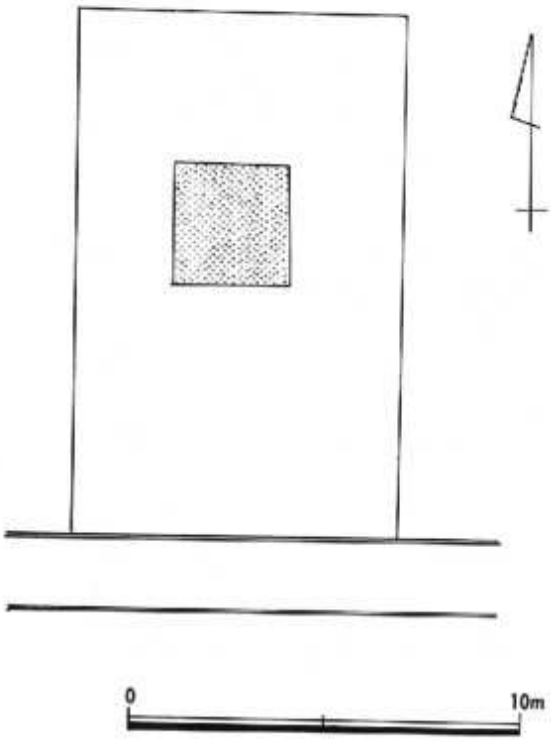
1．調査概要

東郷遺跡は、古墳時代を中心とする集落遺跡として知られている。本調査は当遺跡の東部において、事務所を建設する旨の届出に伴い、遺構の存在状況の確認を目的として実施した発掘調査である。敷地中央に３ｍ×３ｍのグリットを設定し地下1.8ｍまで人力による掘削を実施した。

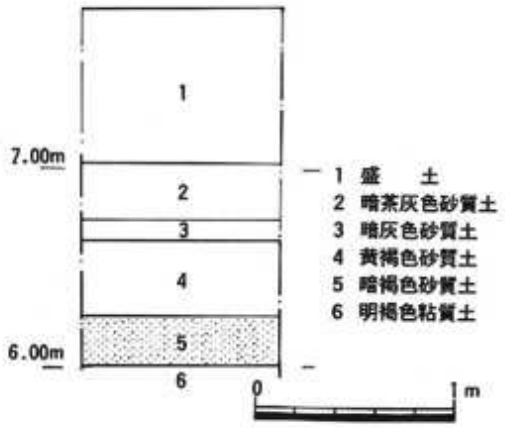
調査地の層序は、約80㎝の盛土以下1.8ｍまで、第２層暗茶灰色砂質土、第３層暗灰色砂質土、第４層黄褐色砂質土、第５層暗褐色砂質土、第６層明褐色粘質土となっている。古墳時代の遺物包含層は地表下1.55～1.8ｍに存在する第５層で、古墳時代中期後半の須恵器、土師器を多数含んでいる。また、第６層上面で精査を行なったが遺構の存在は確認できなかった。



第５図　調査地周辺図（1/2500）



第6図　調査区設定図（1/200）



第7図　基本層序図（1/40）

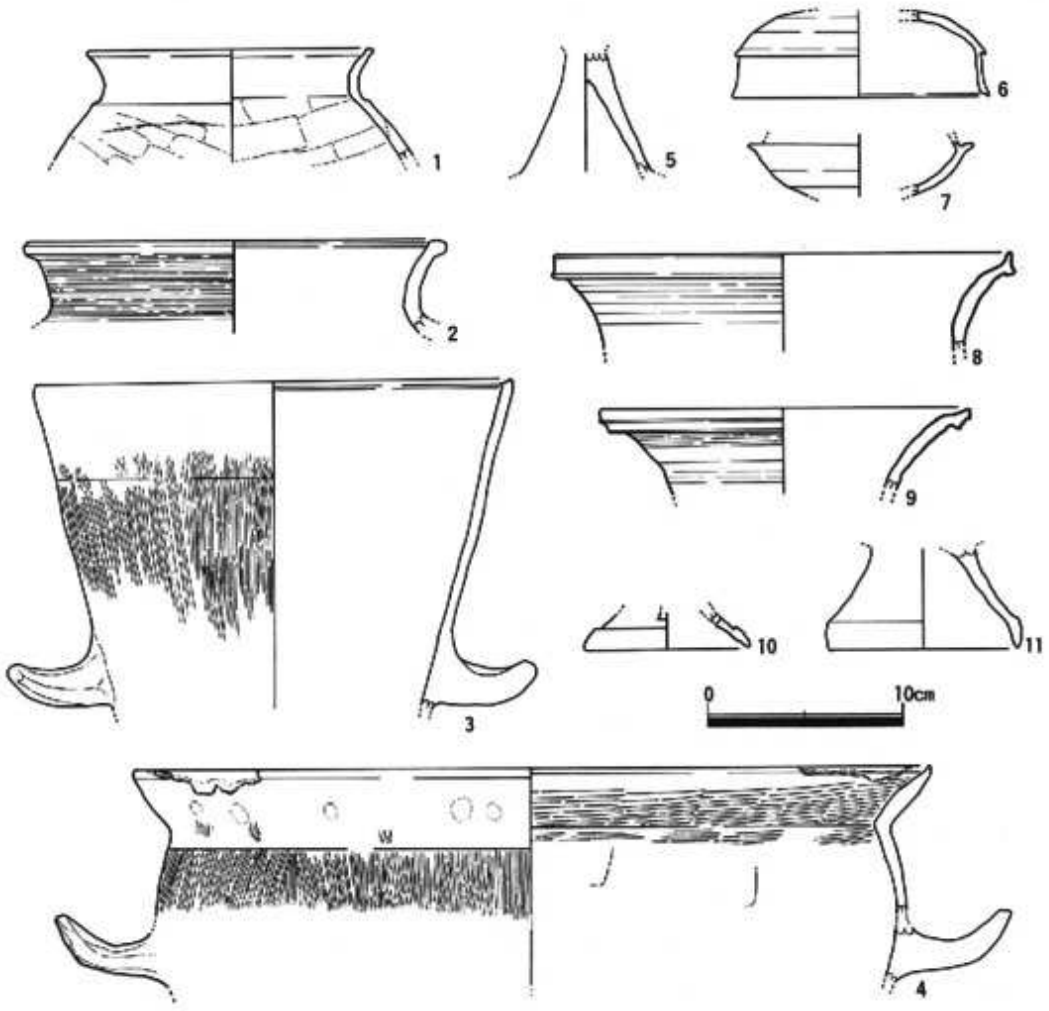
2．出土遺物

1～5は土師器である。1は円底広口の壺と考えられる。内外面ナデ調整である。2は、長胴甕の口縁部であろう。3は甑、4は鍋でいずれも牛角形の把手を有し、外面を刷毛調整する。5は高杯の脚柱部である。

6～11は須恵器である。6は杯蓋で、7は蓋身である。8．9は壺口縁で、10．11は、高杯の脚部である。いずれもＴＫ23～ＴＫ47形式の内でとらえることができよう。

3．まとめ

今回調査した地点では、遺構こそ検出できなかったが、包含層では古墳時代中期後半の土器が、比較的まとまった状況で出土した。桜ケ丘3丁目付近では、これまでの調査でも弥生時代後期～古墳時代後期に至る多数の遺構が検出されており、今回の調査地点が当遺跡の集落域に含まれていることは、間違いないであろう。このことからたまたま遺構に当たらなかったものの、付近に隣接して遺構が存在している可能性は、充分に考えられる。（米田）



第8図　出土遺物実測図（1/4）

3．八尾南遺跡（89-028）の調査

調査地　　若林町３丁目116番地

調査年月日　平成元年４月20日

調査概要

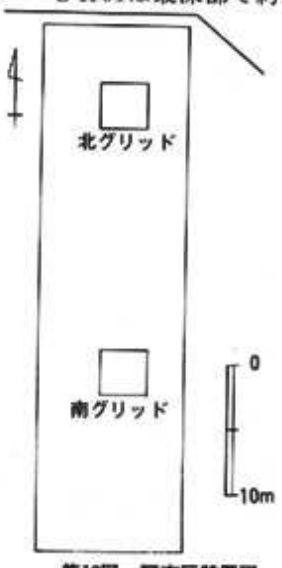
本調査は、マンション建設に伴い、建設予定地内における遺構、遺物包含層の有無確認を目的として実施した。

調査は、3.5m四方のグリッドを調査地の南と北に計２ヶ所設定し、現地表面下約１mまで機械掘削し、以下は人力により遺構精査をおこなった。また南グリッドのみ下層遺構および層序の確認のため現地表面下2.7mまで重機により深掘りした。

第９図　調査地位置（1/1000）

北グリッド：層厚約80cmの盛土を除去した後、旧耕土の面となる。その下に層厚10～20cmで微砂質土の堆積となり、次に旧耕土下約30cmで遺物包含層の砂質土層が層厚10cmで遺存し、少量の埴輪片、土師器の細片等を検出した。この包含層を除去した段階で砂質土をベースとして掘り込まれた土坑を２基検出し、北壁側のＳＫ01より埴輪片が出土している。

ＳＫ01は最深部で約10cmと浅い土坑で、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。ＳＫ02は深さ約20cm、長円形を呈し、遺物の出土は認められなかった。ともに埋土は暗茶褐色の粘質土であることからほぼ同時期であろう。

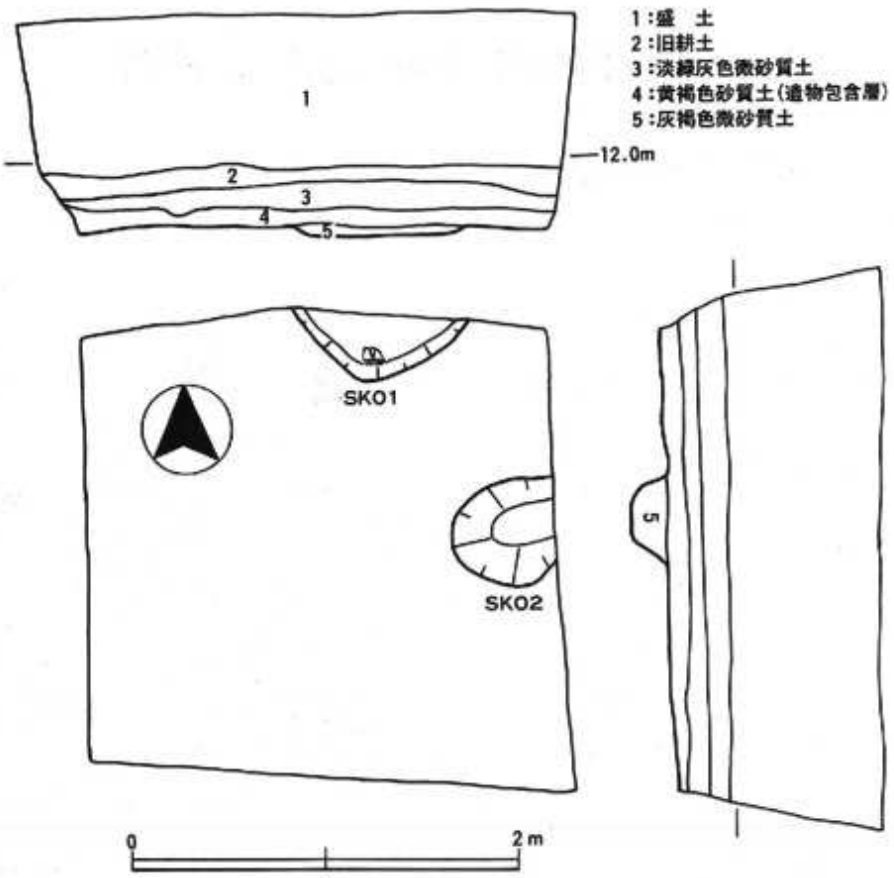


第10図　調査区設置図（1/600）

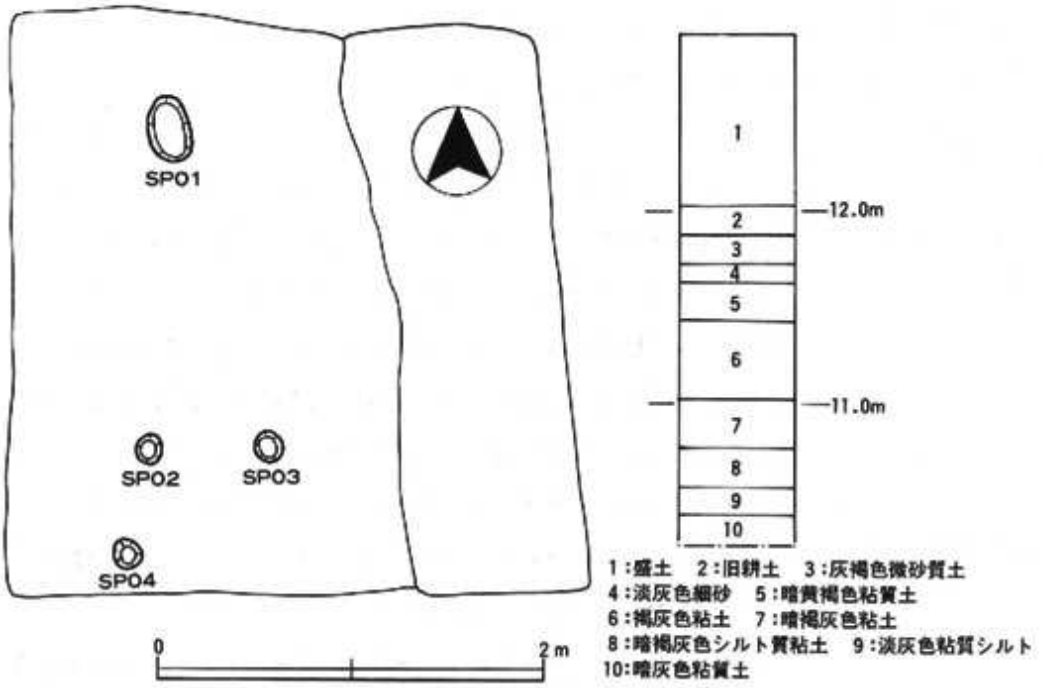
南グリッド：層厚約90cmの盛土を除去後、旧耕土直下で北グリッドで確認した遺構面と同じ砂質土をベースとして小穴４基を検出した。遺物は、遺構面上で土師器の細片を微量に採集したほかに土器の出土は無く、サヌカイト製の剥片１点の出土のみである。

ＳＰ01～04の各小穴は、長円形の幅30～20cmのＳＰ01を除き、いずれも径20cm程の円形を呈する。深さは約５cmと浅く、埋土は暗褐色の粘質土で遺物はほとんど含まれない。

また、南グリッドのみ遺構面以下の層序を確認した。その結果、遺物包含層および遺構面となる土層は確認されなかった。第７層の暗褐



第11図　北グリッド平面図・土層図 (1/40)

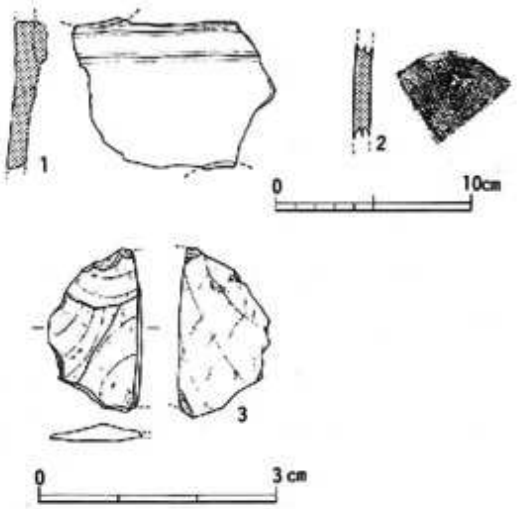


第12図　南グリッド平面図・土層図 (1/40)

灰色シルト質粘土には植物遺体が含まれ、その下の第８層淡灰色粘土質シルトが隣接する長原遺跡の基本層序の第13層に相当する。

出土遺物

１はＳＫ01出土の埴輪片である。低く、しっかりとした断面台形のタガが付され、上下端には円形透かしの痕跡が残る。２は北グリッド包含層出土の埴輪片である。外面ナナメハケ、内面ナデの調整が残る。３の石器は南グリッド遺構面上出土のサヌカイト製剥片である。折れ面が残り、縁辺に微細な剥離痕がみられ、色調は淡灰色である。１～３を含め出土遺物には著しく摩滅するものが多くみられる。



第13図　出土遺物（埴輪１/４・石器１/１）

まとめ

今回の調査は、昭和59年度に八尾市教育委員会文化財室が調査した地点に近接し、その際に確認している弥生後期～古墳時代の遺構面に該当する層序を本調査においても追認することができた。検出した遺構についても、南グリッドのピット群は深さ５㎝と浅く、耕作土直下に遺構面が確認されるなど、調査の南半まで近世の耕作により削平されているのがわかる。特筆すべきは、北グリッドで検出したＳＫ01出土の埴輪片および包含層出土の埴輪片、土師器小片など、概ね６世紀の遺物である。おそらく、調査地の北端あたりに削平された古墳が存在するものとおもわれる。

当調査地の北半は、検出した遺構面が現地表面下1.2ｍ程と浅く、後世に削平を受けたとしても自然の微高地上にあると考えられ、居住地として適していたのであろう。

下層遺構の有無については、南グリッドのみ深掘りして確認しただけに留めたが、石器１点を遺構面上で採集しており、調査地の北側では注意を払う必要がある。（青木）

4　小阪合遺跡（89-008）の調査

調査地　　青山町２丁目63・64番地

調査年月日　平成元年４月24・25日

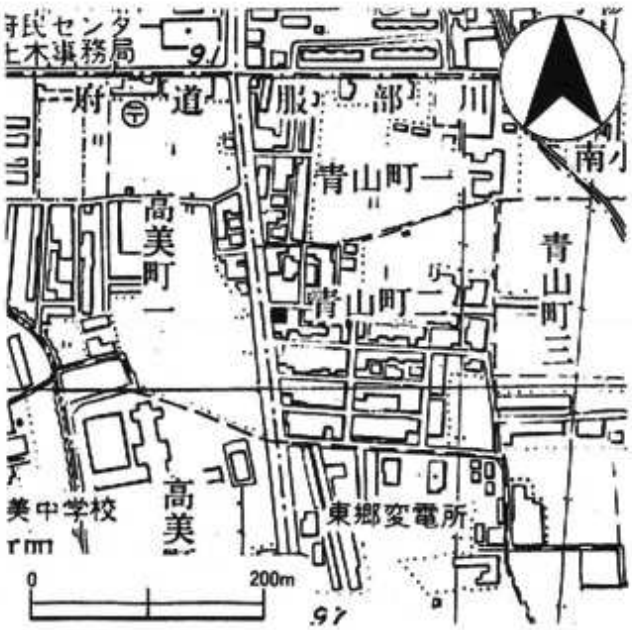
調査概要

本調査は、事務所の建設に伴う事前の確認調査として実施した。

調査は、調査地内の東西に２ｍ四方のグリッドを設定し、すべて人力による掘削、遺構の精査をおこなった。

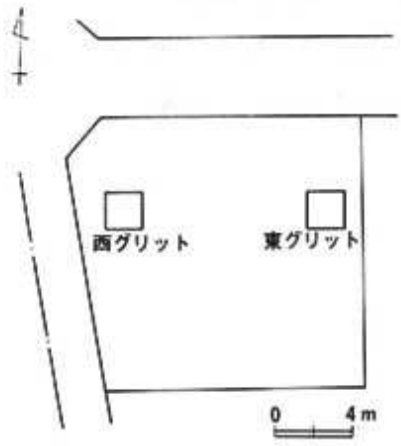
東グリッド：層序は以下のとおりである。

1．攪乱
2．盛土
3．淡褐色砂質土
4．黄褐色礫混じり砂質土
5．暗茶灰色砂質土
6．明褐色粘質土
7．淡灰色粘質土



第14図　調査地位置図（1/7500）

現地表面下約80㎝までの攪乱および盛土を除去すると、3．淡褐色砂質土が層厚10㎝前後でみられるが、おそらく旧耕土直下の床上であったとおもわれる。次に、4．黄褐色礫混じり砂質土が層厚20～30㎝で堆積しており、土師器、瓦器の小片が含まれることから概ね中・近世の遺物包含層（包含層Ⅰ）であると考えられる。6．暗褐色粘質土は、中世の遺構面（上層）となっており、なおかつ須恵器、土師器などの土器片を含む古墳～奈良時代の遺物包含層（包含層Ⅱ）でもあり層厚約35㎝を測る。その直下では、灰褐色微砂～細砂層をベースとする遺構面（下層）となっており、古墳時代後期頃であるとおもわれる。



第15図　調査区設定図（1/400）

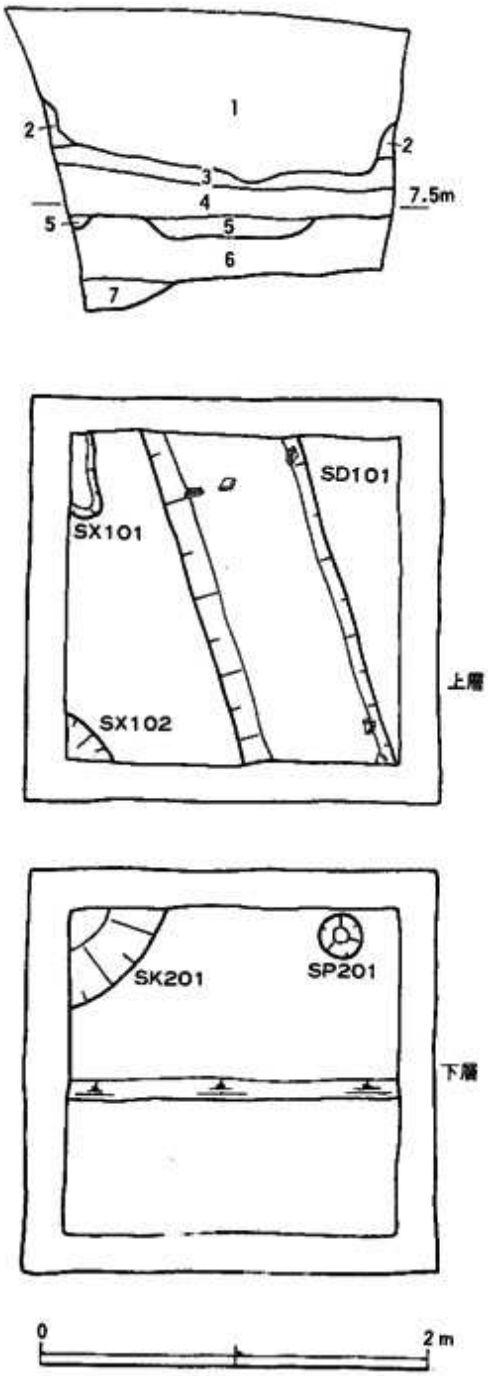
遺構は、上層で溝ＳＤ101、不明遺構ＳＸ101・102、下層で土坑ＳＫ201、小穴ＳＰ201をそれぞれに検出している。

ＳＤ101は、幅約80㎝、深さ約10㎝を測り、皿状の断面形を呈する。埋土は暗茶灰色砂質土である。遺物は、瓦器椀（1）、羽釜（3）の破片が出土している。ＳＸ101およびＳＸ102は、ともに部分的に検出したのみで、不明な点が多く、遺物もまったく出土していないが、埋土がＳＤ101と同様であることから同時期の遺構であろう。

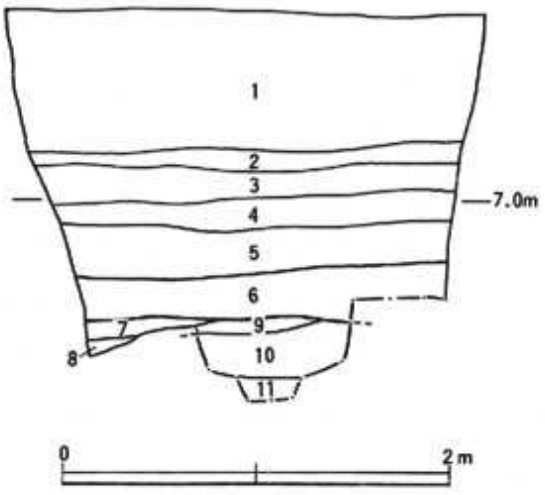
下層遺構は、グリッドの北半分のみの掘り下げにより確認した。ＳＫ201は、一角を部分的に検出しただけで全容は不明であるが、径１ｍ程の土坑と考えられる。深さは最深部で約20㎝を測る。遺物は出土していない。ＳＰ201は、径約20㎝を測り、深さも10㎝程度のものである。

西グリッド：層序は次のようになっており、東グリッドと若干の相違が認められる。

1．盛土
2．暗灰黄色砂質土
3．淡灰黄色砂質土
4．淡褐色砂質土
5．黄褐色礫混じり砂質土
6．暗茶灰色砂質土
7．明灰褐色シルト質土
8．明褐灰色粘土
9．淡灰褐色粘土
10．灰褐色シルト混じり粘土
11．暗青灰色粘土



第16図　東グリッド平面図・土層図（1/40）



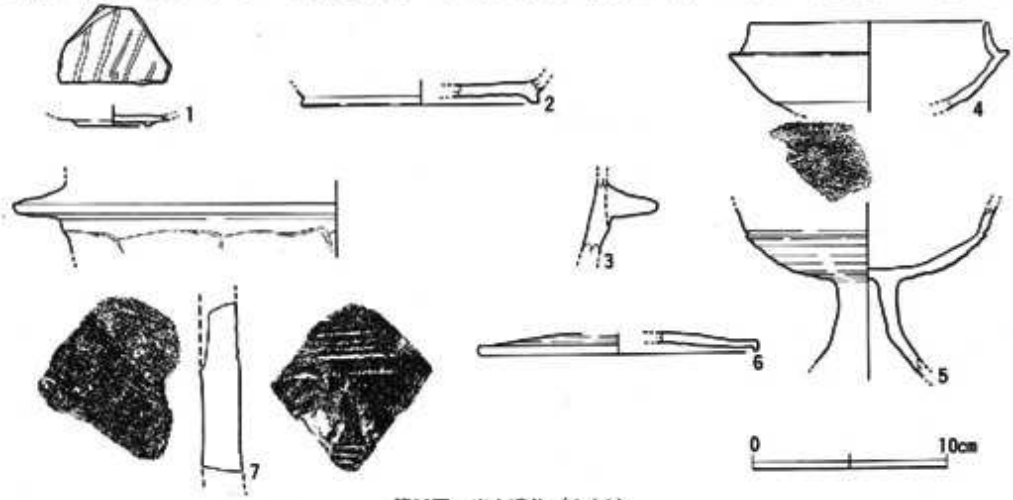
第17図　西グリッド北壁土層図（1/40）

現地表面下約1.2m～1.6mで5．黄褐色礫混じり砂質土（包含層Ⅰ）と6．暗茶灰色砂質土（包含層Ⅱ）の遺物包含層を確認した。ともに、東グリッドと同様の遺物内容であり、それぞれに対応する層と考えられるが、レベル的には低くなっている。

また、部分的に包含層以下の掘下げをおこない、現地表面下2mまでの層序を確認したが、粘土層を基本とし、若干の砂を介在するのみで遺物等は検出されなかった。

出土遺物

1は瓦器椀の底部である。見込みには平行暗文がみられ、高台は小さく低い。2は須恵器杯の底部で高台をもつ。3は土師器羽釜である。外面は板状工具によりナデ調整される。4は須恵器杯身で底部にヘラ記号（十）がみられる。5は須恵器高杯である。杯部外面の回転ヘラ削りは丁寧で、やや鋭い稜をもつ。6は須恵器杯蓋である。偏平な体部で口縁短部に短いかえりをもつ。7は平瓦である。淡灰色を呈し、やや軟質である。内面には布目の圧痕がみられる。



第18図　出土遺物（1/4）

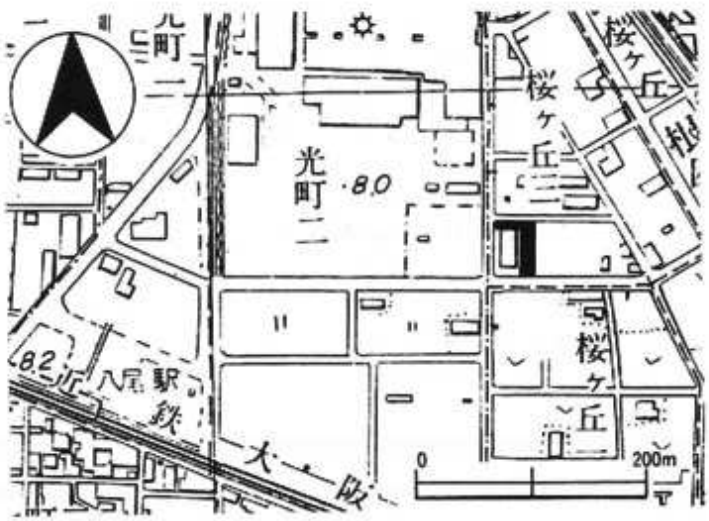
まとめ

今回の調査地では、古墳～奈良時代後期の遺物包含層の存在を確認することができた。また、奈良時代後期の瓦類や須恵器も出土していることなど、近隣地域において当該期の遺構の存在を予想することができる。（青木）

5　東郷遺跡（89-037）の調査

調査地　　桜ケ丘３丁目124・126番地

調査年月日　平成元年５月８日



第19図　調査地周辺図（1/5000）

調査概要

本調査は、事務所新築に伴う事前の遺構確認調査として実施した。

調査は、調査地内に２ｍ×６ｍのトレンチを設定し、現地表面下2.2ｍまでの掘削をおこない、遺構、遺物包含層の確認に務めた。

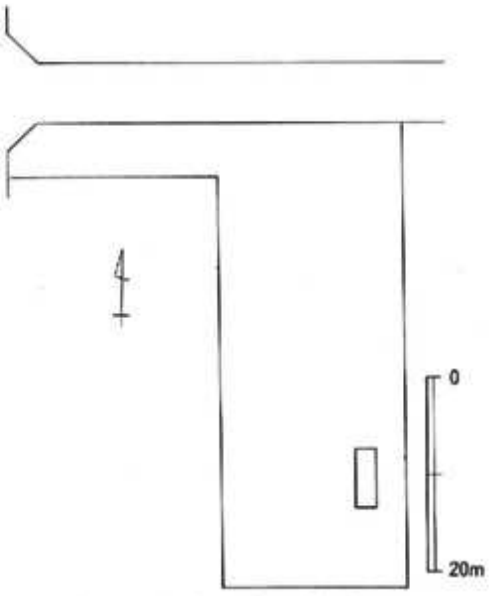
現地表面下1.8ｍまで機械力により掘り下げ、それ以下は人力により遺構の精査を実施した。

層序は次のような状況である。

１．盛土　２．旧耕土　３．青灰色粘質土　４．暗茶灰色粘質土　５．黄褐色微砂混じり粘質土　６．黄褐色微砂混じり粘土質シルト　７．灰褐色シルト　８．暗褐色粘質土　９．黄褐色粘質土

３．青灰色粘質土の下部で中世の土器片が出土したほかには遺物の出土は認められず、弥生後期～古墳時代の遺物包含層は中世頃に削平されているものと推定できる。その直下に弥生～古墳時代の遺構面となる９．黄褐色粘質土が現地表面下1.8ｍで確認することができ、溝状遺構の一角や小穴などの遺構を検出した。

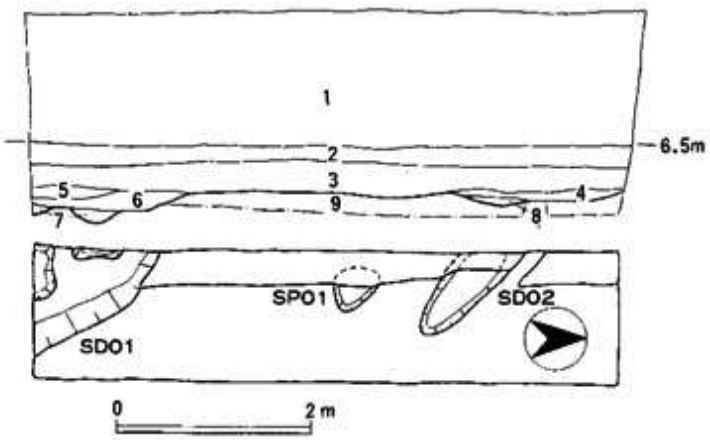
溝ＳＤ01は、南西隅で検出した。幅1.2ｍ以上、深さ約30㎝を測り、底面に著しく凹凸がみられ、埋土も微砂、シルト混じりの水成層であることか



第20図　調査区設定図（1/800）

ら、水が流れていた溝であろう。溝ＳＤ02は、幅約40㎝で、深さが検出面で約15㎝である。小穴ＳＰ01は、径約40㎝、深さは約15㎝である。

遺物はいずれの遺構からも弥生後期の土器片や土師器の小片が出土しているのみである。



第21図　調査区平・断面図（1/80）

また、ＳＤ01の埋土から庄内式（古）の甕の破片も出土している。

まとめ

今回の調査では、中世以降の堆積土の直下に弥生後期－古墳時代の遺構面を確認した。このことから、当該地の周辺では、遺物包含層が後世の耕作等の開発のために削平を受けている可能性があることを示している。しかし、近接する地点では集落、墓域等を検出しており、原地形的にも考えて、部分的な削平かもしれない。（青木）

6　亀井遺跡（88-586）の調査

調査地　　南亀井町２丁目９－１番地

調査年月日　平成元年５月26・27日

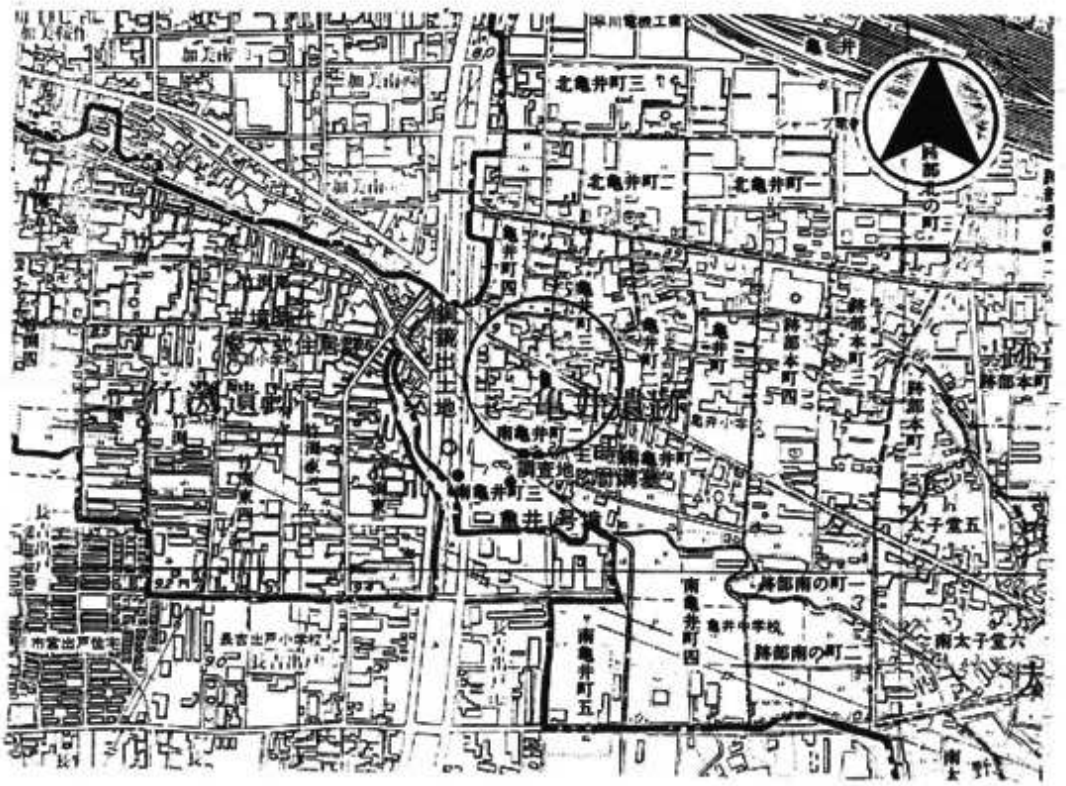
調査概要

亀井遺跡は、八尾市南亀井町を中心に広がる弥生から古墳時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は、河内平野に流れる数条の中小の河川により形成された沖積地の南端に位置しており、近年の（財）大阪文化財センターが実施した近畿自動車道関連の調査等により、弥生時代の各時期の集落規模などを考察できるほどの多くの成果が得られている。

本調査は、事務所の建築工事に伴い、建設予定地内における遺構、遺物包含層の有無確認のため実施した。

調査は、建築物の基礎杭部分のみを対象として、調査地内に８ヶ所のグリッドを設定し（A～Hグリッド）、それぞれの地点で重機による掘削をおこなった。

各グリッドは一辺１ｍと小規模で、なおかつ遺物包含層、遺構の埋没深度も相当深いことが



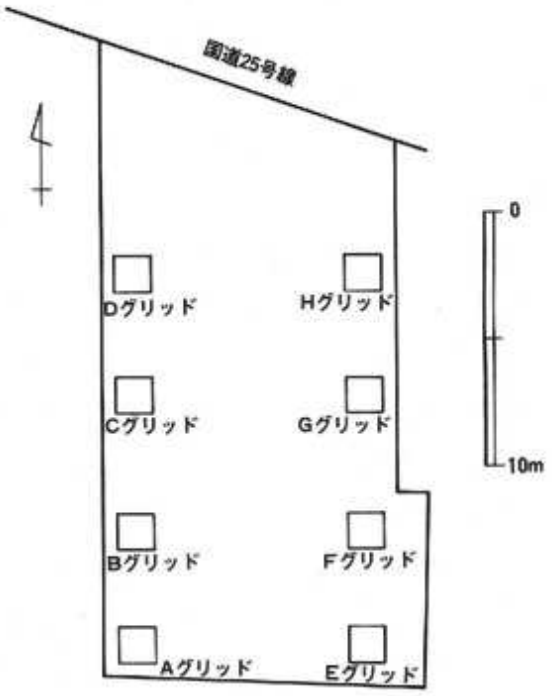
第22図　調査地位置図（1/13000）

予想されることから、遺物の採集および当該地における層序の確認を主眼において調査を実施した。

各グリッドの層序は、基本的に以下に示したような状況となっている。

1．盛土
2．淡茶灰色粘質土
3．青灰色微砂
4．青灰色粘土
5．暗灰色粘土
6．黒灰色砂礫混じり粘土
7．緑灰色微砂混じりシルト

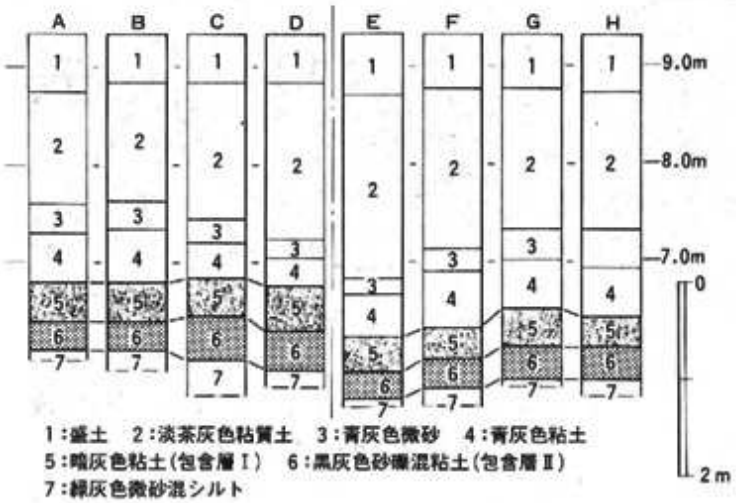
いずれのグリッドにおいても、現地表面下約3.5mまで掘り下げ、最終的に基盤層となる7．緑灰色微砂混じりシルトを確認している。



第23図　調査区設定図（1/300）

また、その上部に堆積する弥生時代の全時期にわたる土器、石器などを含む遺物包含層を確認した。遺物包含層は上部と下部に分離して理解することが可能であり、弥生後期の遺物を含む上部の5．暗灰色粘土（包含層Ⅰ）と弥生前期～中期の遺物を含む下部の6．黒灰色砂礫混じり粘土が認められる。

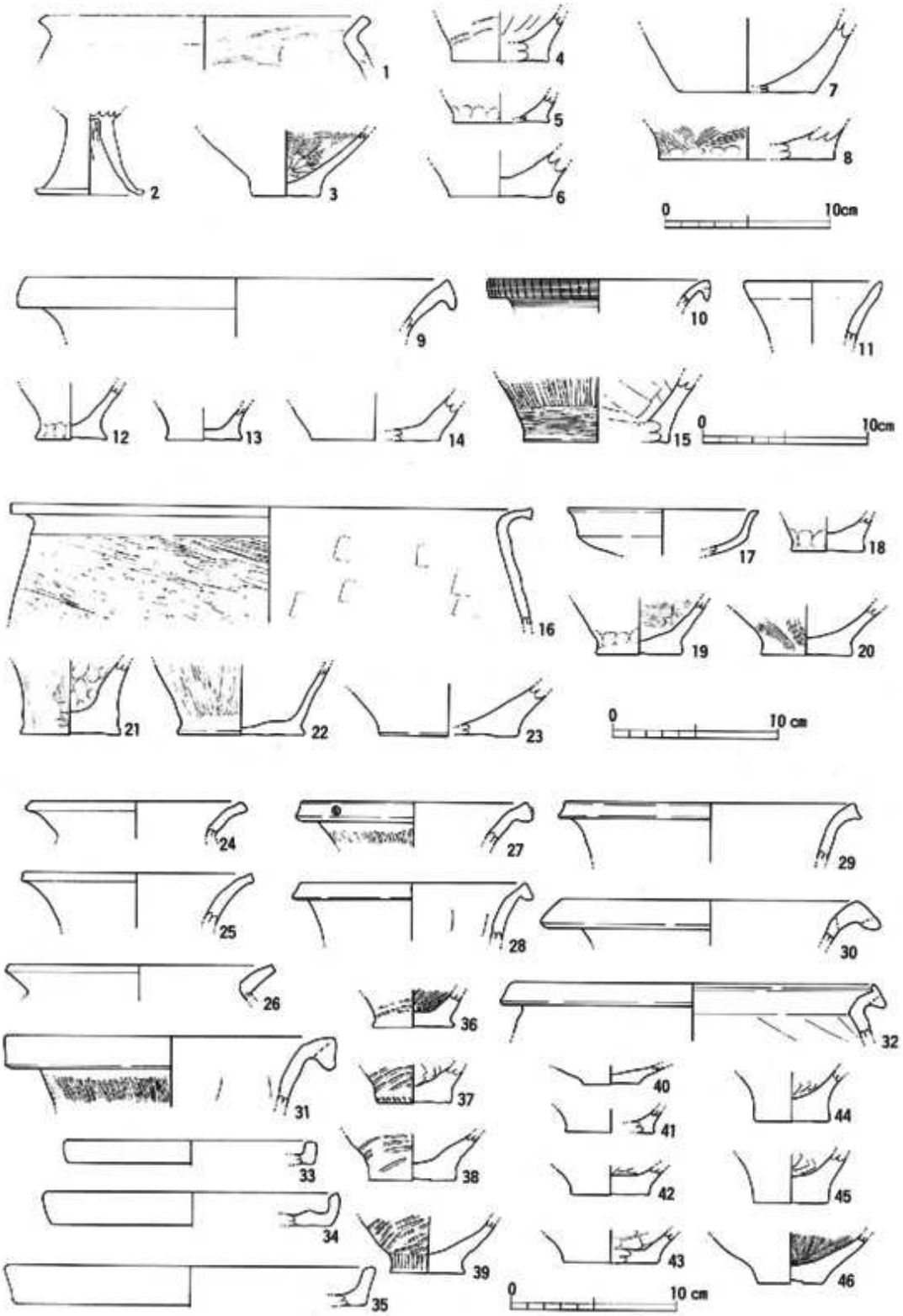
調査上の制約もあり、遺構等を確認するのは困難であったが、最終面である程度原地形を考えることができ、全体に東から西に向かい緩やかに傾斜することがわかる。



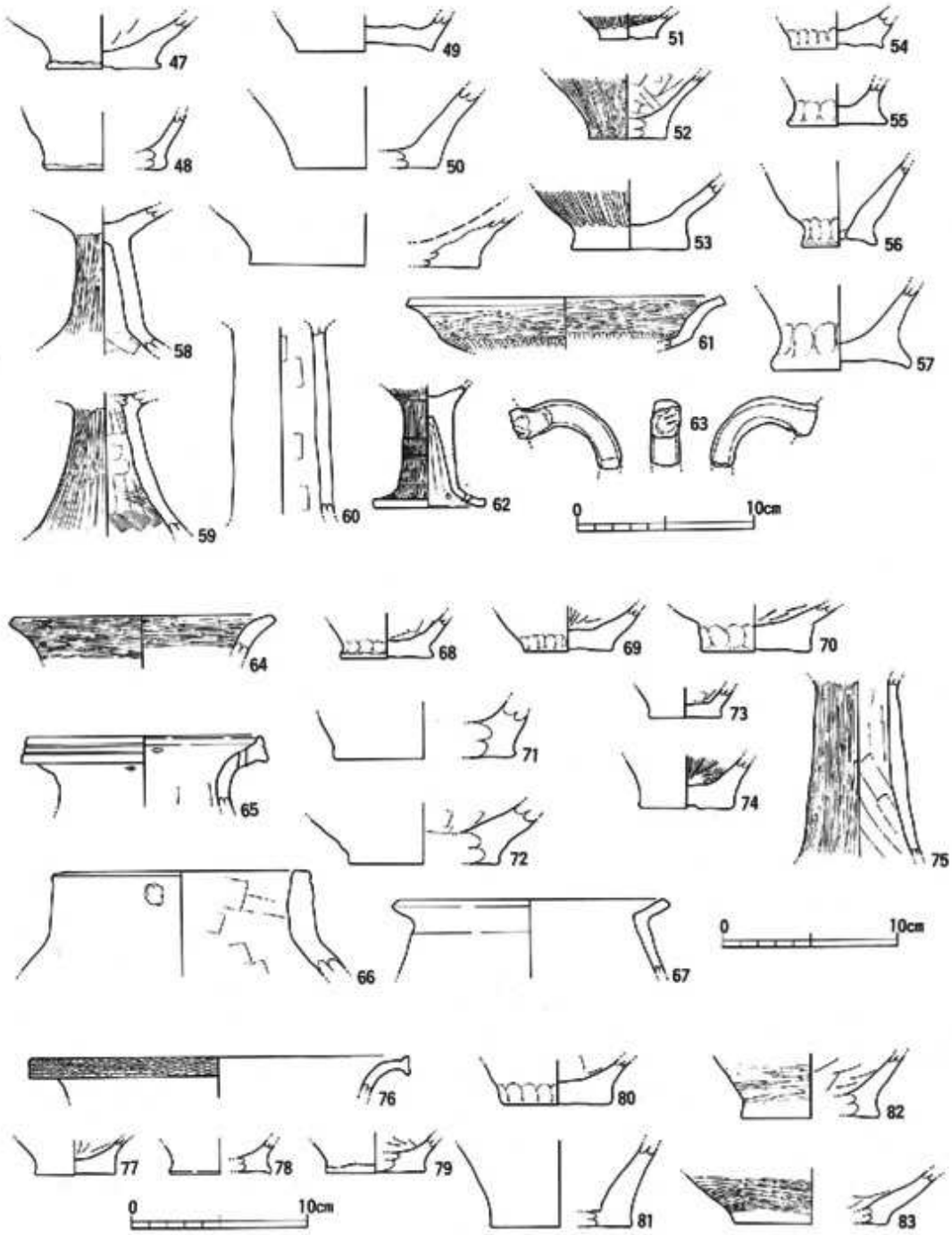
第24図　各調査区柱状土層図（1/80）

出土遺物

各グリッドの上下の遺物包含層からはコンテナにして約5箱の土器、石器などを検出している。しかし、遺物の取上げに際して、各グリッドともに、重機により掘り上げた包含層中から

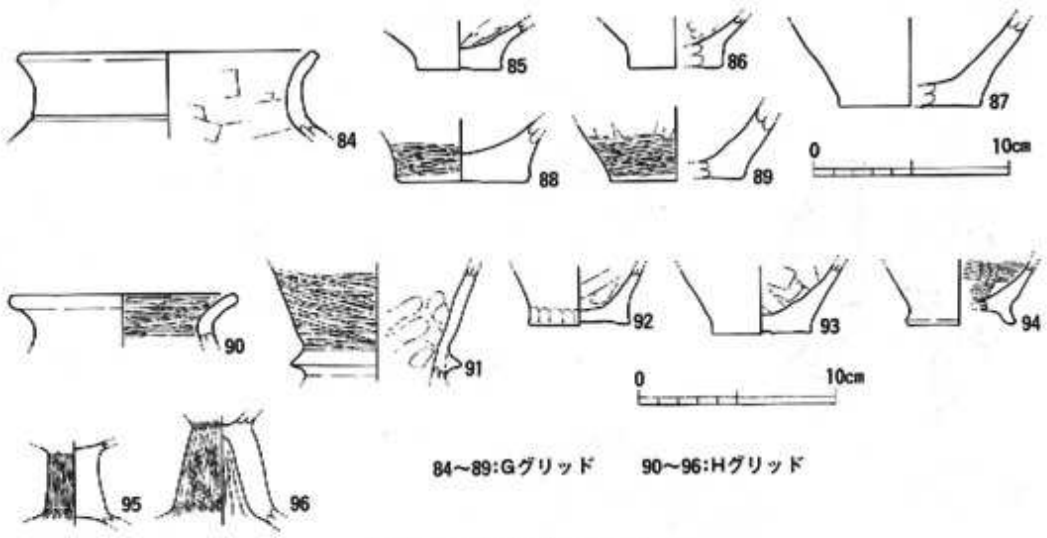


第25図　出土遺物（土器 1 / 4）



1～8：Aグリッド　16～23：Bグリッド　16～23：Cグリッド
24～63：Dグリッド　64～75：Eグリッド　76～83：Fグリッド

第26図　出土遺物（土器1/4）



第27図　出土遺物（土器1/4）

上下の包含層の遺物を一括して採集しているために、層位的に明確に分離しているわけではない。以下、特徴的なものについてのみ記すことにする。

前期：壺、甕などの器種が出土している。概して、新段階のものが多く、ヘラ描き沈線をもつ84や、断面三角形の貼り付け凸帯の91などがある。

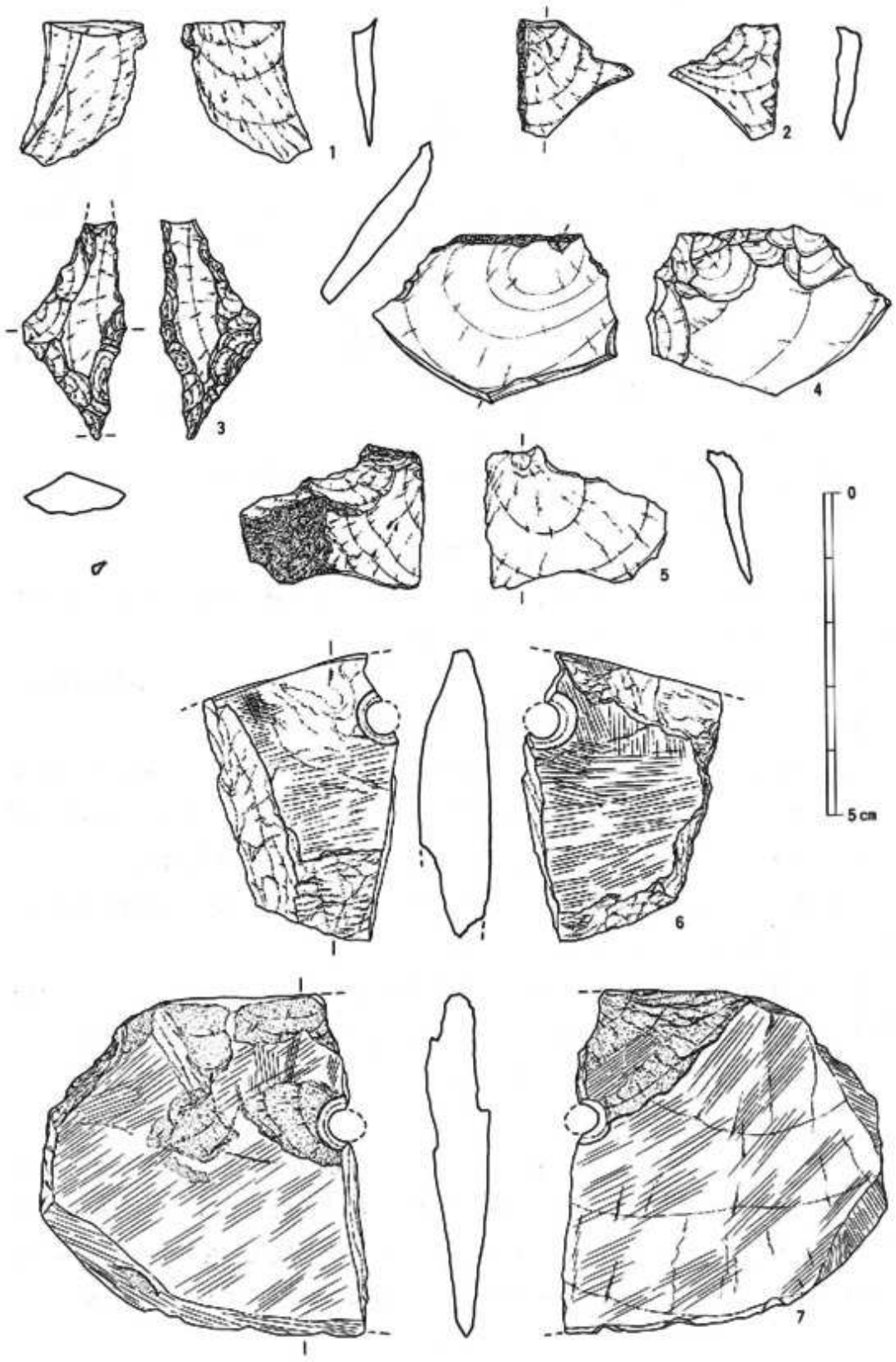
中期：第Ⅱ様式から第Ⅳ様式まで、すべての時期の土器が出土している。器種は壺、甕、高杯、鉢などである。特徴的なものに63の把手や、62の小型脚付碗があげられる。いずれも丁寧なミガキが施されている。壺には櫛描き文様のある10・76や凹線文の65などがある。

後期：各グリッドともに、後期に属する土器は多くない。壺、甕の底部などが多く出土しており、後期前半～後半にかけての時期の土器が出土している。

また、石器類も、打製、磨製のものを含めて総数100点ほどの量で出土しており、7の結晶片岩、6の粘板岩などの石材を用いた石庖丁やサヌカイト製の石鏃（3）、削器、石小刀、石剣、石槍などの道具類や剥片がある。いずれも概ね中期のものと考えられる。

まとめ

今回の調査では、推定される亀井遺跡の集落域のほぼ中心にあたることから、遺構、遺物包含層ともに良好な状態で確認することが予想されたが、掘削深度および調査区の面積等で制約されることが多く、充分な調査がおこなえなかった。しかし、確認した包含層の厚さや遺物の内容等を考慮すれば、集落の中心部分であるといっても過言ではないであろう。（青木）



第28図　出土遺物（石器 1/1）

7　郡川遺跡（89-224）の調査

調査地　　教興寺247－１番地

調査年月日　平成元年７月28日～29日

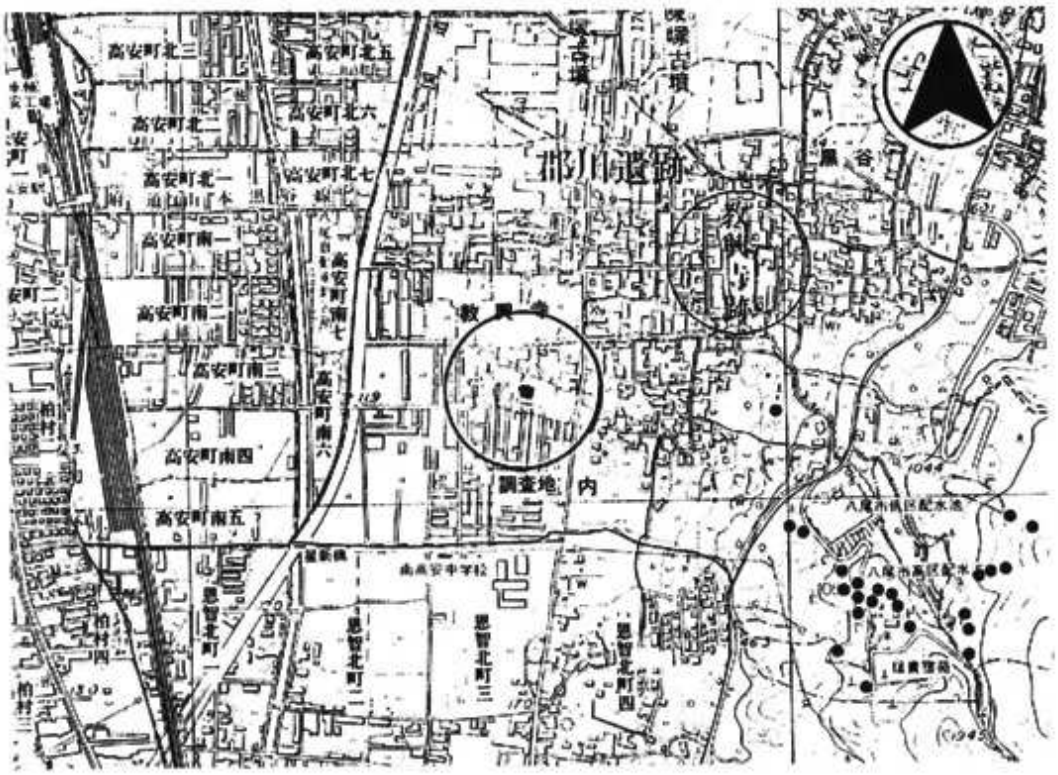
調査概要

本調査は、個人住宅の建設に伴う事前の調査として実施した。

調査は、郡川遺跡の範囲確認および隣接する塚本塚古墳に伴う遺構の確認を目的として、調査地内に１ｍ×３ｍのトレンチを設定し、建築工事に際して破壊がおよぶ掘削深度までの現地表面下約1.2ｍまでを対象として調査を進行した。なお、トレンチの掘削はすべて人力による排土をおこない、遺構の精査、確認につとめた。

調査区における層序は次の通りである。１盛土、２旧耕土、３暗灰色微砂質土、４黄灰色微砂質土、５茶褐色砂礫混じり土、６褐灰色砂礫混じり土　７暗褐色砂質土（黄褐色土と暗褐色土の砂礫混じり）、８褐色砂混じり土、９淡褐色粘質土、10暗灰褐色砂質土。

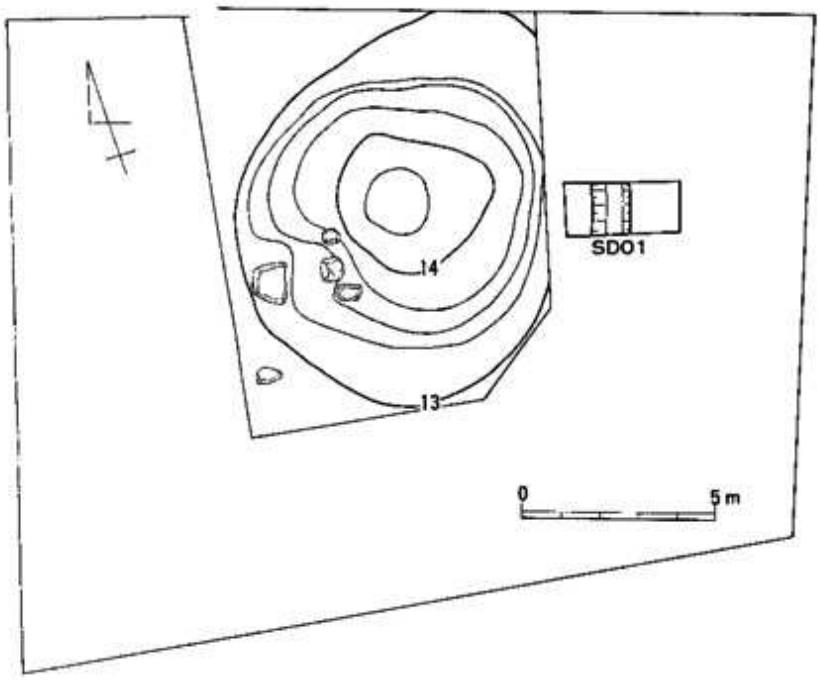
現地表面下約70㎝で９淡褐色粘質土をベースとした溝を１条検出した。また同一レベルで確認した８褐色砂混じり土の堆積状況を考慮すれば、おそらくこれらは塚本塚古墳に伴う周溝と



第29図　調査地周辺図（1/13000）

墳丘の盛土であると考えられる。溝埋土の7暗褐色砂質土の大部から若干量の須恵器、土師器などの土器片が出土しており、古墳の築造時期の一端を知ることができる。

また溝のベースの下層となる10暗灰褐色砂質土には弥生後期の土器片が多く含まれており、郡川遺跡の遺物包含層であることがわかる。



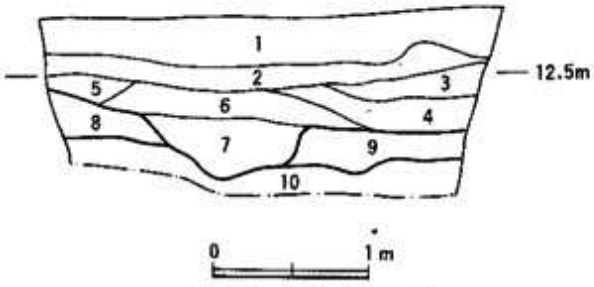
第30図　調査区及び塚本塚古墳墳丘測量図（1/200）

なお、今回の調査に際し、併せて塚本塚古墳の墳丘測量図の作成を実施した。その結果、今回検出した溝の底面を基底として、現状での墳丘の高さは約2.5mで、直径約10mの円墳であることが判明した。

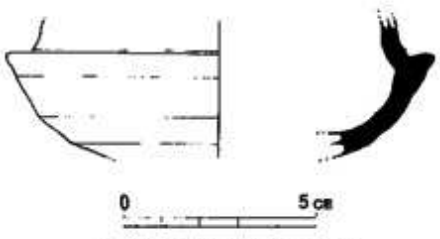
出土遺物　溝埋土下部より須恵器坏身が出土している。やや丸みをおびた底部をもち、受部の形状や外面のヘラ削りなどから概ね5世紀後葉の時期が考えられる。

まとめ

塚本塚古墳は、八尾市教委の遺跡台帳によると南西部に開口する横穴式石室をもつ前方後円墳の可能性が指摘されているが、内部主体については不明である。今回の調査により墳丘規模や築造時期が判明した。また、下層で確認した遺物包含層の存在からは郡川遺跡の弥生後期の集落域が近在することを示している。（青木）



第31図　北壁土層図（1/50）



第32図　出土土器図（1/2）

8．亀井遺跡（89-041）の調査

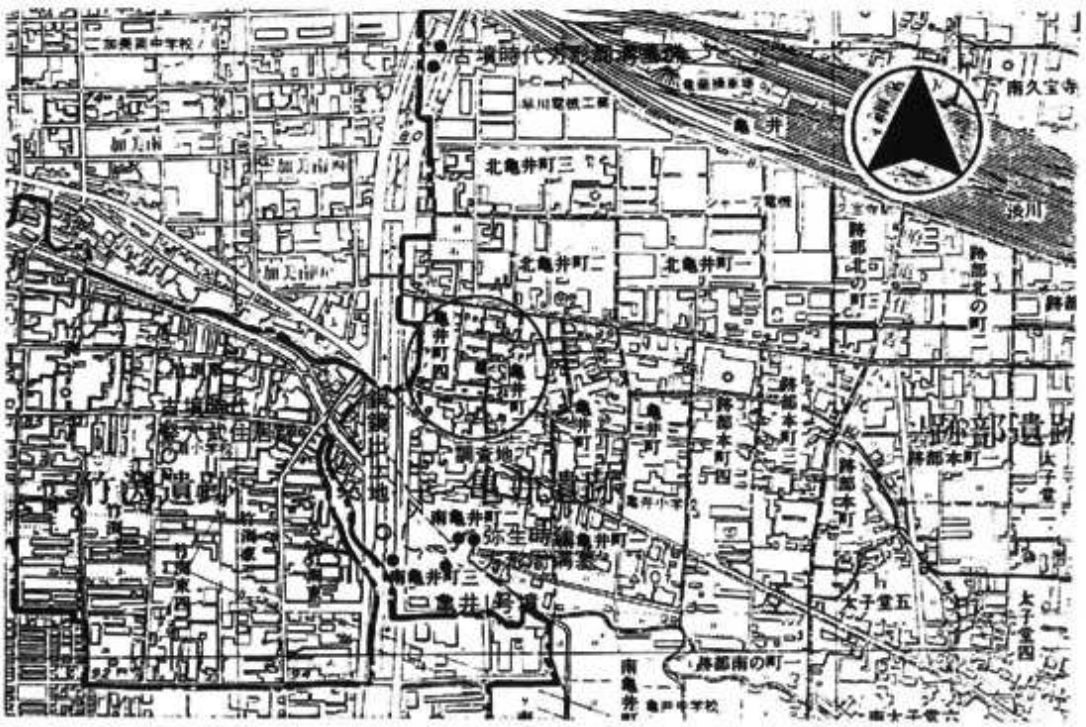
調査地　　亀井町４丁目51－１,51－２

調査期間　平成元年８月18日

１．調査概要

亀井遺跡は、弥生時代を通じて営まれた集落を主体とする遺跡であり、本調査地は、亀井遺跡の中では西部に位置する。今回の調査は、共同住宅建築に伴って実施した遺構確認調査である。本調査は、建物部分内中央に３×３ｍのグリットを１ヶ所設定し、地表下1.5ｍまでを機械掘削し、以下1.2ｍを機械及び人力によって掘削を行った。

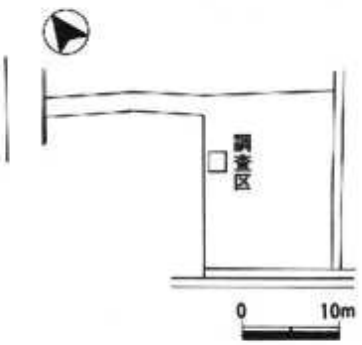
調査地の基本層序は、厚さ0.3ｍの盛土以下２層茶灰色砂質土、３層灰褐色粘質シルト、４層淡青灰色粘土、５層淡青灰色細砂の堆積が認められた。遺物は２層から近世の土人形（第図）、３層からは中世の土師器細片が若干出土したが、図化できるものはなかった。４層では植物遺体のみしか含まれておらず、５層の砂層では湧水が著しい為、上げ土からの遺物採集を行なったが、遺物は包蔵されていなかった。又５層の砂層の堆積状況と当該地周辺の地形的状況から考えて本層は旧大和川の氾濫原と思われる。



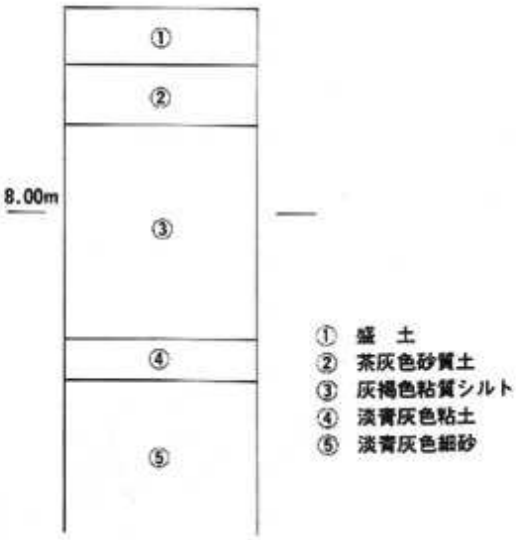
第33図　調査地周辺図（1/13000）

2．まとめ

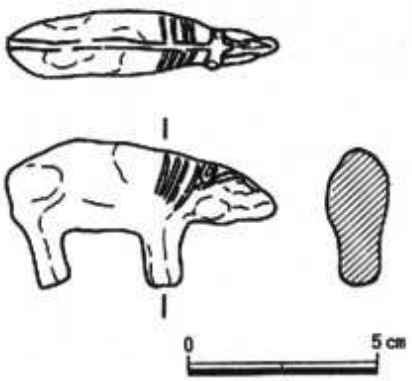
今回の調査では、出土遺物は少量でしかも図化できる明確なものはなく、遺構も検出できなかったが、土層観察から考えて当刻地は比較的浅いところから中世の遺物が出土しており、このことから中世期以降は比較的安定した土地であったと思われる。またその上の近世の土層に関しては、整地土または人為的な堆積状況を示している。(岡田)



第34図　調査区設定図（1/800）



第35図　基本層序模式図（1/40）



第36図　出土遺物実測図（1/2）

9．楽音寺遺跡（89-167）の調査

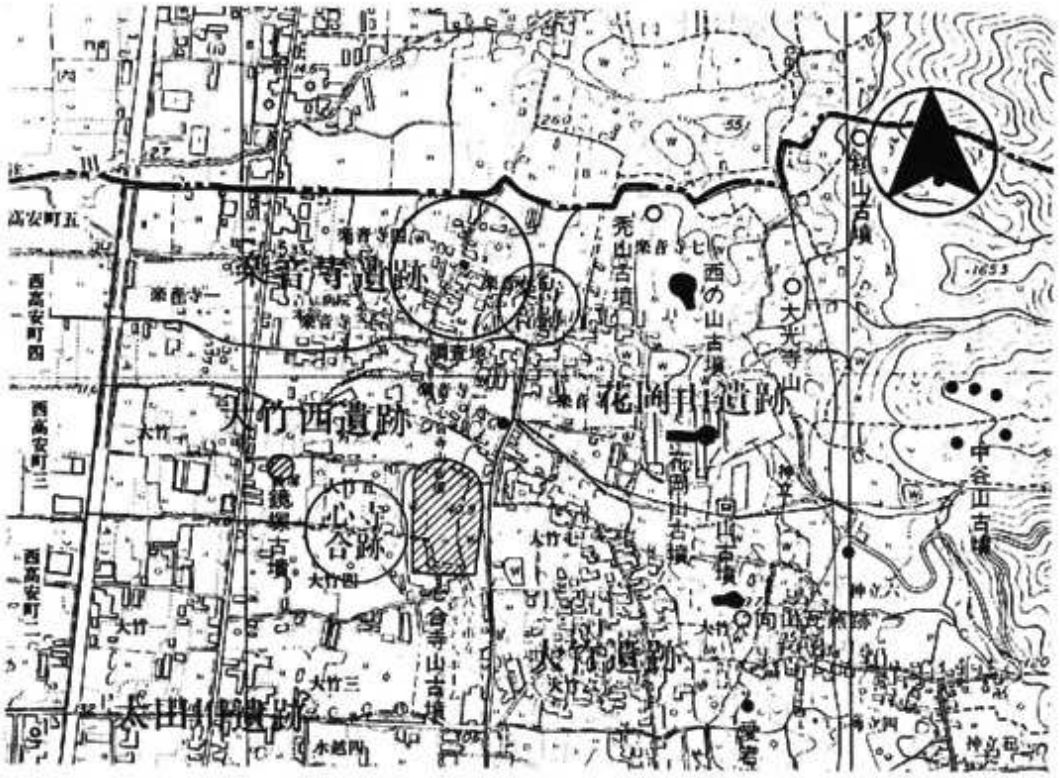
調査地　　楽音寺５丁目67,65

調査期間　平成元年８月28日

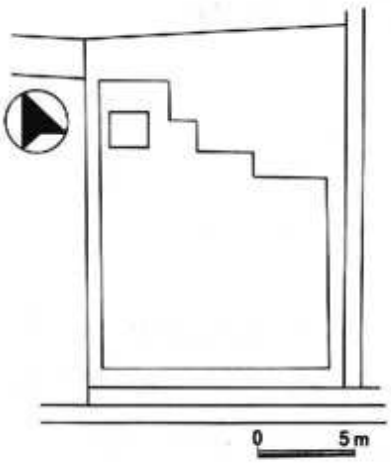
１．調査の概要

当刻地周辺は、縄文時代後期の遺構、弥生時代の集落跡、古墳時代では高安古墳群が拡がり、中世では館跡が検出されているなどの数々の遺構・遺物の存在が認められる。本調査では、住宅建設を計画している旨の事業者からの届出に基づき、先述した遺構の確認調査を実施した。

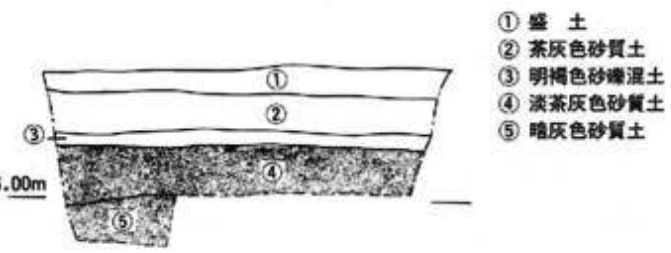
本調査は、調査地北西部に２×２ｍのグリットを１箇所設定し、人力で掘削・精査を行なった。調査地の基本層序は、厚さ0.2ｍの盛土以下２層茶灰色砂質土、３層明褐色砂礫混土、４層淡茶灰色砂質土、５層暗灰色砂質土の堆積が認められた。遺物は４層から５層にかけて古墳時代の土師器細片、須恵器小破片が出土したが図化できたものは第40図に示す通りである。時期的に埴輪片のタガの形状からみて６世紀代のものであり、他の２点の須恵器に関してもほぼ同時期頃のものであろう。



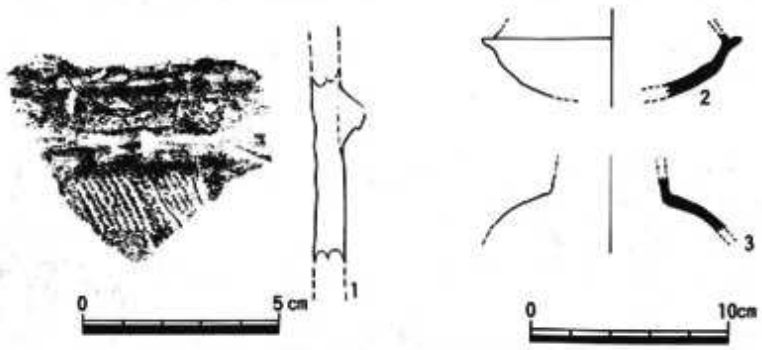
第37図　調査地周辺図（1/13000）



第38図　調査区設定図（1/400）



第39図　土層断面図（1/40）



第40図　出土遺物実測図（1/2・1/4）

2．まとめ

今回の調査では、調査面積も限られていたせいもあって、残念ながら当初想定していた古墳時代の集落遺構を検出することはできなかった。しかし、土層観察の結果、4層から5層にかけて6世紀代の遺物が包蔵されていることから遺構の存在は明確であろう。（岡田）

10. 亀井遺跡（89-284）の調査

調査地　　亀井町１丁目７番地２

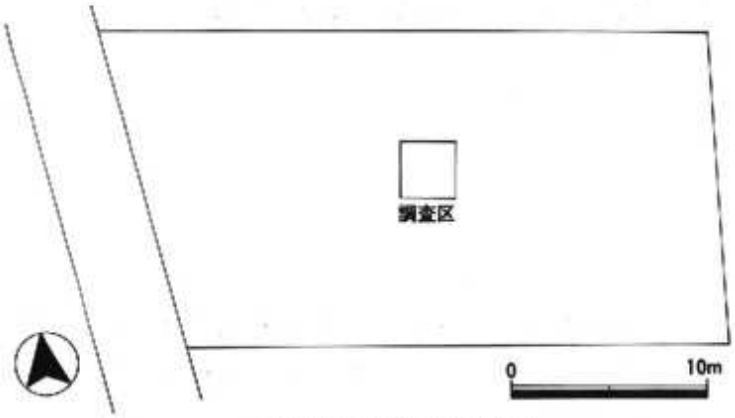
調査期間　平成元年９月１日

１．調査の概要

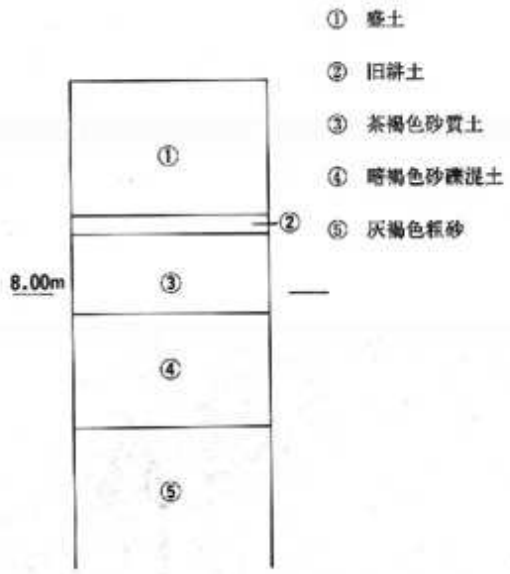
本調査は、工場建設に伴って実施した遺構確認調査である。当該地周辺は、近畿自動車道建設工事に伴って調査された結果、弥生時代において大集落の一部であることが確認されている。

本調査は工事部分中央に２×２ｍのグリットを設定し、GL-80㎝まで重機により盛土、旧耕土を除去したのち、以下重機と人力を併用してGL-230㎝迄掘削を行なった。調査地の基本層序は、現地表下90㎝迄盛土で、以下10㎝の旧耕土の下に第３層茶褐色砂質土、第４層暗褐色砂礫混土、第５層灰褐色粗砂の堆積が認められ、これより以下は湧水が著しいため重機からの上げ土によって遺物採集を行なった。遺構は検出されず、遺物は第３層より第43図（１，２）の唐津焼埦２点と第４層より中世の丸瓦の破片が出土し、瓦は凹面に布目が残存し、凸面にはわずかにタテ方向のタタキがみられる。

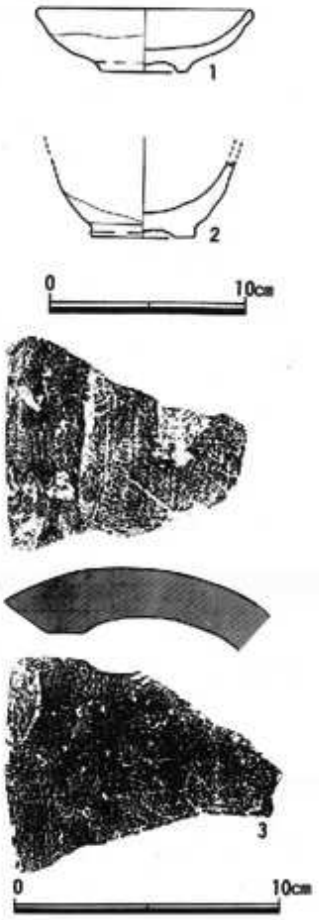
第41図　調査地周辺図（1/13000）



第42図　調査区設定図（1/400）



第44図　土層断面模式図（1/40）



第43図　出土遺物実測図
（陶器1/4・瓦1/3）

2．まとめ

今回の調査では、近世から中世にかけて若干の遺物が出土したのみで、それも明瞭な形をとどめるものはなく、遺構も検出されなかった。また第5層以下は湧水が著しく河川の氾濫原であると思われ、それより以下の掘削に関しては断念させざるをえない状況で、当遺跡の明確な性格を知ることができなかった。そういったことから今後当該地周辺の調査を行なう際にはその実態を把握するためにも面的な調査を実施する必要がある。（岡田）

11. 久宝寺遺跡（88-245）の調査

調査地　神武町168,183,184－1

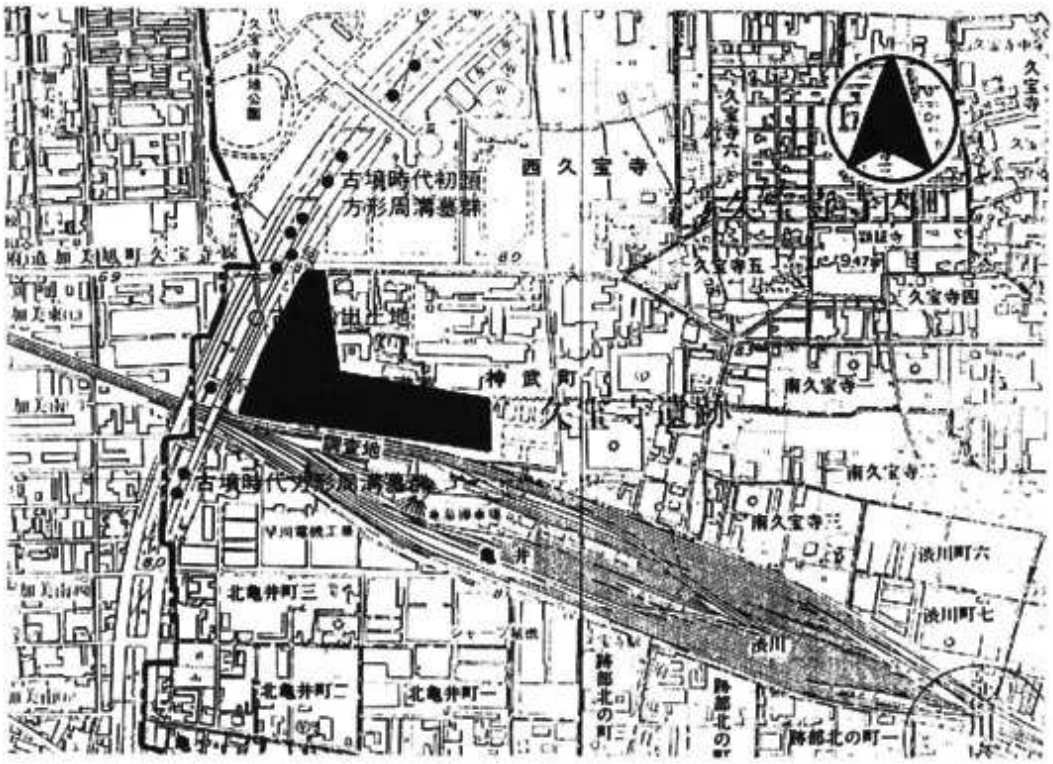
調査期間　平成元年９月11日

1．調査概要

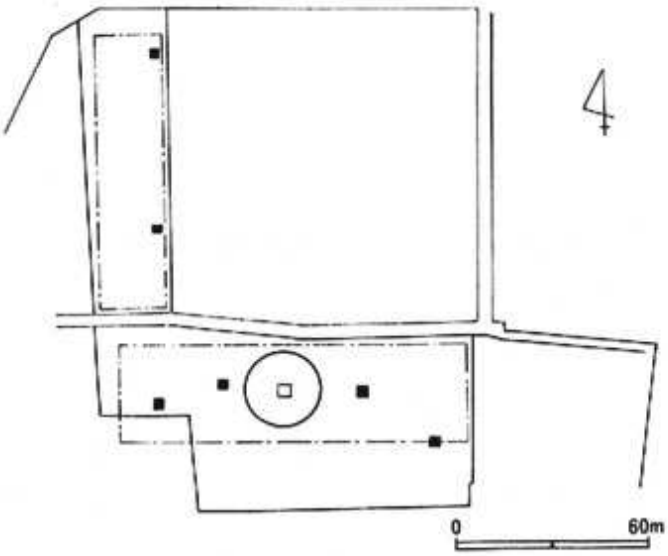
本調査は、倉庫建設に伴って昭和57年度より今回を含めて３度にわたって実施された遺構確認調査である。調査地のすぐ西側では近畿自動車道工事に伴って発掘調査されており、弥生時代から中世にかけて貴重な遺構及び遺物が検出されている。

本調査は前回同様、建設予定地に3×3mのグリットを１箇所設定し、GL-140cmの盛土を重機掘削した後以下を重機と人力を併用してGL-3.4mまで前回迄の資料を参考に掘削を行なった。

調査地の基本層序は厚さ1.4mの盛土を除去すると第２層緑灰色粘土、３層淡緑灰色粘土、４層茶灰色粘土、５層暗灰色粘土、６層灰色細砂の堆積が認められ、遺物は５層から庄内期から布留期にかけての遺物が出土したが、細片がほとんどで量も前回よりは少なく、わずかながら図化できたものを第48図に掲載した。

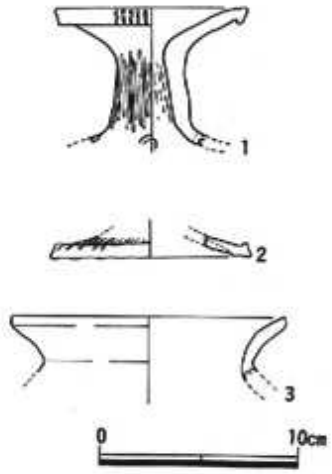


第45図　調査地周辺図（1/13000）

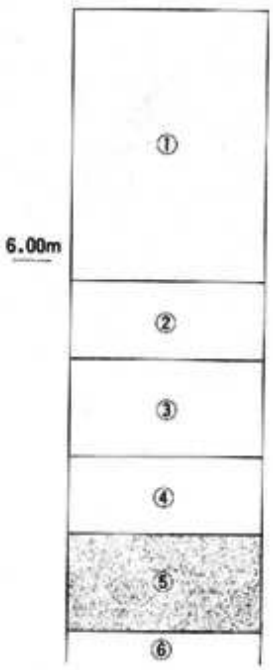


□本調査 ■

第46図　調査区設定図（1/2400）



第48図　出土遺物実測図（1/4）



第47図　基本層序模式図（1/40）

① 盛土
② 緑灰色粘土
③ 淡緑灰色粘土
④ 茶灰色粘土
⑤ 暗灰色粘土
⑥ 灰色細砂

2．出土遺物

1は器台で、口縁部に刻み目を有し、脚部に4方孔の痕跡がある。口縁部内外面はナデ、脚柱部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はしぼり目を有す。2は高坏脚部片で外面に刻み目を有し、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。3は甕の口縁部で斜上方に外反して伸び、内外面はヨコナデを施す。

3．まとめ

今回の調査では、前回と比較して遺物量こそ少なかったが、当初想定していた通り、古墳時代前期の包含層を確認することができた。また土層の基本層序から全ての調査結果を通してほぼ同一レベルで古墳時代前期の包含層が存在することにより、この時期の生活域が比較的安定した土地であったことがうかがわれる。ただ、調査の期間及び面積等の制限から面的に遺構をとらえることができなかった。（岡田）

12. 小阪合遺跡（89-255）の調査

調査地　　青山町１丁目50－２,53

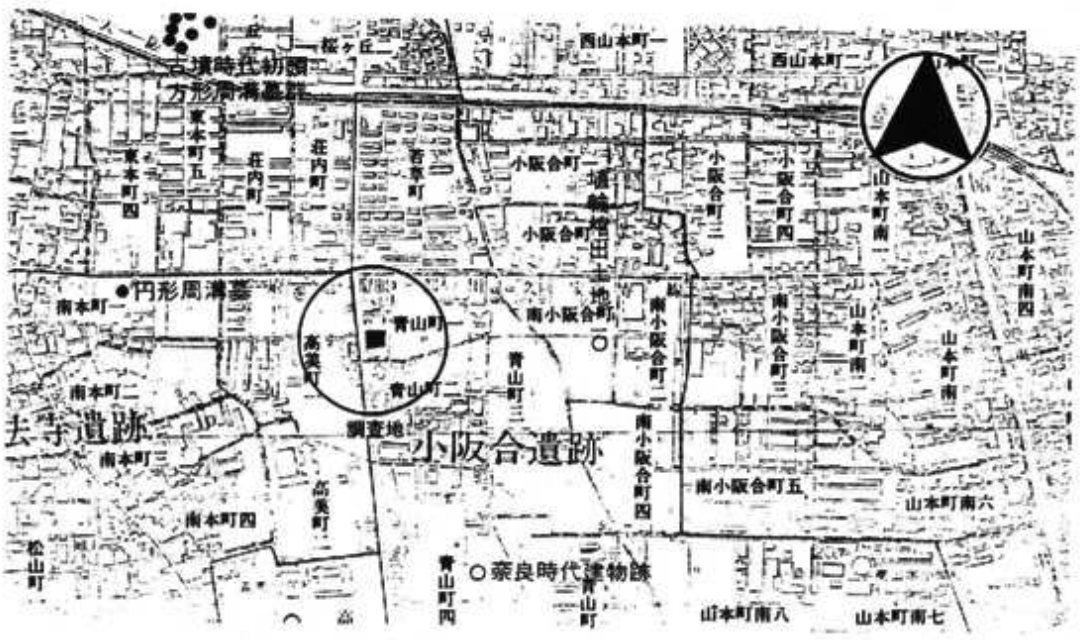
調査期間　平成元年９月21日～９月30日

１．調査概要

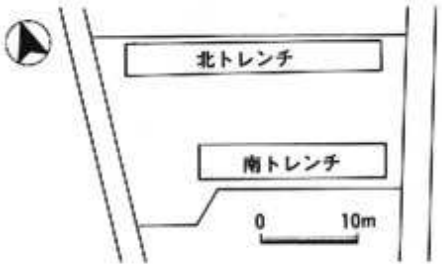
小阪合遺跡は弥生時代～近世に至る複合集落遺跡である。当調査地の南隣接地では前年度に当教育委員会によって遺構確認調査を実施しており、古墳時代～中世までの集落の存在を明らかにしている。

本調査は共同住宅建築に伴って実施した発掘調査である。調査区南側に３×19ｍ、北側に３×26ｍのトレンチをそれぞれ設定し、地表下0.7ｍ迄を重機により掘削した後、以下0.5ｍを人力により精査した。

調査地の基本層序は、厚さ0.5ｍの盛土及び旧耕土以下２層暗茶灰色砂質土、３層淡茶褐色砂礫混砂質土、４層黄褐色粘質土の堆積が認められ、２層は中世の遺物を包蔵する層で部分的に近世の開拓の為、削平を受けている。３層は、奈良時代～古墳時代の遺物を含む層で、４層上面で遺構を検出した。



第49図　調査地周辺図（1/13000）



第50図　調査区設定図（1/800）

2．検出遺構

南北両トレンチの検出遺構、溝（ＳＤ）群、ピット（ＳＰ）群は第１表の遺構計測表に示す通りであるが、これら以外に南トレンチ最東端で落ち込み状遺構を検出した。これは東側へ緩やかに落ち込むもので、断面観察とその出土遺物の状況からみて弥生時代の包含層に奈良時代の遺構が切り込んでいるのが認められた。遺構の検出幅は0.68ｍ、深さ0.11ｍを測り、埋土は暗褐色粘質土である。又、北トレンチでは土坑一基が検出され、遺構の南側は調査区外に至り、検出長径0.65ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は３層に分層され、上層から淡灰色砂礫混砂質土、灰色細砂、褐灰色粘質土であり、全体的に炭化物を含む。

3．出土遺物

南トレンチ

ＳＤ－01　弥生時代後期から奈良時代にかけてのもので、Ｖ様式系甕の底部(3,4)、小型丸底壺の口縁部(1)、土師器坏(2)がある。

ＳＤ－02　弥生時代後期の台付鉢の底部と思われるもの１点(5)、ほぼ完形品に近い、底部外面に「十」のヘラ記号を有す奈良時代の坏(盤)(9)、それと同時期頃の須恵器蓋坏身の体部片(7)がある。

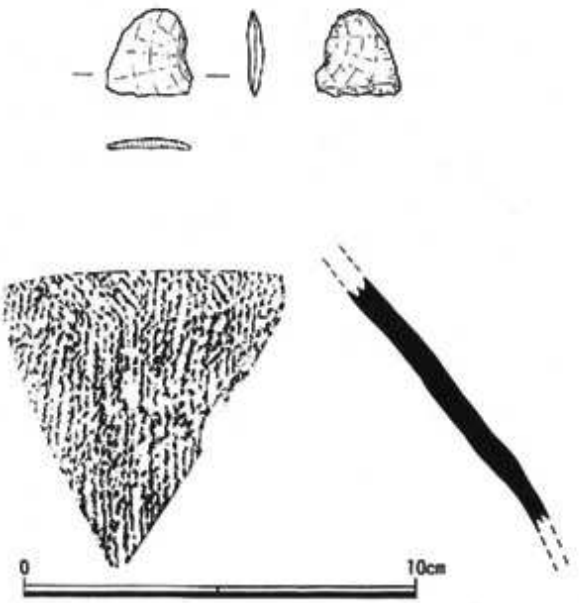
ＳＤ－03　図化できるものは、古墳時代の高坏の坏口縁の一部と思われるもの(10)、で他は同時期と思われる土師器の細片である。

ＳＤ－04　遺物量は他に比べて多量であるが、そのほとんどが細片であり、図化できたものは古墳時代の高坏脚柱部(12)と、同じく高坏脚部と思われる須恵器(11)の２点である。

ＳＤ－05　陶邑編年のⅡ－１型式にあたる６世紀前半と思われる坏身(14)が１点、奈良時代の坏が１点(13)出土した。

ＳＤ－06　図化できたものは、須恵器坏身２点(15,16)で古墳時代中期頃のものと思われる。

ＳＤ－07　須恵器坏蓋(17,18)のつまみか



第51図　南トレンチ包含層（上/サヌカイト・下/韓式土器片）(1/2)

ら7世紀代のものと思われる。

ＳＰ－02　Ｖ様式系甕の底部の小片が数点出土したが図化できるものはなかった。

落ち込み　Ｖ様式系甕の底部小破片が少量、奈良時代の須恵器坏身42、土師器の鉢体部片43が出土した。

包含層　包含層からの出土遺物は多量であったが、そのほとんどが細片で、図化できたものは限られており、その時期幅は広く、弥生時代後期～中世に至るものである。(19～41・44～46・第51図サヌカイト及び韓式土器片)

北トレンチ

北トレンチに関しては、遺構からの出土遺物は量的に非常に少なく、また細片がほとんどで、図化できるものはなかった。近世～中世にかけての包含層からは、瓦器埦底部50と唐津焼の台付鉢51の２点であり、須恵器３点（47～49）はSD－08,09付近から出土したもので、時期的に７世紀後半頃と思われる。

4．まとめ

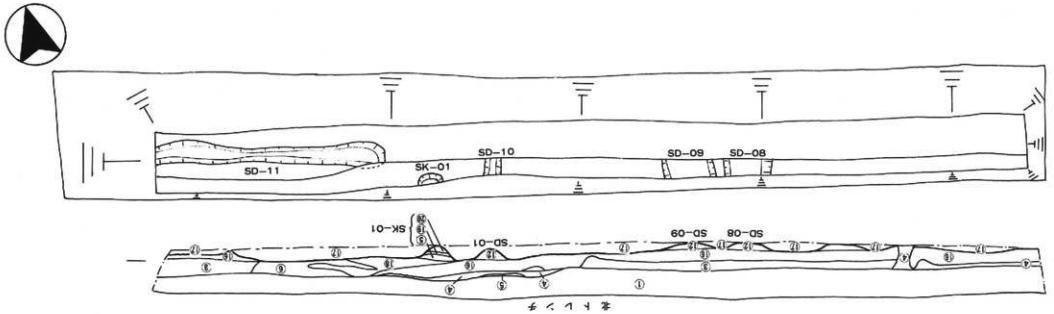
今回の調査では、比較的浅いところから奈良時代～古墳時代の遺構・遺物を検出することができた。南トレンチでは今回調査した古墳時代の遺構面の下層からＶ様式系甕の破片が数点出土している事から弥生時代の遺構が存在することは確実である。又、検出した遺構・遺物からみて遺物だけに限ってみれば、弥生時代後期の甕の破片が混入しており、時期的に新しいところでは奈良時代までとその時期幅が広いわけであるが、遺構の特に溝の掘り形からとらえると、かなり古墳時代の包含層が奈良時代の開拓によって削平を受けているのがわかる。それがすぐ隣の北トレンチでみると、南トレンチとほぼ同時期である古墳時代から奈良時代の遺構面がレベルからみて約0.2m位低くなっており、又包含層の上層は中・近世の開拓によってかなりの削平を受けている。

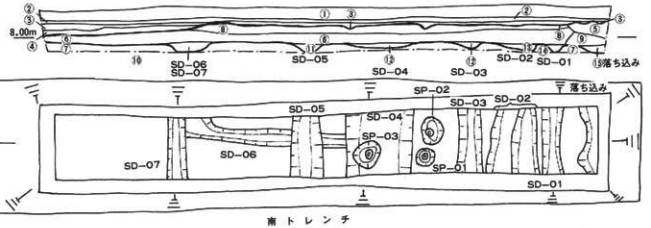
財八尾市文化財調査研究会が調査した第８次小阪合遺跡は、当調査区のすぐ東側にあたり、その調査結果からも古墳時代から奈良時代の集落遺構の存在が確認されている。今回の調査によって部分的にではあるが、小阪合遺跡内での集落遺構の西への拡がりが確認されたわけである。又今回の調査では、期間的に制約がある中にもかかわらず、Ｖ様式系甕の破片出土によって面的には把握できなかったものの、弥生時代の遺構の存在が想定できた。今後、周辺の調査によっては明確な弥生時代以前の集落域が究明されると思われる。(岡田)

第1表　遺構計測表

溝　（SD）					
トレンチ	遺構番号	方　向	幅(m)	深さ(m)	埋　土
南	01	南北	0.5	0.12	暗灰色砂質土
〃	02	南北	1.5	0.22	暗灰色砂礫混粘質土
〃	03	南北	0.76	0.18	暗灰色砂質土
〃	04	南北	1.8	0.11	暗茶灰色砂質土
〃	05	南北	1.1	0.37	暗灰色砂質土
〃	06	東西	0.65	0.1	明褐色粘質土
〃	07	南北	0.49	0.11	明褐色粘質土
北	08	南北	1.34	0.1	暗褐色粘質土
〃	09	南北	1.35	0.05	暗褐色粘質土
〃	10	南北	0.42	0.05	暗褐色粘質土
〃	11	東西	0.6	0.01	暗灰色粘質土

ピット（SP）					
トレンチ	遺構番号	形　状	直径(m)	深さ(m)	埋　土
南	01	円形	0.5	0.2	暗灰色粘質土
〃	02	円形	0.7	0.2	暗灰色粘質土
〃	03	円形	0.7	0.25	暗茶褐色粘質土



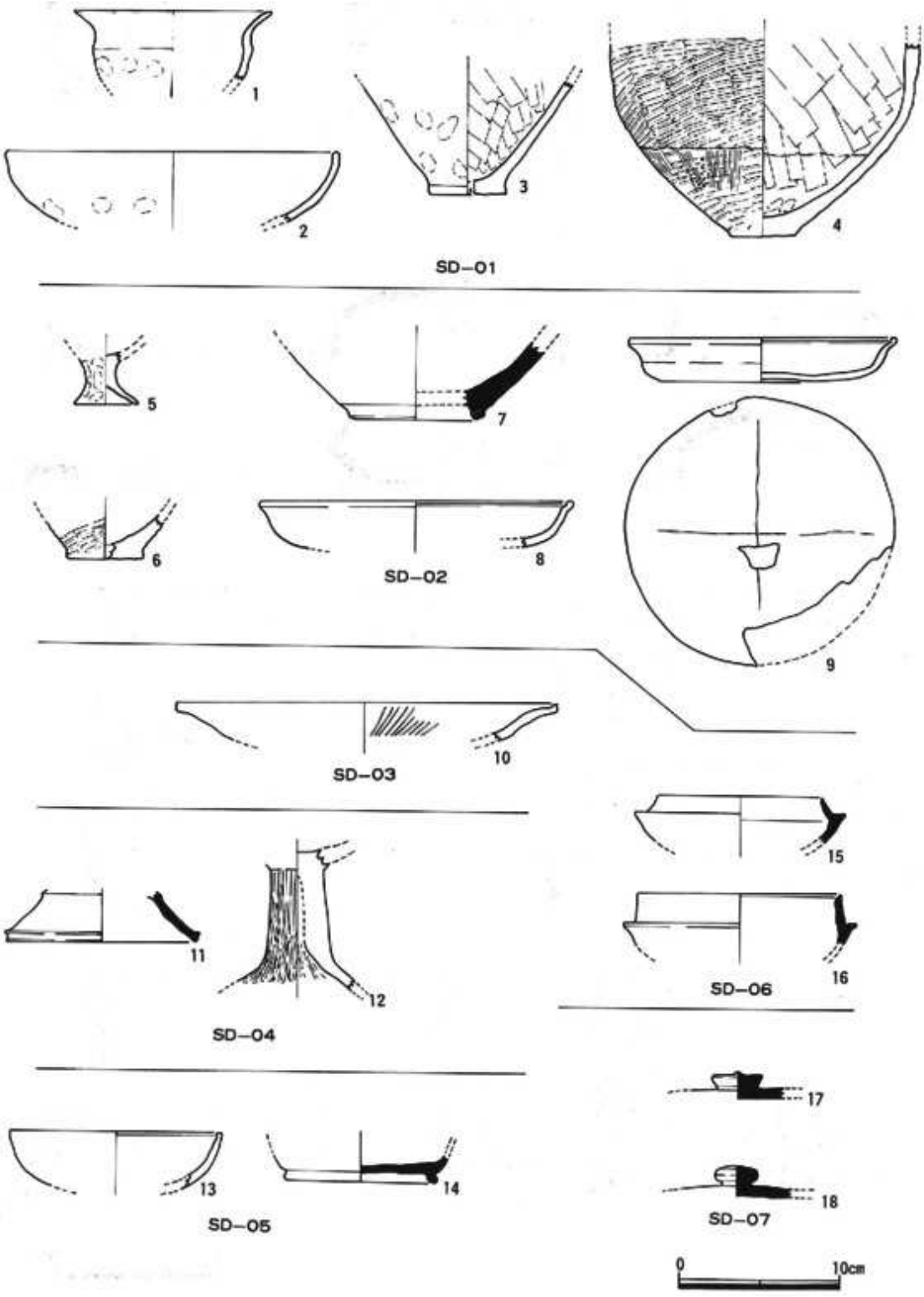


① 盛　土
② 旧耕土
③ 淡緑灰色微砂質土
④ 茶褐色礫砂質土
⑤ 暗茶褐色砂礫混砂質土
⑥ 淡茶褐色砂礫混砂質土
⑦ 黄褐色シルト
⑧ 暗茶灰色砂質土
⑨ 灰黒色粘質土
⑩ 明褐色粘質土
⑪ 暗灰色砂質土
⑫ 黒褐色粘質土
⑬ 暗褐色粘質シルト
⑭ 灰褐色砂質土
⑮ 暗灰色シルト
⑯ 褐色礫混土
⑰ 黄褐色粘質土
⑱ 明褐色砂礫混砂質土
⑲ 緑灰色微砂
⑳ 黒色砂礫混粘質土

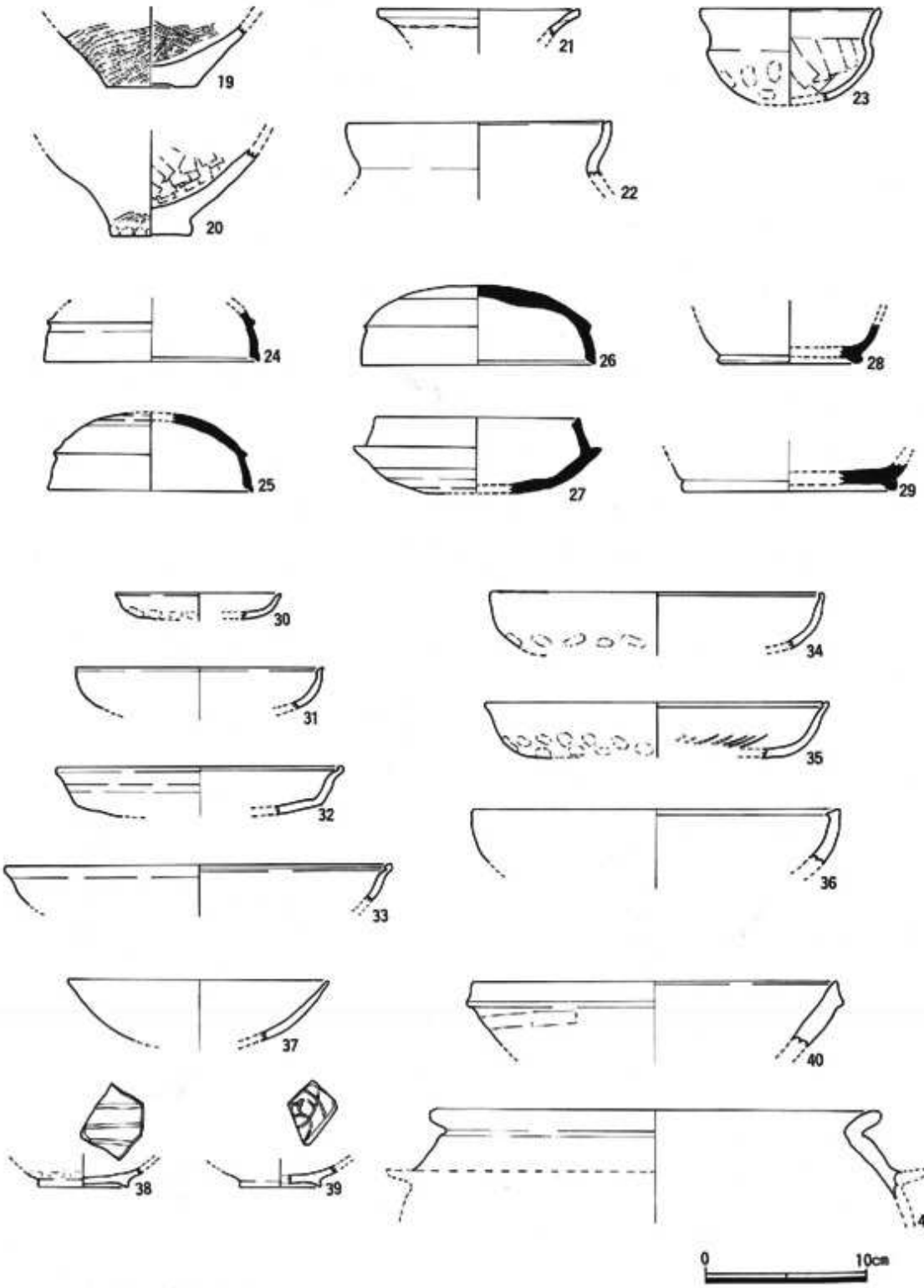
0　5m

第52図　南北トレンチ平・断面図（1/100）

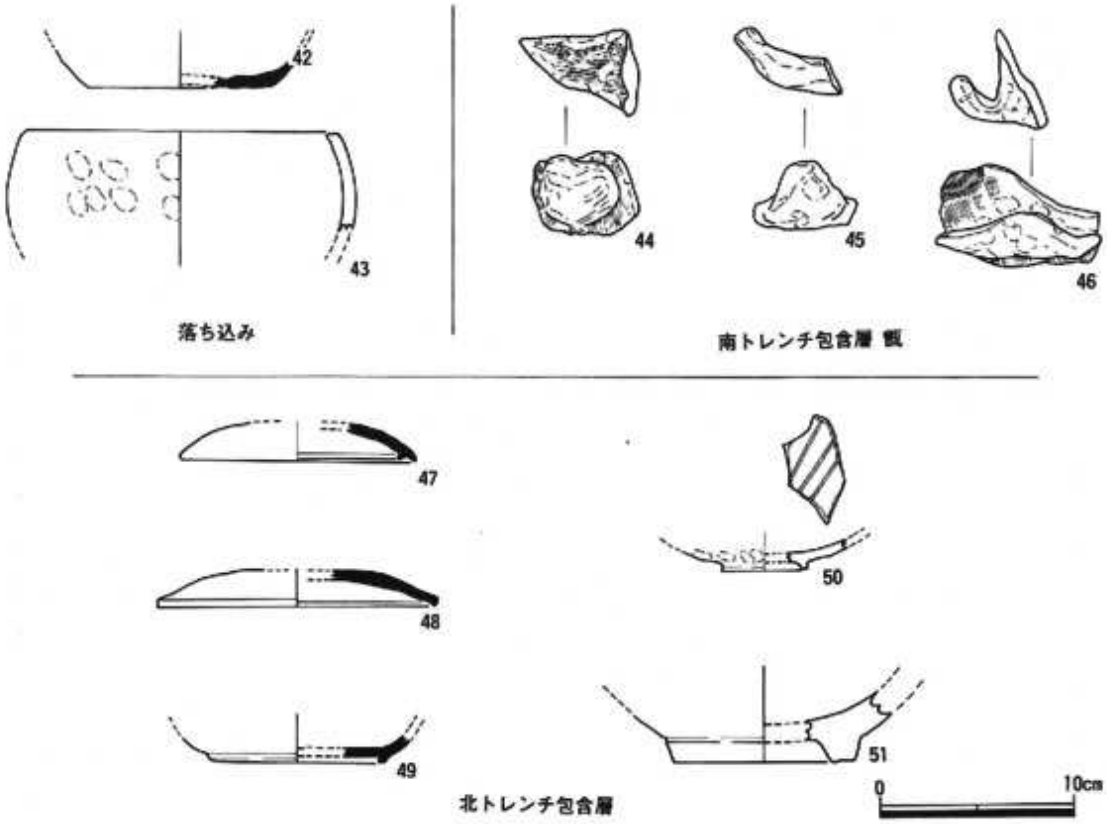
第52図　南北トレンチ平・断面図（1/100）



第53図　南トレンチ遺構別出土土器（1/4）



第54図　南トレンチ包含層出土土器Ⅰ（1/4）



第55図　南トレンチ落ち込み・南北両トレンチ包含層出土土器Ⅱ（1/4）

第2表　遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率)(cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
1	広口壺	推定口径 12.0(1/3)	外－口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、ユビオサエ。 内－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	暗褐色。精良。白色砂粒、雲母を多量含む。	焼成良好。
2	土師器坏	推定口径 20.0(1/3)	外－ナデ、ユビオサエ。 内－ナデ。	明褐色。精良。	焼成良好。
3	甕	底径 4.6(完存)	焼成前に底部穿孔。 外－胴部ユビオサエ。底部ナデ。 内－ヘラナデ。	茶褐色。精良。 雲母、角閃石を少量含む。	焼成良好。
4	甕	底径 3.8(2/3)	外－胴部タタキ(3本/1cm)。底部ナデ。 内－胴部ヘラナデ。底部ユビオサエ。	茶褐色。石英、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。外面一部煤付着。
5	台付甕	底径 3.8(完存)	外－ユビオサエ。 内－ナデ。	外－暗灰褐色。 内－茶褐色。 白色砂粒を多量含む。	焼成良好。内、外面に一部煤が付着。
6	甕	推定底径 4.2(1/4)	外－胴部タタキ(3本/1cm)。底部ナデ。 内－ナデ。	暗茶褐色。 白色砂粒、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
7	須恵器甑	推定高台径 7.6(1/3) 高台高0.9	高台は貼り付け。 内、外－回転ナデ。	灰白色。密。白色砂粒を含む。	焼成良好。堅緻。
8	土師器坏	推定口径 19.0(1/6)	外－口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内－口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	明灰褐色。精良。 白色砂粒、角閃石、雲母を含む。	焼成良好。
9	土師器坏	口径 16.0(完存) 器高 2.6	外－口縁部ヨコナデ。体部ナデ、ユビオサエ。 内－口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	明褐色。白色砂粒、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。底部外面に「十」のヘラ記号を有す。
10	土師器高坏	推定口径 23.0(1/7)	外－口縁部ヨコナデ。 内－口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。	淡褐色。精良。 角閃石を多量、雲母を少量含む。	焼成良好。

第3表　出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率)(cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
11	須恵器高坏	推定脚底径 11.6(1/6)	内、外一回転ナデ。	青灰色。密。	焼成良好。堅緻。
12	土師器高坏	――	内一脚柱部にしぼりめが残存。 外一ヘラミガキ。	淡茶褐色。白色砂粒、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
13	土師器坏	推定口径 13.0(1/12)	内、外一口縁部ヨコナデ。	赤褐色。精良。角閃石を微量含む。	焼成良好。
14	須恵器蓋坏(身)	推定高台径 9.0 (1/4) 高台高 0.6	高台は貼り付け。 内、外一回転ナデ。	青灰色。密。	焼成良好。堅緻。
15	須恵器蓋坏(身)	推定口径 9.8(1/7) 推定受部径 12.8(1/6)	内、外一回転ナデ。	灰色。密。白色砂粒を少量含む。	焼成良好。堅緻。
16	須恵器蓋坏(身)	推定口径 12.2(1/6) 推定受部径 14.2(1/6)	内、外一回転ナデ。	青灰色。密。	焼成良好。堅緻。
17	須恵器蓋坏(蓋)	つまみ径 3.0(完存) つまみ高 1.0(完存)	つまみは貼り付け。 内、外一回転ナデ。	淡灰色。密。	焼成良好。堅緻。
18	須恵器蓋坏(蓋)	つまみ径 2.7(完存) つまみ高 1.2(完存)	つまみは貼り付け。 内一回転ナデ。 外一回転ヘラケズリ。(左回り)	暗青灰色。白色砂粒を多量含む。	焼成良好。堅緻。
19	甕	推定底径 5.2(1/4)	外一胴部タタキ(3本/1cm)。底部ナデ。 内一ハケナデ(6本/1cm)。	内一灰茶色。外一淡褐色。白色砂粒を多量、角閃石、雲母を少量含む。	焼成良好。

第4表　出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率)(cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
20	甕	底径 4.4(完存)	内－ヘラナデ。 外－胴部ナデ。(下半部にタタキの痕跡。)底部ナデ、ユビオサエ。	茶褐色。白色砂粒、角閃石、雲母を多量、石英、チャートを少量含む。	焼成良好。
21	甕	推定口径 12.0(1/8)	内、外－ヨコナデ。外面に接合痕有す。	赤褐色。白色砂粒を多量、角閃石、雲母を少量含む。	焼成良好。
22	甕	推定口径 16.0(1/8)	内、外－ヨコナデ。	赤褐色。白色砂粒、雲母を多量、角閃石、石英を少量含む。	焼成良好。
23	広口壺	推定口径 11.0(1/3)	内－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 外－口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、ユビオサエ。	明褐色。白色砂粒を多量、石英、角閃石、雲母を少量含む。	焼成良好。
24	須恵器蓋坏(蓋)	推定口径 13.2(1/5) 推定稜径 12.6(1/5)	内、外－回転ナデ。	青灰色。密	焼成良好。堅緻。
25	須恵器蓋坏(蓋)	推定口径 12.2(1/10) 推定稜径 11.7(1/10)	内－回転ナデ。 外－回転ナデののち、天井部の1/3回転ヘラケズリ(左回り)。	内、断－青灰色。 外－暗灰色。密。 白色砂粒を多量含む。	焼成良好。堅緻。
26	須恵器蓋坏(蓋)	推定口径 14.2(1/3) 推定稜径 13.8(1/3) 器高 4.8	内－回転ナデ。 外－回転ナデののち、天井部の2/3回転ヘラケズリ(左回り)。	灰色。密。	焼成良好。堅緻。
27	須恵器蓋坏(身)	推定口径 12.2(1/6) 推定受部径 15.0(1/6)	内 －回転ナデ。　外－回転ナデののち、底体部の2/3回転ヘラケズリ(左回り)。	灰青色。密。	焼成良好。堅緻。
28	須恵器蓋坏(身)	推定高台径 8.0(1/4) 高台高 0.5	高台は貼り付け。 内、外－回転ナデ。	淡灰色。密。	焼成良好。堅緻。

第5表　出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率)(cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
29	須恵器蓋坏(身)	推定高台径 12.8(1/4) 高台高 0.7	高台は貼り付け。 内、外－回転ナデ。	灰白色。密。	焼成良好。
30	土師器小皿	推定口径 9.8(1/6)	内－ヨコナデ。 外－口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエののちナデ。	内－明褐色。 外－灰褐色。精良。	焼成良好。口縁部の一部に黒斑有す。
31	土師器坏	推定口径 15.2(1/12)	内、外－ヨコナデ。	淡褐色。精良。	焼成良好。
32	土師器坏	推定口径 17.4(1/8)	内、外－ヨコナデ。	暗茶褐色。チャート、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
33	土師器坏	推定口径 20.0(1/6)	内、外－ヨコナデ。	灰褐色。精良。	焼成良好。
34	土師器坏	推定口径 21.1(1/8)	内－ヨコナデ。 外－口縁部ヨコナデ、底部ユビオサエののちナデ。	内－赤褐色。 外－灰褐色。精良。	焼成良好。
35	土師器坏	推定口径 21.0(1/8)	内－口縁部ヨコナデ。底部ヘラミガキ。 外－口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエののちナデ。	明褐色。精良。	焼成良好。
36	土師器鉢	推定口径 22.2(1/12)	内、外－ヨコナデ。	暗茶褐色。角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。外面に煤付着。
37	土師器坏	推定口径 16.0(1/3)	内、外－ナデ。	淡褐色。石英、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。内面全体、外面口縁部に煤付着。
38	瓦器椀	推定高台径 5.2(1/4) 高台高0.5	高台は貼り付け。 内－底面ナデののち平行ヘラミガキ。	内、外－灰黒色。 断－灰白色。精良。	焼成良好。

第6表　出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率)(cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
39	瓦器椀	推定高台径 4.8(1/4) 高台高 0.4	高台は貼り付け。 内－底面ナデののちヘラミガキ。	内、外－灰色。 断－灰白色。精良。	焼成良好。
40	瓦質鉢	推定口径 22.0(1/8)	内－磨耗のため調整不明。 外－ナデ、ヘラナデ。	灰色。白色砂粒、角閃石を含む。	焼成良好。
41	土師質羽釜	推定口径 26.4(1/8)	内－口縁部ヨコナデ。ナデ。 外－ヨコナデ。	明褐色。石英、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
42	須恵器蓋坏(身)	推定底部径 9.2(1/3)	内－回転ナデ。 外－回転ヘラケズリ(左回り)。	灰白色。密。白色砂粒を多量含む。	焼成良好。堅緻。
43	土師器鉢	推定口径 15.6(1/4)	内－ナデ。 外－ユビオサエののちナデ。	明褐色。精良。白色砂粒、角閃石、雲母を含む。	焼成良好。
44	土師器甑把手	―――	ユビオサエののちハケナデ。	茶褐色。白色砂粒、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
45	同上	―――	ユビオサエののちナデ。	明褐色。白色砂粒、石英、角閃石、雲母を含む。	焼成良好。
46	同上	―――	ユビオサエののちハケナデ。	明褐色。白色砂粒、角閃石、雲母を多量含む。	焼成良好。
47	須恵器蓋坏(蓋)	推定口径 11.8(1/6)	内、外－回転ナデ。	内、断－青灰色。 外－灰白色。密。	焼成良好。堅緻。 外面に一部自然釉が付着。
48	須恵器蓋坏(蓋)	推定口径 14.0(1/7)	内、外－回転ナデ。	青灰色。密。白色砂粒を含む。	焼成良好。堅緻。

第7表　出土遺物観察表

遺物番号	器種	法　量 (現存率) (cm)	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
49	須恵器蓋坏身	推定高台径 8.4(1/4) 高台高 0.4	高台は貼り付け。 内、外ー回転ナデ。	青灰色。密。	焼成良好。 堅緻。
50	瓦器椀	推定高台径 3.8(1/6) 高台高 0.4	高台は貼り付け。 内ー底面ナデののち平行ヘラミガキ。	灰白色。精良。	焼成良好。
51	唐津焼埦	推定高台径 7.0(1/6) 高台高 1.3	削り出し高台を有す。	内ー濁った灰色釉を施す。 外ー暗紫色の釉を施す。 断ー赤色を呈す。	焼成良好。

13. 中田遺跡（89-331）の調査

調査地　刑部３丁目５－２他

調査日　平成元年９月21日

調査の概要

本調査は、中田遺跡の南西部にある当該地において、事務所、車庫付住宅の建築を計画している旨の届出に基づき、遺構、遺物の有無を確認するために実施した調査である。

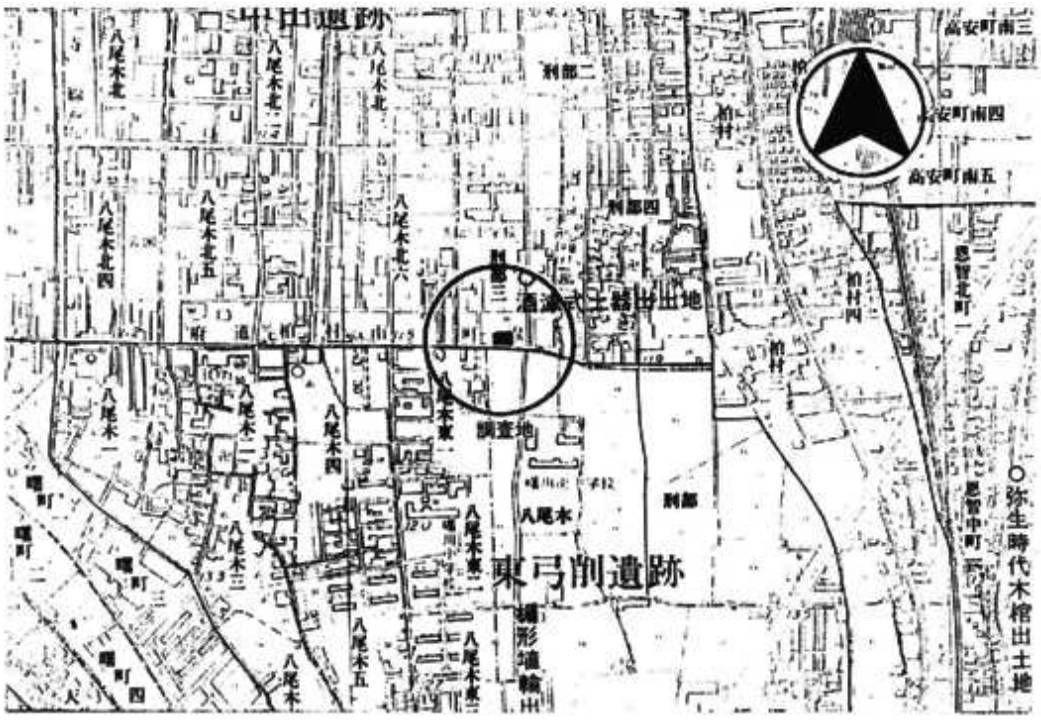
調査の方法は、２ｍ×２ｍの調査坑を敷地中央に１箇所設定し、機械および人力を併用して掘削を実施した。その結果、地表下1.9ｍ以下に古墳時代の遺物包含層を確認した。

出土遺物

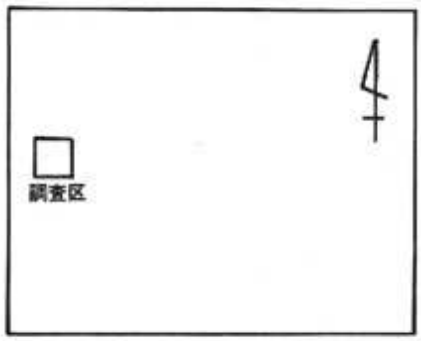
須恵器片、土師器片、サヌカイト剥片

まとめ

当該地付近は、中田遺跡の中でも古墳時代の遺構が多く確認されており、当調査地の北東数十メートルの所でも酒津式土器が出土した土坑が検出されている。今回の調査地は、これらの遺構の広がりを傍証する資料の一つとなろう。（米田）

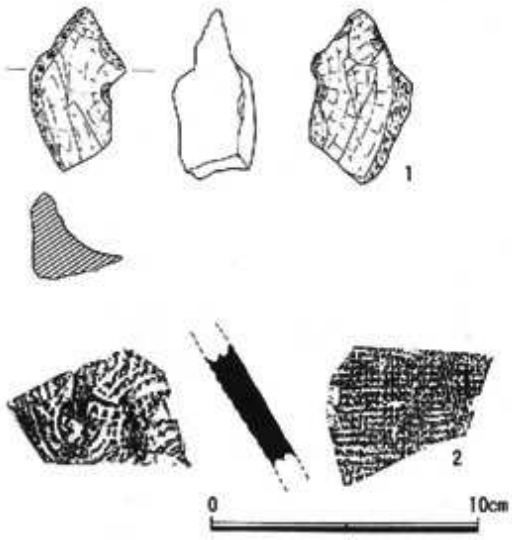


第56図　調査地周辺図（1/13000）



第57図　調査区設定図（1/400）

第58図　基本層序模式図（1/40）



第59図　出土遺物実測図（1/3）

14. 矢作遺跡（89-039）の調査

調査地　　高美町３丁目49.50の一部

調査日　　平成元年９月29日

調査の概要

本調査は、矢作遺跡の一画にある当該地において、共同住宅の建築を計画している旨の届出に基づき、遺構、遺物の有無を確認するために実施した遺構確認調査である。

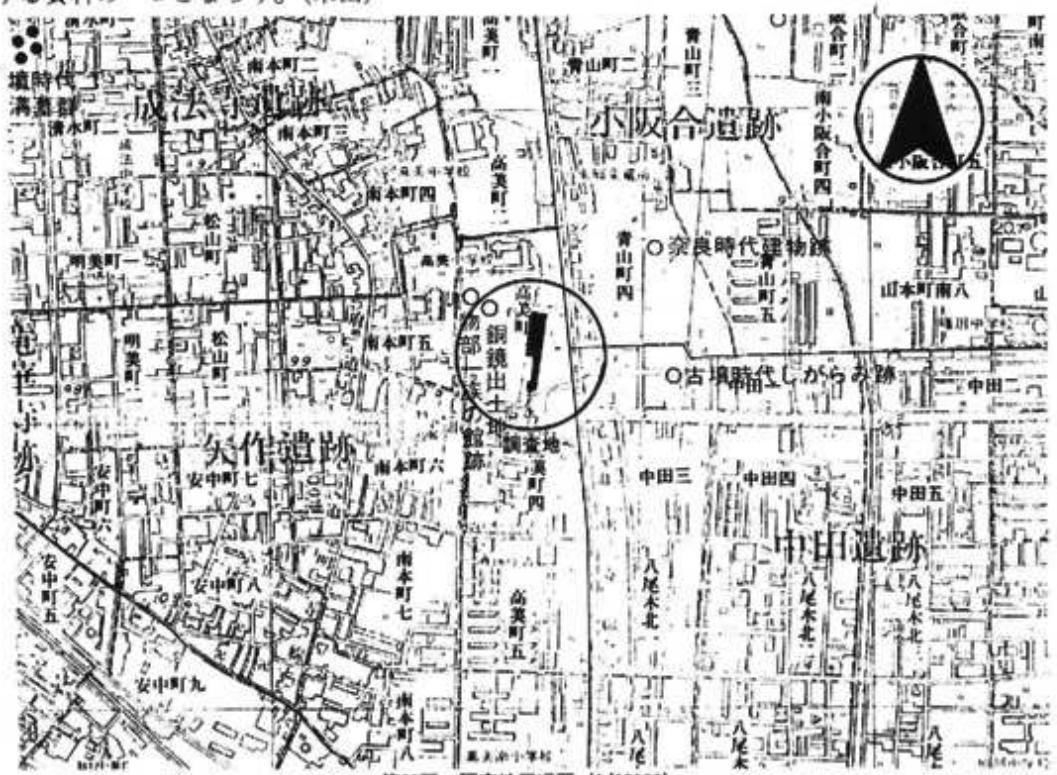
調査の方法は、２ｍ×４ｍの調査坑を浄化槽が設置される敷地南東端に１箇所設定し、機械および人力を併用して掘削を実施した。その結果地表下1.6ｍ～2.0ｍに古墳時代の遺物包含層を確認した。しかし遺構の存在は確認できなかった。

出土遺物

土師器片、サヌカイト製スクレーパー（第63図）

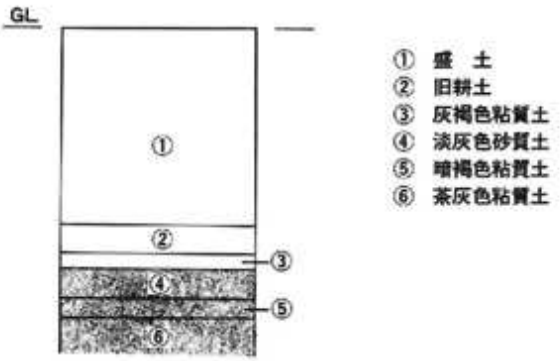
まとめ

当該地付近は、矢作遺跡の中でも調査が多くなされており、当調査地の隣接地においても中世、古墳時代の遺構が検出されている。今回の調査地は、これらの遺構群とのつながりを考察する資料の一つとなろう。（米田）

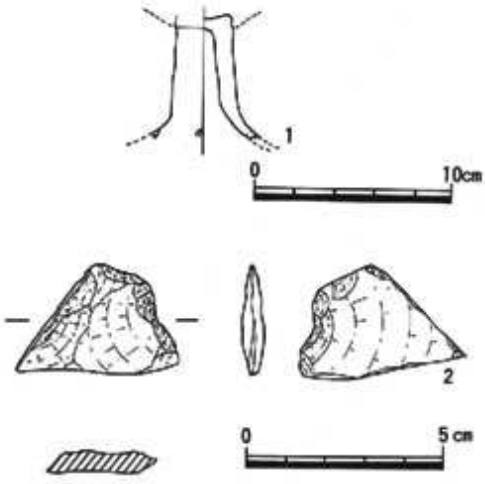


第60図　調査地周辺図（1/13000）

第61図　調査区設定図（1/400）



第62図　基本層序模式図（1/40）



第63図　出土遺物実測図（1/2・1/4）

15. 小阪合遺跡（89-424）の調査

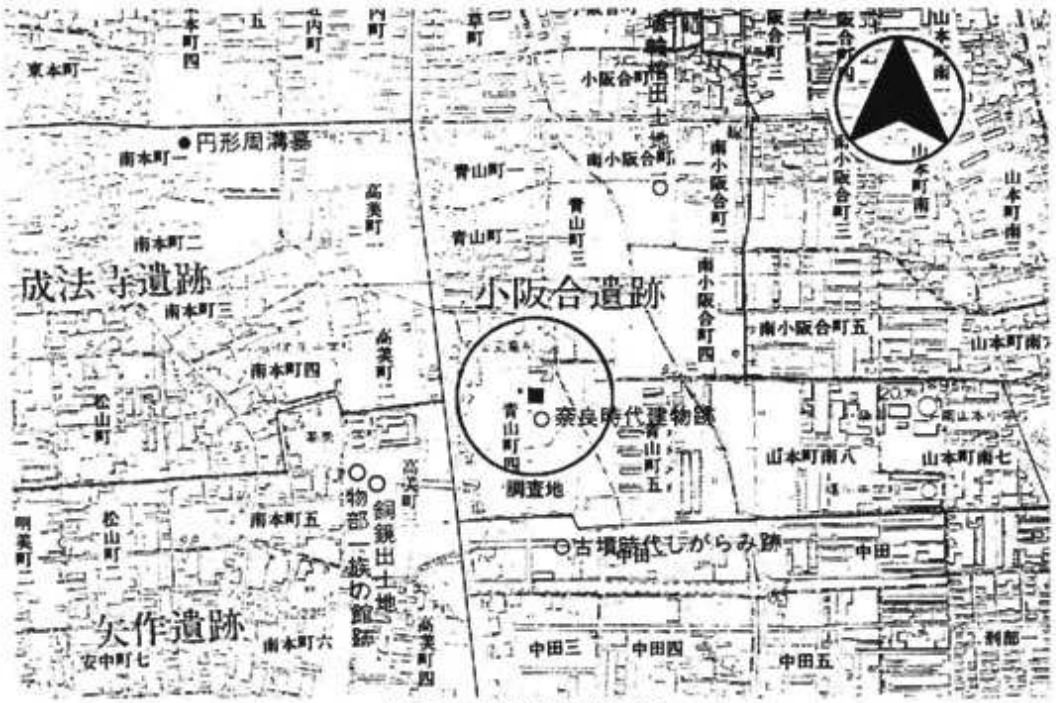
調査地　　青山町４丁目50－１

調査期間　平成元年11月21日

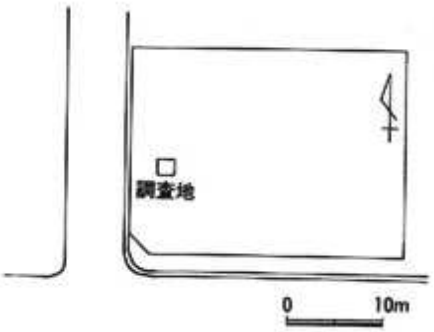
１．調査概要

小阪合遺跡は、弥生時代～室町時代に至るまでの複合集落遺跡であり、数次にわたって行なわれた区画整理事業に伴う発掘調査においても貴重な遺構・遺物を検出し、多大な成果をあげている。

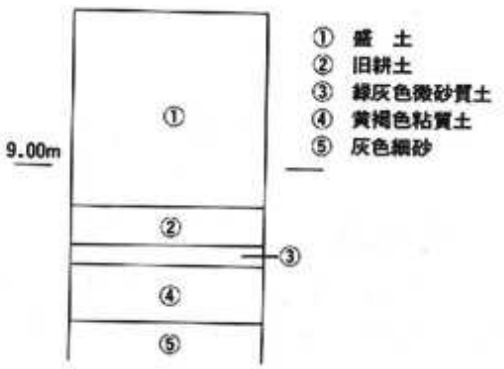
本調査は、倉庫建設に伴って実施された遺構確認調査である。調査は建設予定地内に1.6×1.5ｍの調査区を設定し、重機によってGL-1.2ｍ迄の盛土、旧耕土を掘削した後、以下の約0.6ｍを人力により慎重に掘削した。調査地の基本層序は、第１、２層の盛土・旧耕土以下第３層緑灰色微砂質土、第４層淡褐色粘質土、第５層茶褐色粘質土、第６層灰色細砂の堆積が認められた。遺構は検出できなかったが、出土遺物としては第４層より５世紀代から６世紀代にかけての須恵器が完形品を含み少量出土した。図化できたものは、短頸壺１点、高坏脚部１点の２点のみである。短頸壺は口縁部の一部が欠損していたのみでほぼ完形品であり、口縁部内外面及び体部内面は回転ナデ、外面下半部は回転ヘラケズリでヘラ記号を有す。高坏は脚部の



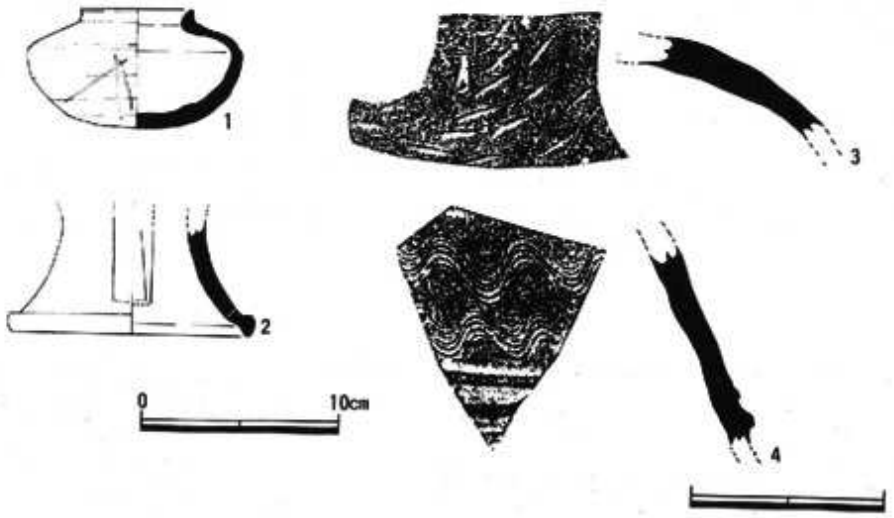
第64図　調査地周辺図（1/13000）



第65図　調査区設定図（1/800）



第66図　基本層序模式図（1/40）



第67図　出土遺物実測図（1/2・1/4）

み残存で、四角形のスカシの痕跡を有し、内外面とも回転ナデ調整である。

2．まとめ

今回の調査では、古墳時代中期における遺物包含層を確認することができ、土層断面及び平面の観察からも遺構を想定させる様な土層も存在している。又、今回行なった調査地のすぐ南側では、(財) 八尾市文化財調査研究会においてほぼ同一レベルで古墳時代中期の土坑・小穴等の遺構及び多量の貴重な遺物を検出している。これらの成果から考えても当該地までの遺構の広がりは確実である。(岡田)

16. 山賀遺跡（89-213）の調査

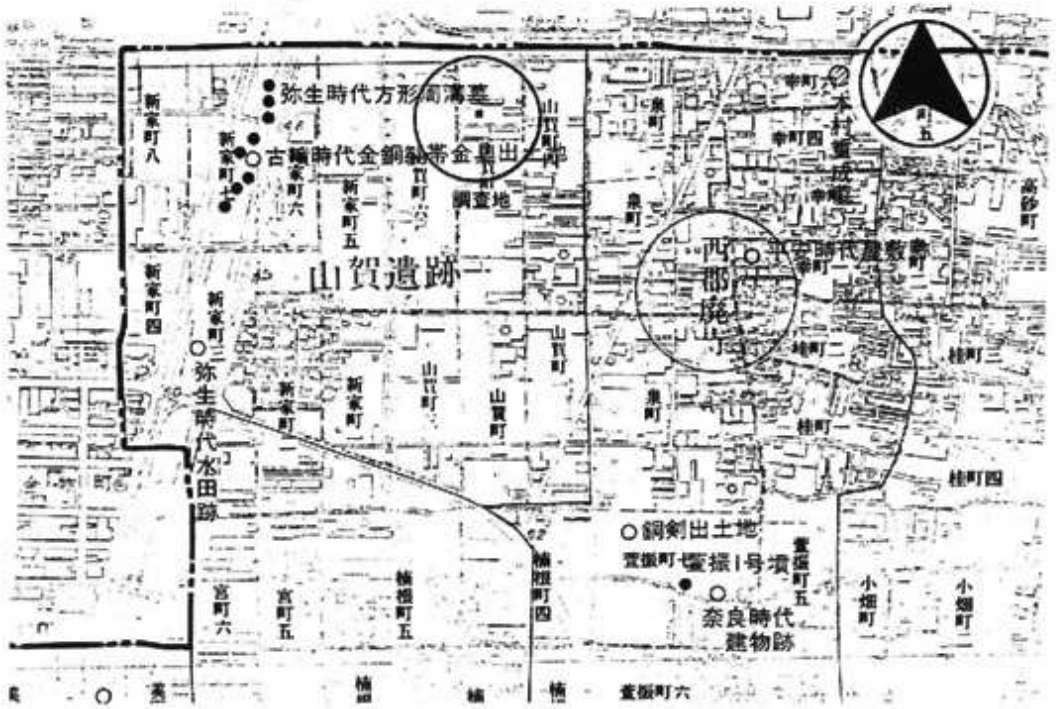
調査地　　山賀町５丁目19番地

調査期間　平成元年１月18日～23日

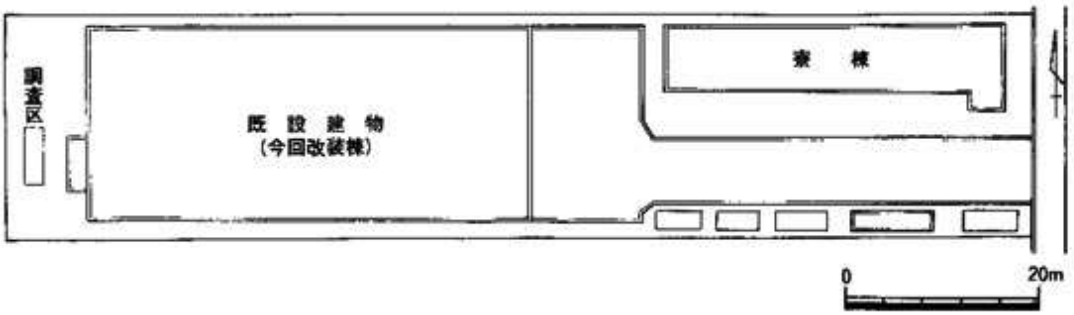
１．調査概要

山賀遺跡は、弥生時代から古墳時代における集落遺跡であり、中央環状線工事に伴う発掘調査をはじめ貴重な学術的成果をあげている。

今回の調査は、工場建設に伴って実施した遺構確認調査である。工事予定地内西側に２×６ｍのトレンチを設定し、地表から人力によって掘削した。調査の結果、地表下1.8ｍ前後で古墳時代の遺物包含層の存在を確認した。包含層はその遺物から時期的に上層と下層の２層に分層される。上層では、長径1.0ｍ、深さ0.24ｍ、埋土－暗褐色粘質土の土坑を検出した。遺物は図化できるものはなかったが時期的に古墳時代中期の土師器片、須恵器片を伴っていた。下層では長径3.0ｍ、深さ0.5ｍで埋土は上層から暗灰色シルト、暗灰色粘土（炭化物を多量含む）、灰色粘土で、遺物は古墳時代初頭の甕、壷、高坏、鉢等多器種にわたって出土した。



第68図　調査地周辺図（1/13000）



第69図　調査区設定図（1/800）

出土遺物

この土坑からは、極めて良好な状況で庄内式の時期に比定できる古式土師器が一括で出土した。器種も壺、甕、小型丸底土器、高杯、器台とかなり揃っているが、甕が圧倒的に多いのはこの時期の特徴であろうか。以下にその詳細とこの資料が提起する問題に触れてみたい。

壺は、２個体が直口のもので、大型のもの（５）は、乳灰色を呈し、他地域の胎土を呈する。小型のもの（１）は、いわゆる生駒西麓産である。他に口縁部を欠く個体が２個ある。このうち赤褐色を呈し、偏平な球形のものは、複合口縁壺の可能性もある。

小型丸底土器（６）は、丸底の半球形の体部より屈曲し、短く内湾ぎみに開く口縁部をもつ。色調は赤褐色を呈する。

小型器台（７．８）は２個体あり、皿状の杯部と円錐状の脚台部をもつもので、口縁部は内彎し、外傾する端面をもつ。色調は淡褐色を呈し、沖積地の胎土をもつ。外面に横方向の細かいヘラ磨きが見られる。

高杯は２個体で、（９）は杯部の口縁は平たい杯底より屈曲して外上方にのびる。脚部は柱部が中空で、裾部は屈曲して平たく開く。色調は赤褐色を呈する。このような高杯は中河内の庄内式には、庄内式期Ⅰ～Ⅳまで普遍的に見られるもので、特にⅢ．Ⅳ期のものに近い。調整は残念ながら表部剥離のため不明である。（10）は口縁部が内湾して立ち上がり、椀状を呈する杯部と短い柱部と屈曲して開く直線的な杯部を有する。色調は淡褐色で、外面に細かい横方向ヘラ磨きが観察できる。

甕は13個体で庄内甕と布留系甕があり、前者が圧倒的多数を占め、後者は１個体分の形状が復元できた。

庄内甕は中型のもの（11～20）と小型品（21．22）があり、いわゆる生駒西麓産の胎土である。口縁部が鋭く屈曲し，端部はつまみあげる。体部は下すぼみの球形を呈し、体部最大径は中位付近に位置する。底部は尖りぎみの丸底である。外面調整は、体部上半は左下がりの細筋

のたたき目が明瞭に残り、下半部は、縦方向ハケ撫で調整が顕著である。内面はヘラケズリを施す。このような形態の庄内甕はC類に分類され、極細のたたき目をもち球形化がより進んだD類や明瞭な尖り底をもつB類は全く認められない。

布留系甕（23）は口縁部は屈曲した後内湾して開き、端部は肥厚せずにまるく終わる。体部は下すぼみの球形を呈する。底部は尖りぎみになると思われる。外面は縦方向ハケ調整を基調とし、中位以上に横方向ハケ調整を施す。内面はヘラケズリで、底部は指頭痕が顕著に見られる。この甕の形態は口縁端部の肥厚がないことと、尖りぎみの底部を持つことから、庄内式に見られる布留系甕のうち瀬戸内地方の影響を受けた全面ハケ、内面ヘラケズリの「く」の字口縁の甕をA類、布留式甕に近いものをC類とし、そのさらに先駆的なものをB類とみなす考えに立てば、布留系甕B類とされるものの範疇で考えることができる。胎土は乳褐色を呈し、他地域からの搬入品として捕らえることが出来る。

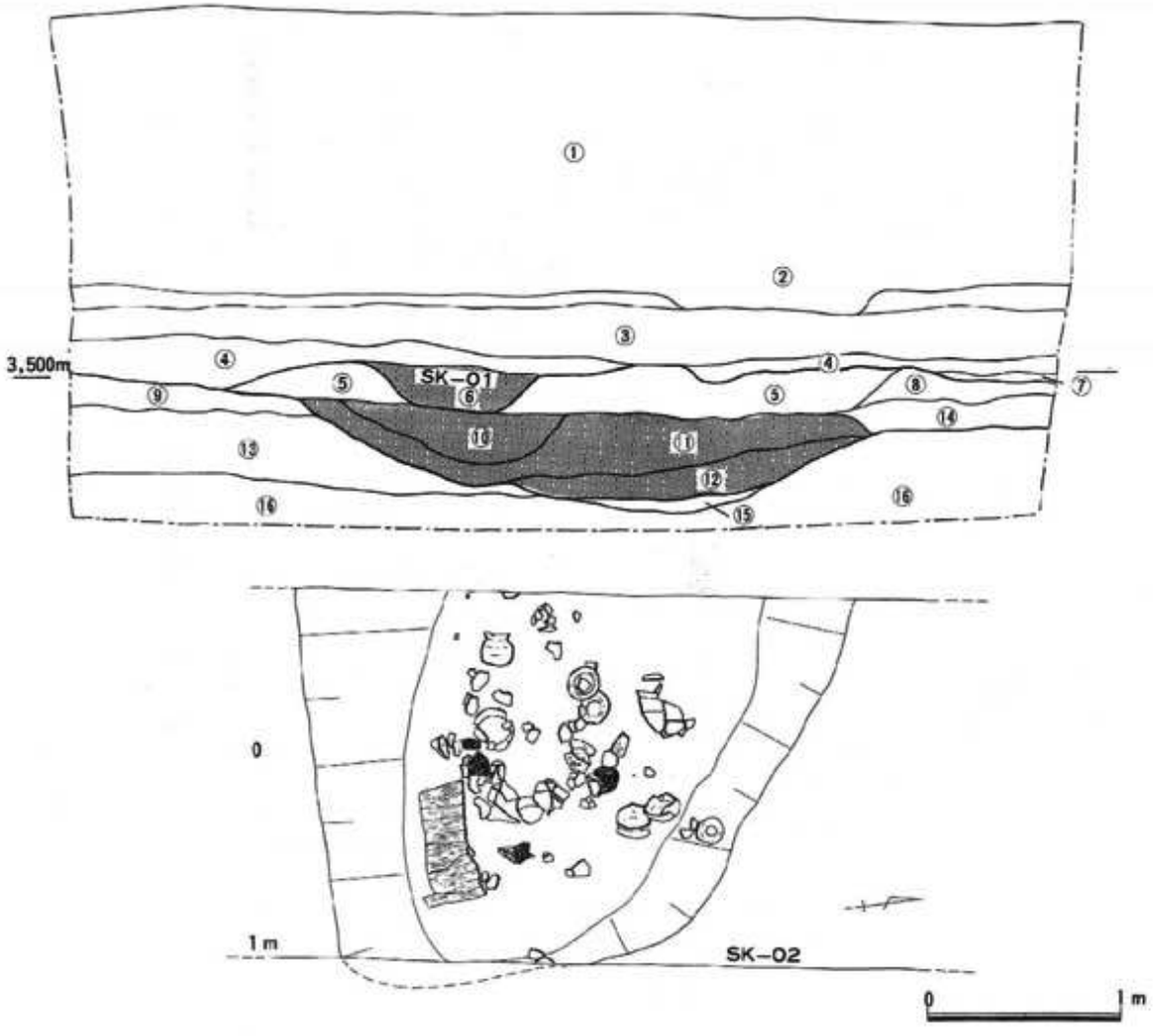
山賀町５丁目19土坑出土の古式土師器について　～まとめにかえて～

この土坑の資料は、出土状況においても、器種構成土器の量においても、庄内式の時期の良好な一括資料とすることが出来る。小型器台や小型丸底土器などの小型精製器種はすでに庄内式のかなり早い段階で出現していることは今や言を待たない。したがってこの資料の時期的位置づけは、甕によって行うのが妥当であり、庄内甕の形態が総てC類の範疇で分類できることから庄内式期Ⅲの段階であることは疑うことができない。このことは、小型丸底土器、器台、高杯の形状においても矛盾はなく、庄内式期Ⅳ以後に設定出来る新しい要素はこの資料には含まれていない。したがって八尾南遺跡ＳＷ３や東郷遺跡５次のＳＤ９などの資料との並行関係が考えられる。しかし、山陰の複合口縁の甕の体部形状を母体とする布留系甕Bの存在は、矢部遺跡編年によると布留０式に分類されることになる。この土器は布留式甕の祖型であることはほぼ間違いないが、胎土観察の結果が他地域からの搬入品であることは重要であろう。すなわちこの種の甕が多量に含まれている資料は、庄内式期Ⅳに顕著であるが、その前の段階において布留系甕が中河内に搬入される確率は極めて低いものであったと思われる。このことは瓜生堂遺跡溝224や八尾南遺跡ＳＷ３においても同一段階の夥しい量の庄内甕の中に１個体だけこの種の甕が含まれている事実と符合している。ここでは、大和の矢部編年と中河内の編年との相違を指摘しておくに止どめておく。

以上の結果より、本資料は、中河内の庄内式土器の標識資料のひとつとして有効であり、今後の古式土師器研究に貴重な資料を得ることが出来た。なお本稿の作成に当たり奥田尚、小山田宏一、寺沢薫の各氏より貴重なご意見を戴いた。

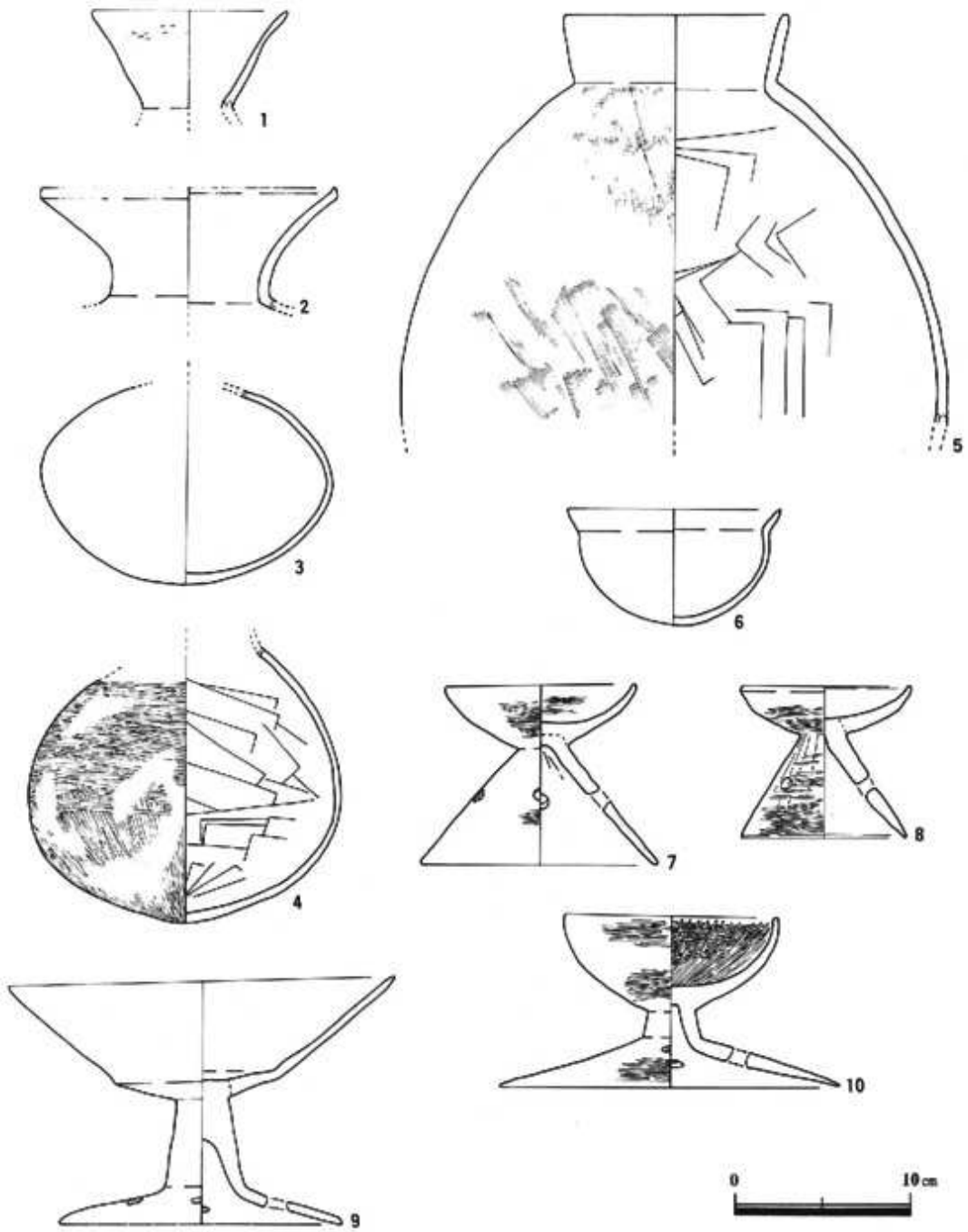
参考文献

米山敏幸「八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会1981

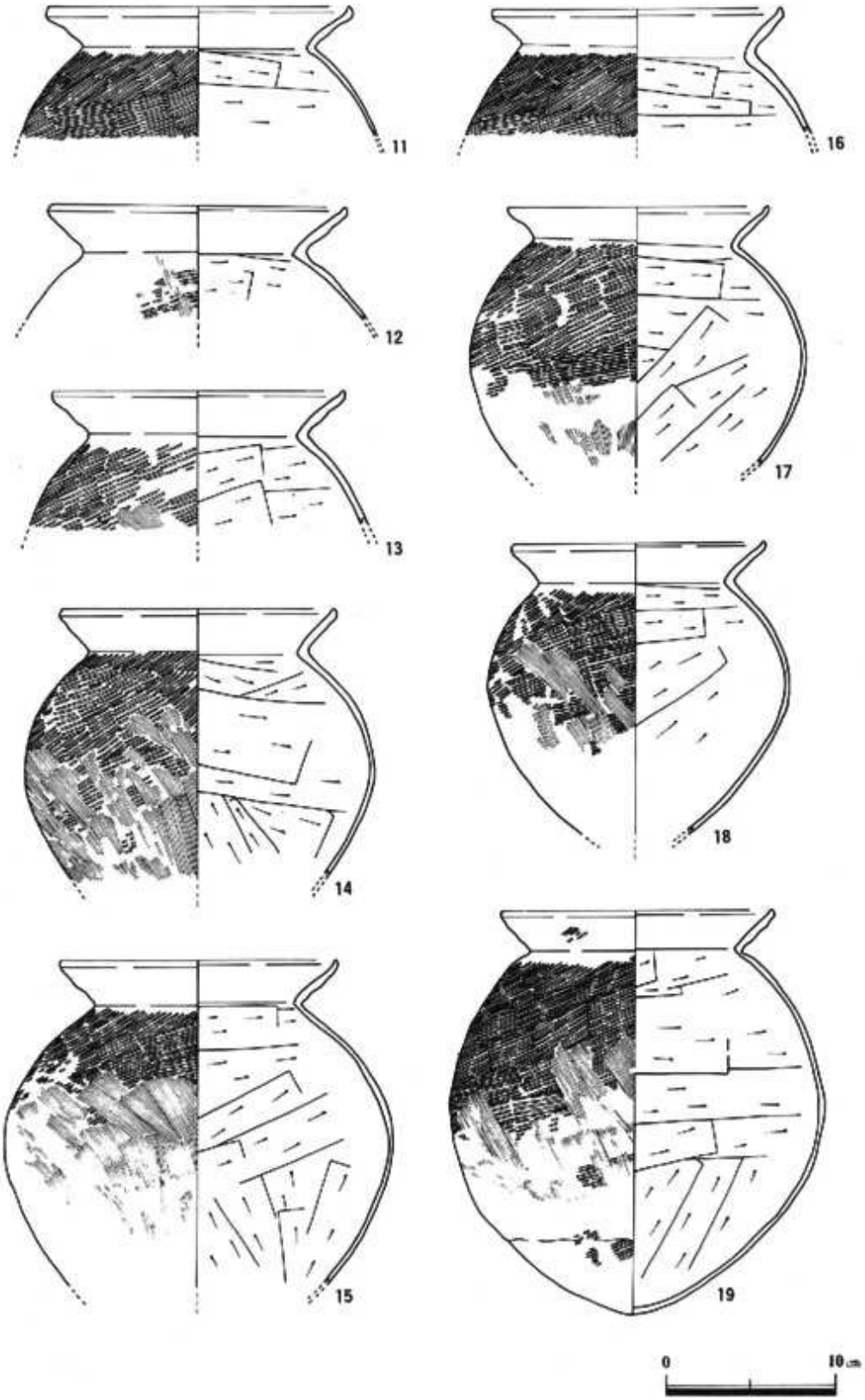


① 盛　　土
② 旧耕土
③ 黄褐色礫混土
④ 褐灰色微砂質土
⑤ 褐灰色シルト
⑥ 暗褐色粘質土
⑦ 淡灰色砂礫層
⑧ 紫灰色粘質土
⑨ 淡灰色細砂
⑩ 暗灰色シルト
⑪ 暗灰色粘土
⑫ 灰色粘土
⑬ 灰白色細砂
⑭ 黄褐色シルト
⑮ 灰色微砂シルト
⑯ 青灰色粘質土

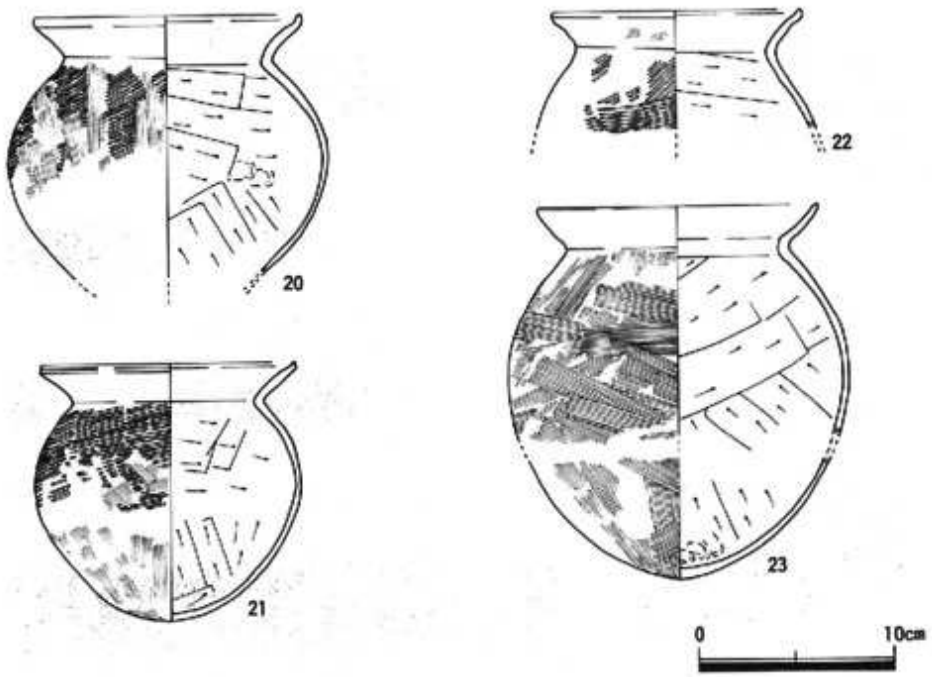
第70図　調査区平・断面図（1／40）



第71図　SK-02　出土遺物実測図　そのⅠ（1/4）



第721図　SK-02　出土遺物実測図　そのⅡ（1/4）



第73図　SK-02　出土遺物実測図　そのⅡ（1/4）

第8表　SK-02　出土遺物観察表

遺物番号	器種	口径	器高	底径	調整	色調	焼成・備考
1	壺	11.0			(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	淡褐色～褐色。	焼成良好。
2	壺	16.6			(外)ナデ。(内)ナデ。	淡褐色。	焼成良好。
3	壺				(外)剥離。(内)ナデ。	明橙色。	焼成良好。
4	壺				(外)ヘラミガキ。(内)ヘラナデ。	明橙褐色。	焼成良好。
5	壺	12.4			(外)ハケナデ。(内)ヘラナデ。	淡灰褐色。	焼成良好。
6	小型丸底壺	12.0	6.6		(外)剥離。(内)剥離。	明橙色。	焼成良好。
7	器台	10.6	10.1	13.2	(外)ヘラミガキ。(内)ヘラミガキ。	淡灰橙色。	焼成良好。四方孔。
8	器台	9.6	8.5	9.2	(外)ヘラミガキ。(内)剥離。	淡褐色。	焼成良好。三方孔。
9	高坏	21.6	13.7	15.8	(外)剥離。(内)剥離。	明橙色。	焼成良好。四方孔。
10	高坏	12.0	9.8	19.1	(外)ヘラミガキ。(内)ヘラミガキ後、暗文状ヘラミガキ。	赤褐色。	焼成良好。四方孔。
11	甕	17.8			(外)タタキ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色～淡褐色。	焼成良好。
12	甕	17.3			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	淡褐色。	焼成良好。
13	甕	17.2			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色	焼成良好。
14	甕	16.2			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	淡褐色	焼成良好。
15	甕	16.4			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	黒褐色～淡褐色。	焼成良好。
16	甕	17.0			(外)タタキ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色。	焼成良好。
17	甕	15.4			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色～淡褐色。	焼成良好。
18	甕	15.0			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	黒褐色～淡褐色。	焼成良好。
19	甕	16.0	23.9		(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色。	焼成良好。完形。
20	甕	13.7			(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	暗褐色～淡褐色。	焼成良好。
21	甕	13.0	13.1		(外)タタキ後ハケ。(内)ヘラケズリ。	淡褐色。	焼成良好。完形
22	甕	12.6			(外)タタキ。(内)ヘラケズリ。	暗灰褐色。	焼成良好。
23	甕	14.4	19.0		(外)ハケナデ。(内)ヘラケズリ。	淡灰黄色。	焼成良好。

高萩千秋「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡1980. 1981年度発掘調査概要』八尾市教委1982

小山田宏一「布留式成立に関する覚書」『古代史と考古学』森浩一編1982

寺沢　薫「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49　奈良県立橿原考古学研究所1987

藤沢真依『瓜生堂』大阪文化財センター1980

渡邊昌宏「美園遺跡出土の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器について」『美園』大阪文化財センター1985

一瀬和雄「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『八尾市文化財紀要3』八尾市教育委員会1988

米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』考古学を学ぶ会1986

「中田1丁目39地点土器について」『八尾市文化財紀要2』八尾市教育委員会1987

「八尾南遺跡」八尾南遺跡調査会1981

注

◎本稿における布留系甕とは、庄内式期Ⅴ＝布留1式以前のハケ調整内湾口縁の甕を言う。

土器胎土の砂礫観察　　奥田　尚

山賀遺跡から出土した甕、壺、高坏等の表面に見られる砂礫を裸眼と倍率30倍の実体鏡とで観察した。観察した試料の砂礫種構成からみれば、八尾市山賀町付近に分布する砂礫種と異なるものが大半で、一致するものはごく僅かであることが明らかになった。

観察事項は砂礫種とその粒形・粒径・量・色の4点である。石英と角閃石については結晶面の有無の判断もした。粒形は角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。粒径はmm単位で感覚的に測定した。量はごくごく僅か、ごく僅か、僅か、中、多い、非常に多いの6段階に区分した。火成岩で、花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩としたものは、岩石の全様がわかれば石種が変わる可能性もある。

識別できた砂礫種は岩石片として、花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラス、鉱物片として、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、粒形が角、粒径が最大7mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母のかみ合わせからなる。

閃緑岩：色は灰白、暗灰色で、粒形が角、粒径が最大7mmである。長石・角閃石、黒雲母・角閃石のかみ合わせからなる。

斑糲岩：色は黒色、暗灰色で、粒形が角、粒径が最大4mmである。長石・角閃石のかみ合わせからなる。

流紋岩：色は灰色、灰白色で、粒形が角、亜角、粒径が最大５㎜である。石英の斑晶が認められる場合がある。石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、粒形が亜角、粒径が最大1.5㎜である。細粒砂からなる。

チャート：色は暗灰色、粒形が角、亜角で、粒径が最大６㎜である。

火山ガラス：無色・黒色透明、粒径が最大0.7㎜である。貝殻状、筒状、フジツボ状をなす。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大３㎜である。複六角錐あるいはその一部が認められる試料もある。

長石：白色、灰白色、無色透明、灰白色透明で、粒形が角、粒径が最大６㎜である。

黒雲母：金色、粒径が最大１㎜である。粒状、板状をなす。

角閃石：黒色、粒形が角、粒径が最大５㎜である。粒状、柱状をなす。柱状の角閃石には結晶面で囲まれているものが認められる場合がある。粒状の角閃石が多量に含まれる場合、風化しているものが多い。

輝石：黒色透明、粒形が角、粒径が最大0.6㎜である。柱状をなす。結晶面で囲まれているものが多い。

砂礫種構成をもとに類型区分をする。

Ⅰ類型：花崗岩質岩・斑糲岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

黒雲母が少ない――――Ⅰa類型

黒雲母が多い――――Ⅰb類型

Ⅱ類型：花崗岩質岩・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

砕屑岩が含まれない――Ⅱa類型

砕屑岩が含まれる――Ⅱb類型

Ⅲ類型：花崗岩質岩・流紋岩質岩・安山岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

Ⅳ類型：流紋岩質岩・安山岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

砕屑岩が含まれない――Ⅳa類型

砕屑岩が含まれる――Ⅳb類型

器種と類型の関係をみれば第９表のようにⅠ類型に属するものが15個体、Ⅱ類型が３個体、Ⅲ類型が１個体、ⅣV類型が３個体と、Ⅰ類型が大半を占める。

遺跡が位置する八尾市山賀町付近は旧大和川の砂礫が分布する地域である。当付近の砂礫種構成は花崗岩類起源と推定される砂礫を主とし、白形の石英、チャート等の砕屑岩がごく僅かに認められる場合がある。このような砂礫種構成はII類型の砂礫種構成に相当する。以上のことから、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類型の砂礫は当地域以外でしか求めることができない。

土器の表面に見られる砂礫種構成と同じ砂礫が採取できる地を遺跡から近距離の地で求める。

Ⅰ類型の砂礫は他形の角閃石が多く含まれ、かつ、風化しているものが多いことから、閃緑岩や斑糲岩の媒乱砂を使用したと推定される。閃緑岩・斑糲岩は八尾市恩智神社の北方、同市大窪東方の山腹から平群町福貴畑にかけて、生駒山頂から西麓にかけて分布する。媒乱砂は恩智神社の北方、媒乱礫は大窪から水越にかけての付近に見られる。恩智神社の北方媒乱砂礫には黒雲母が僅かしか含まれないが、水越付近の礫には黒雲母が多く含まれる。Ⅰa類型の砂礫は恩智神社北方付近で、Ⅰb類型の砂礫は水越付近で採取されたと推定される。現在、前述の推定地付近で土器製作が行なわれた痕跡を確認していない。

Ⅲ類型・Ⅳ類型の砂礫は流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、安山岩質岩起源の砂礫が僅かに含まれることから、山陰から北陸にかけての流紋岩質岩、安山岩質岩分布地域の砂礫であると推定される。Ⅲ類型の砂礫には花崗岩質岩と推定される砂礫が含まれることから、山陰地方の出雲から因幡付近にかけての花崗岩分布地が推定される。Ⅳ類型の砂礫には花崗岩質岩が含まれないことから、花崗岩質岩が分布しない出雲から因幡にかけての付近、あるいは加賀付近の砂礫が推定される。

第9表　器種と類型

類型		器種					合計	
		甕	壷	高坏	器台	小形丸底		
Ⅰ	a	6	2		1		9	15
	b	6					6	
Ⅱ	a			1	1		2	3
	b				1		1	
Ⅲ		1						1
Ⅳ	a		1				1	3
	b		1	1			2	
区分不能						1		1
合計		13	4	1	4	1	23	

第10表　土器胎土の砂礫種

試料番号		器種	岩石																鉱物										焼成	類型
			花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石		土	
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	規	型
10	A	高坏				M稀角								M稀亜角					M-微	M-多E稀		M-中				S稀			無	Ⅱb
8	B	器台	L-微角	L稀角															M-微	S多E稀		S中	M-微板	S稀板	S微				無	Ⅱa
21	C	壺		L-稀角															M-微	M-微	L-中	M-僅		M僅板粒	L-多	L-赤			無	Ⅰa
19	D	壺		L-稀角																M-稀	L-多	M-僅		S稀板	L-多	M-多			無	Ⅰa
18	E	甕	L稀角	L微角																M-僅	L-中	L-中	M-稀板	S微板	L-中	L-多			有稀	Ⅰa
15	F	甕		L稀角																M-微	L-中	L-中	S微板	M-僅粒板	M-僅	L-多			無	Ⅰa
7	G	器台	L-稀角															M稀只	M-稀	M-多E微	L微	M-中		S微板		S微			有微	Ⅱa
2	H	壺	L-微角																M稀	M-微	L-中	M-僅	S微板	L-僅粒板	M-非	L-赤			有稀	Ⅱa
23	I	甕	L-微角	L-微角			L-僅亜角	L-僅亜角											M-僅E微	L-多E中	M-僅	M微				S稀E赤		S稀E非	無	Ⅲ
14	J	甕	L僅角	L-稀角															M-稀	M微	L-中	M-中			L-多	L-非			有稀	Ⅰa
9	K	高坏						M-稀角					M-稀亜角							S僅E微	L-微	S中	M-稀板	S稀板		S微E中			無	Ⅳb
6	L	小形丸底																		S中		S僅				S微			無	砂礫少量区分不能
17	M	壺		L稀角															M-稀	M-僅	L-中	M-僅	S微板	M-中板	L-中	L-多			無	Ⅰb
20	N	甕	L-稀角			L-微角														M-稀	L-僅	M稀	L僅板	L-中粒板	M-僅	L-多			有稀	Ⅰb

第11表　土器胎土の砂礫種

試料番号		器種	岩石																鉱物										焼土	類型
			花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
12	O	甕	L稀角	M稀角																S稀	L-僅	M 中	M-中板	M-中板粒	M-中	M多			有稀	Ⅰb
5	P	壺					L 中角	M-多亜角	M-微亜角	M稀亜角			L-微亜角	L-微亜角				M微貝殻		M-多E多	M-微	M微			L-僅	M稀E赤		L-微E非	有稀	Ⅳb
13	Q	甕	L-稀角	L稀角															M-僅	M微	L-中	M僅	M-稀板	L-中粒板	M-中	L-中			無	Ⅰb
16	R	甕																		S稀	L-中	L-中		M-多粒板	L-中	L 多			無	Ⅰa
11	S	甕	L微亜角																M-稀	M稀	L 多	M-僅		L-僅粒板	M-中	L-多			有稀	Ⅰa
4	T	壺		M-稀角																S-微	M-微	S僅			L-中	L 非			無	Ⅰa
3	U	壺					L-微角													M-中E-中	L-僅	M-中	S稀板			S微E微			無	Ⅳa
8	V	器台	L稀角																M-稀	L-微	L-多	M微	S稀板	M稀板	L-多	M-非			有稀	Ⅰa
22	W	甕																	L-稀	L 稀	L-稀	L-中		M中板粒	S僅	L-中			無	Ⅰb

D，E，J，に亜綱岩砂礫が僅かに含まれる。

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径2㎜以上　M＝粒径2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径1㎜以上　M－1㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5㎜未満　量は裸眼に同じ　－以下の粒径がある　E＝自形あるいは結晶面がある　W－白雲母が含まれる　板－板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ－フジツボ状　図＝報告書等の図版

17．中田遺跡（89-484）の調査

調査地　　八尾木北２丁目41番地２

調査期間　平成２年１月12日

１．調査概要

中田遺跡は長瀬川と玉串川に囲まれた範囲に位置する弥生時代から鎌倉時代に至る迄の集落遺跡である。調査は、建設予定地内に２ｍ四方のグリットを南北に２箇所設定し、試験掘りを実施した。

本調査は両グリット共地表下１ｍ迄を機械掘削した後以下は、機械と手掘りを併用して慎重に掘削を実施した。調査地の基本層序は、厚さ0.6ｍの盛土旧耕土以下３層明褐色微砂混粘質土、４層黄褐色微砂質土、５層茶灰色粘土、６層青灰色微砂質土、７層灰白色細砂の堆積が認められた。遺物は３層から中世の土師器皿の細片が少量出土したが、図化できるものはなかった。４層では弥生時代後期前半と思われる土器片が出土したが、これも細片がほとんどで図化できたものは南グリットから出土した甕の口縁部１点と鉢の完形品１点のみである。（第76図）５層の茶灰色粘土上面が両グリット共弥生時代の遺構面であり、面的にも一致する。

第74図　調査地周辺図（1/13000）

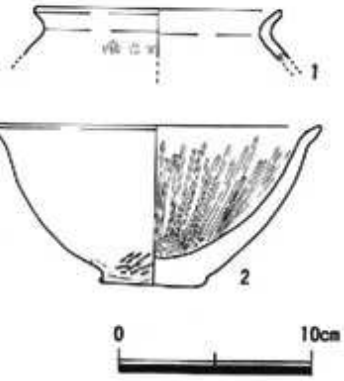
2．出土遺物

1は甕の口縁部で短く直線上に伸び、端部は丸く終わる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、わずかに残存する肩部分外面にハケ調整を施す。2はやや突出した底部から斜上方に丸味をもって伸びる体部で、口縁部はそれから短く屈曲し端部は丸く終わる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面は放射状のヘラミガキ、外面はナデでやや磨耗気味であり、底部に指頭圧痕の後わずかにタタキ目を残す。

第75図　調査区設定図（1/800）

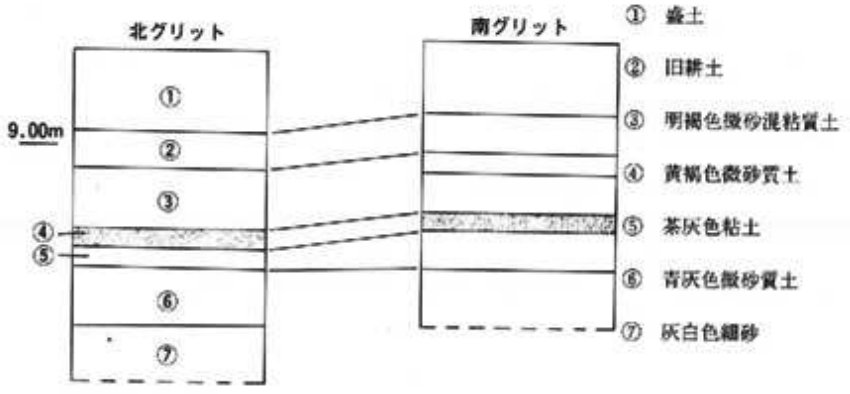
3．まとめ

本調査では、遺構は検出できなかったが、中世～弥生時代に至る迄の遺物を包蔵する土層を確認できたことで付近に、遺構が存在しているのは確実である。当該地周辺では現在迄に数次にわたって発掘調査がなされており（註1）、弥生時代中期・古墳時代初頭の土坑等が検出されている。又今回の調査では、土層の堆積状況から弥生時代後期前半以前は河川であったことが確認されることからみて、氾濫原であることも想定される。したがって当地においては、面的な生活域をとらえられなかったにせよ、弥生時代後期以降の集落域を考える上で貴重な資料となるであろう。（岡田）



第76図　南グリッド出土遺物実測図（1/4）

註1　・（財）八尾市文化財調査研究会「昭和58年度事業概要報告」（1984）
・大阪府教育委員会「中田遺跡発掘調査概要」（1986）
・八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書」（1987）



第77図　基本層序模式図（1/40）

18. 久宝寺遺跡発掘調査概要（85-191）

調査地　　南久宝寺３丁目48

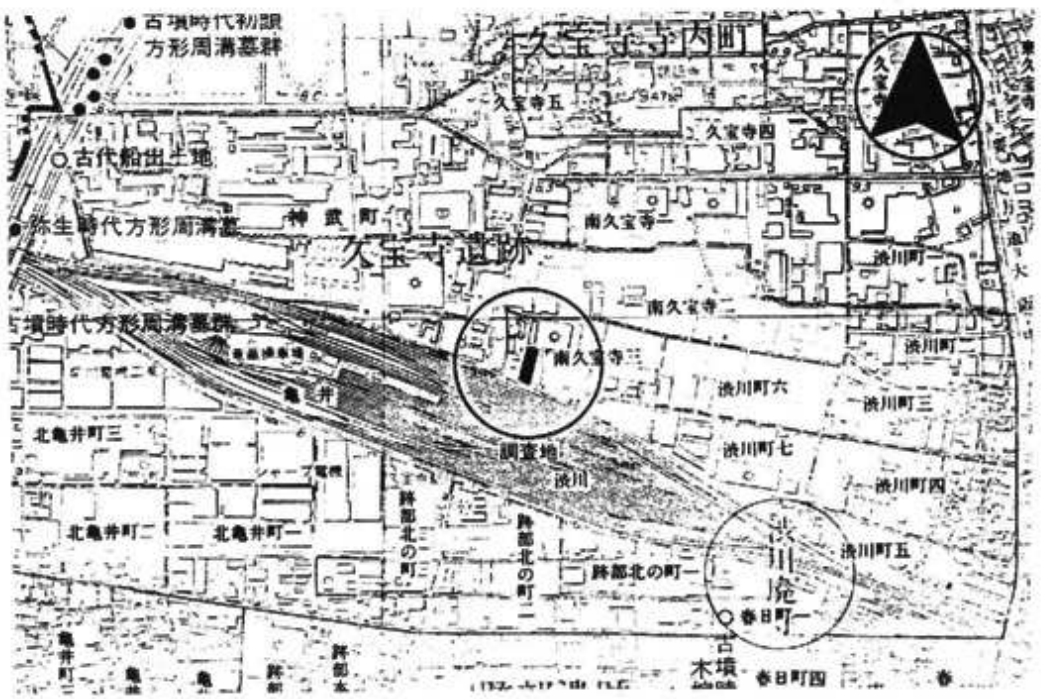
調査期間　昭和61年度２月18・19日

１．調査経過

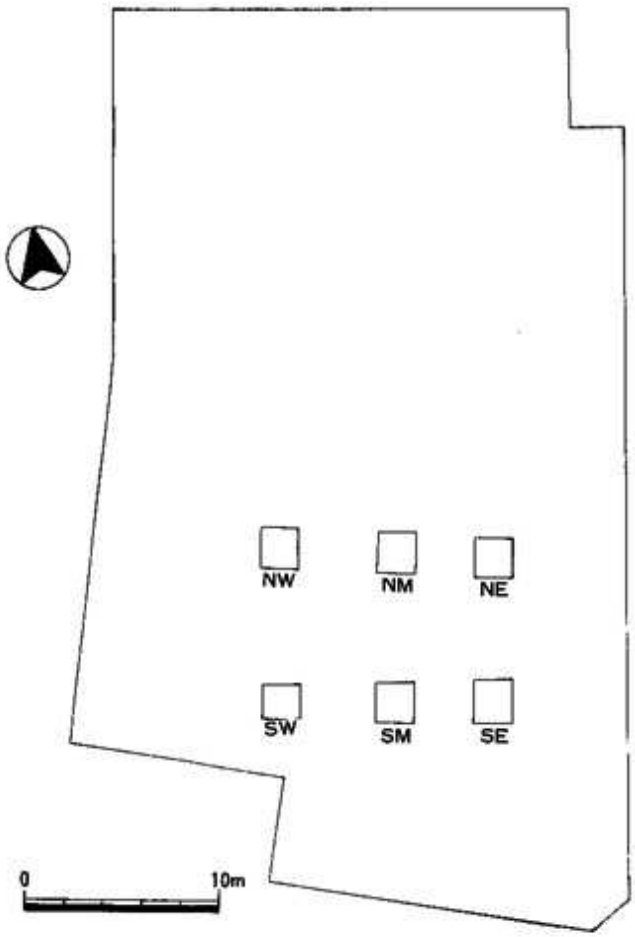
本調査は、昭和60年度事業として実施したものである。基礎工事予定部分に６箇所の調査区を設定した後、機械、人力を併用し、掘削を実施した。その結果北側中央に設定した調査区１箇所において７世紀の土器の出土をみたので以下に概要を報告する。

２．調査の概要

調査で検出した遺構は、地表下1.4ｍの黄灰色シルト上面より掘り込む南北方向の幅２ｍ以上の流路状の遺構で、遺構内の砂の堆積層より須恵器片、土師器片が多量に出土した。他の調査区においても同一面で、小溝、小穴などを確認したが遺構、遺物の密度は比較的少なかった。



第78図　調査地周辺図（1/13000）

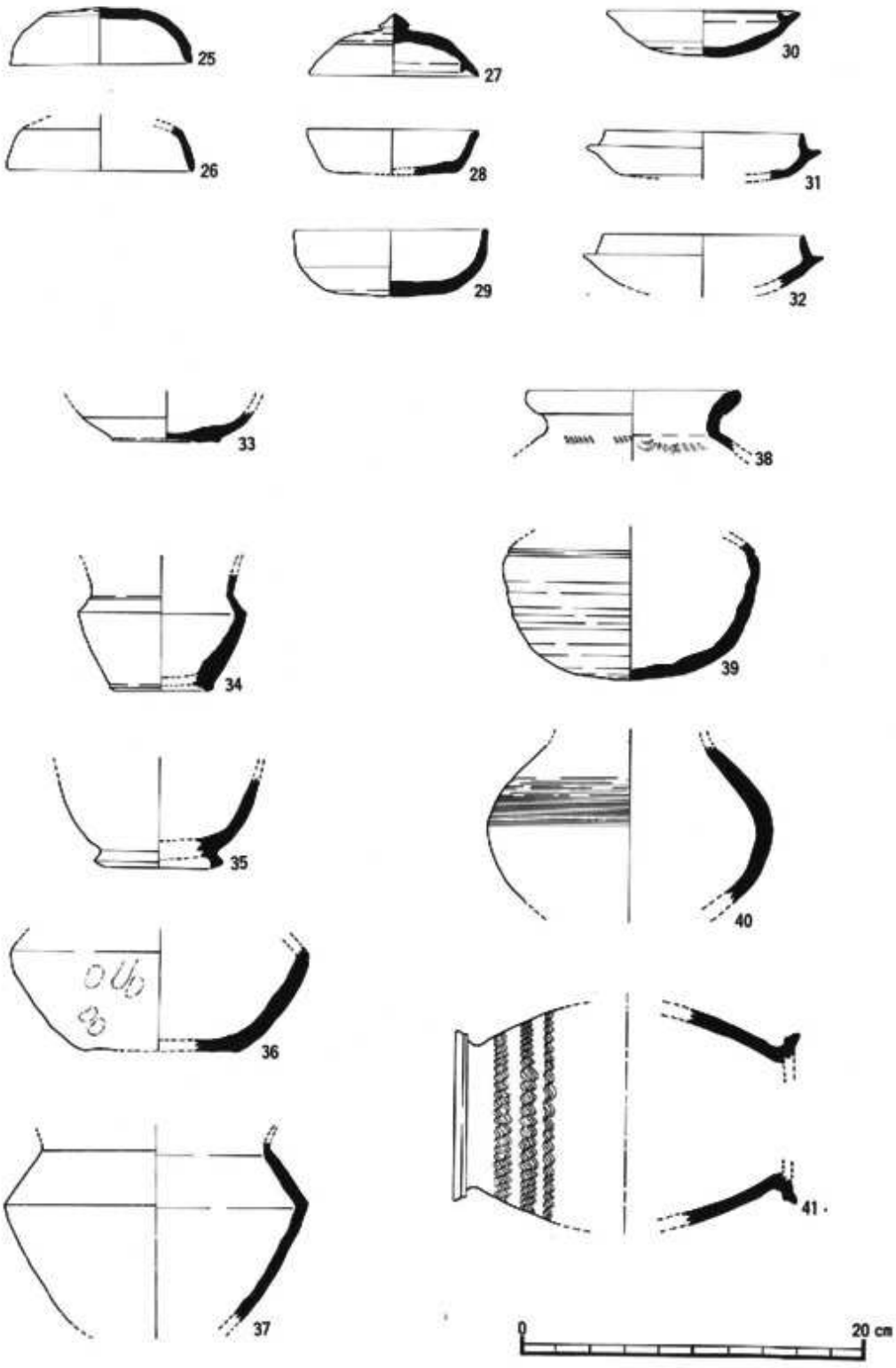


第79図　調査区設定図（1/400）

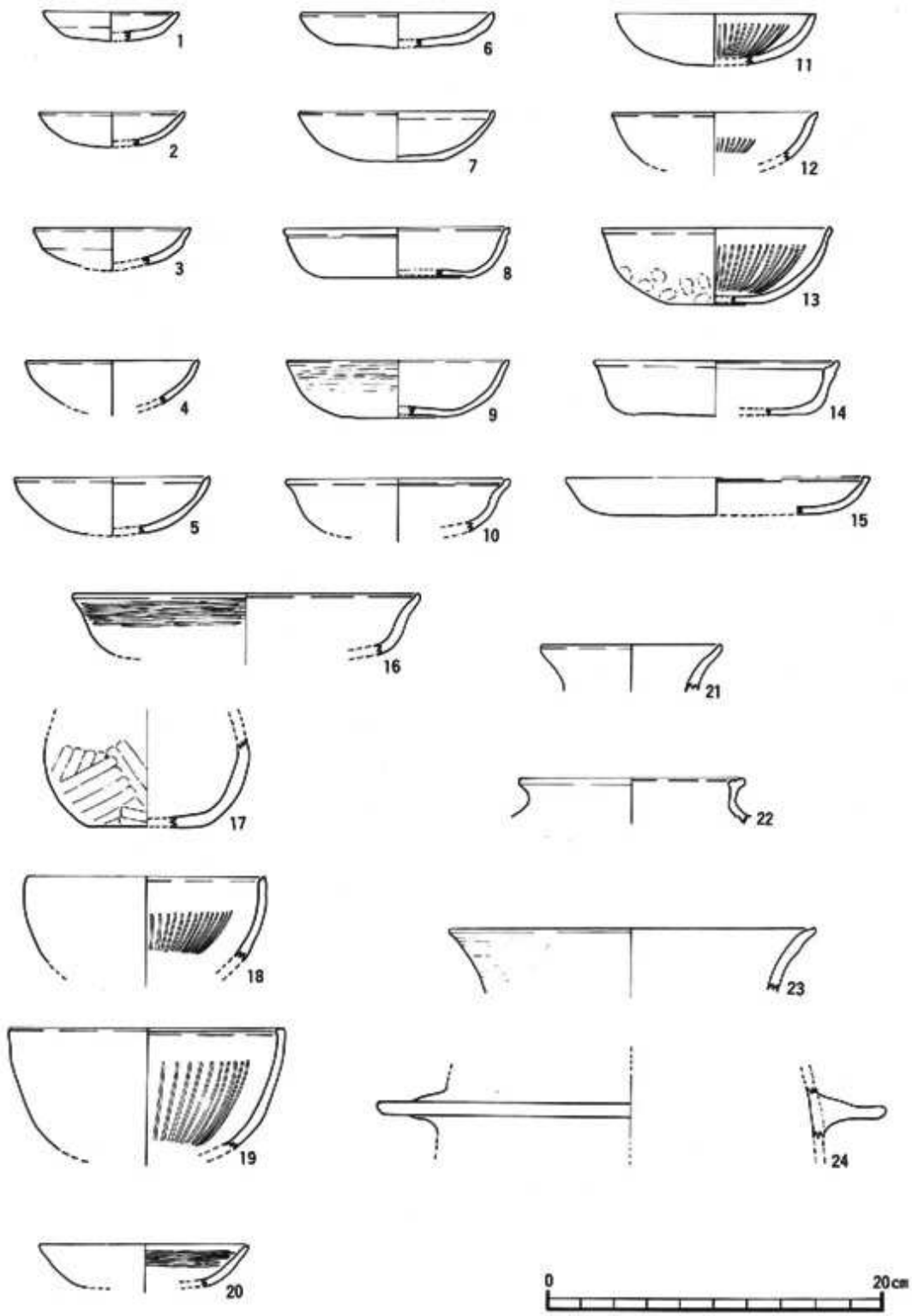
3．まとめ

調査の結果、７世紀の集落遺構が付近に存在する可能性が強くなってきた。なお、昭和63年度に調査地のすぐ南側のＪＲの用地からは、同時代の大規模な河川跡を確認している。今後付近の調査に期待したい。（米出）

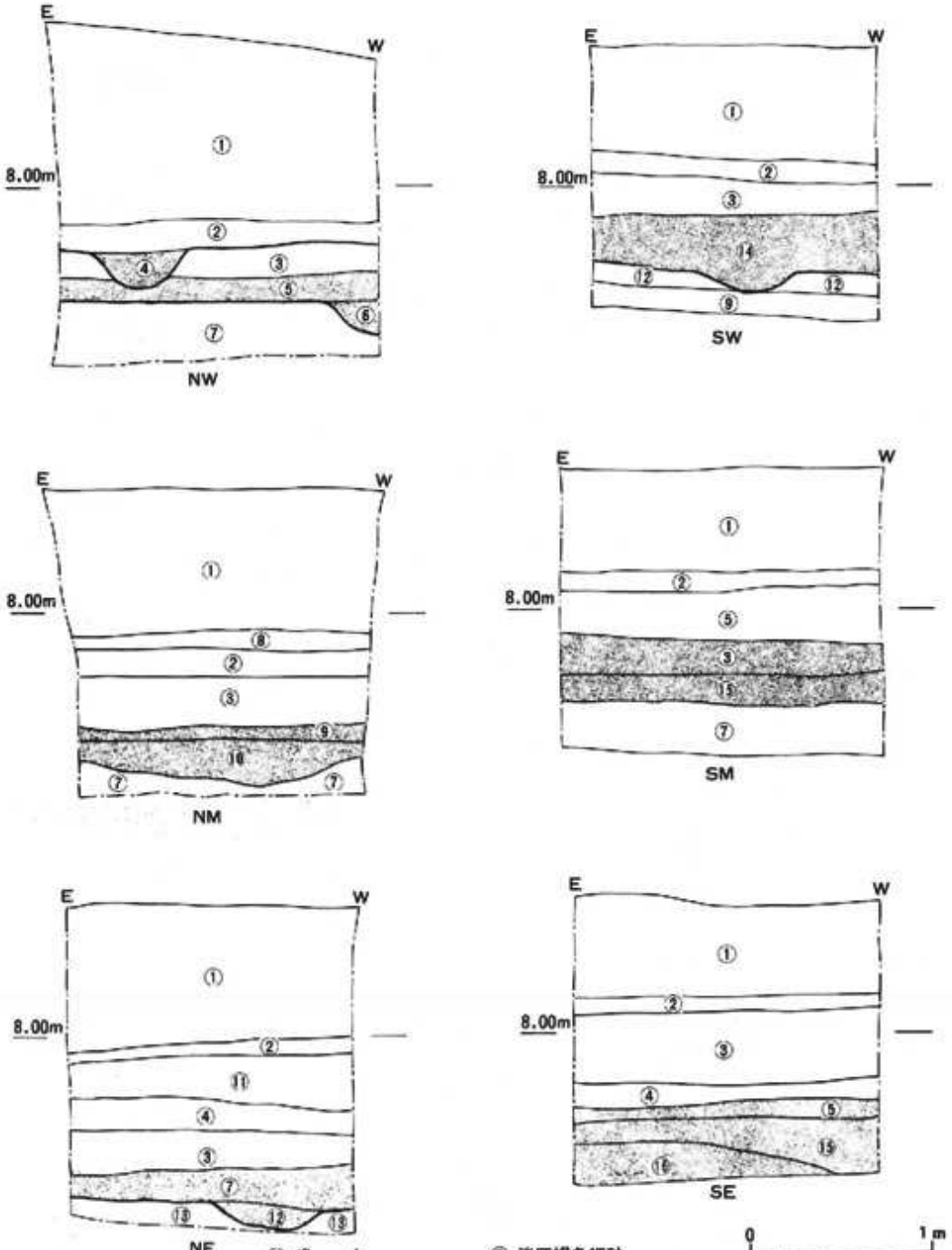
参考文献　「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市教育委員会1989



第80図　須恵器実測図（1/4）



第81図　土師器実測図（1/4）



① 盛　土
② 旧 耕 土
③ 暗褐色粘質土
④ 灰褐色粘質土
⑤ 暗灰褐色砂礫混粘土
⑥ 淡灰褐色粘土
⑦ 黄灰色シルト
⑧ 灰白色細砂
⑨ 淡灰褐色細砂
⑩ 淡灰褐色粘土混礫層
⑪ 灰白色礫層
⑫ 灰色粘質シルト
⑬ 淡茶灰色微砂
⑭ 淡灰褐色砂質土
⑮ 暗灰褐色細砂混粘質土
⑯ 暗灰色粘質シルト

第82図　各グリット土層断面図（1/40）

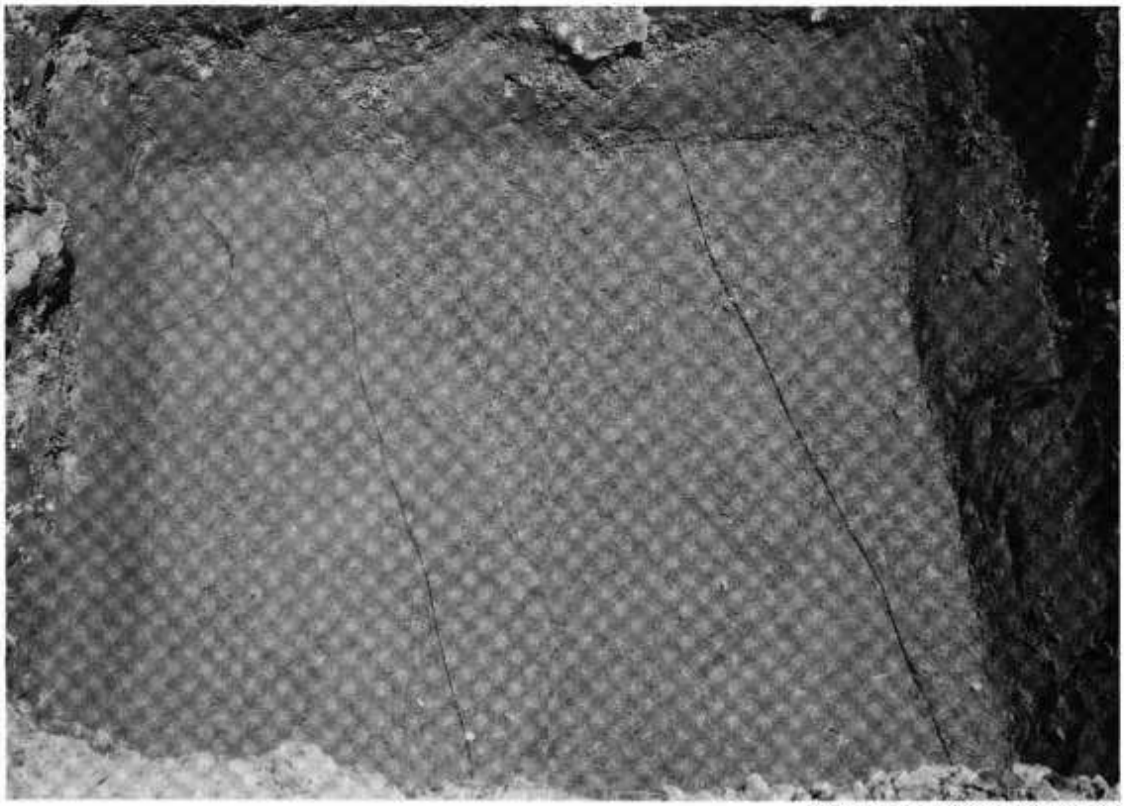
第12表　出土遺物計測表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	色調・備考
1	土師器皿	8.0	1.6	赤褐色
2	土師器皿	8.6	2.0	乳灰色
3	土師器杯	9.4	—	灰褐色
4	土師器杯	10.4	—	褐灰色
5	土師器杯	11.6	3.5	内面－暗褐色 外面－明褐色
6	土師器皿	11.4	2.0	内面－褐灰色 外面－赤褐色
7	土師器杯	11.5	3.0	内面－暗茶褐色 外面－灰褐色
8	土師器杯	13.2	3.0	暗褐色
9	土師器杯	13.1	3.4	暗褐色
10	土師器杯	13.2	—	灰褐色
11	土師器杯	11.8	3.1	乳灰色
12	土師器杯	12.2	—	灰褐色
13	土師器杯	13.6	4.6	赤褐色
14	土師器杯	14.5	3.2	赤褐色
15	土師器盤	18.0	2.3	明褐色
16	土師器杯	20.7	—	内面－褐灰色 外面－赤褐色
17	土師器壷	6.6	—	底径、明褐色
18	土師器鉢	14.3	—	乳灰色
19	土師器鉢	16.4	—	内面－明褐色 外面－灰褐色
20	黒色土器椀	12.6	—	内面－黒色 外面－淡乳灰色

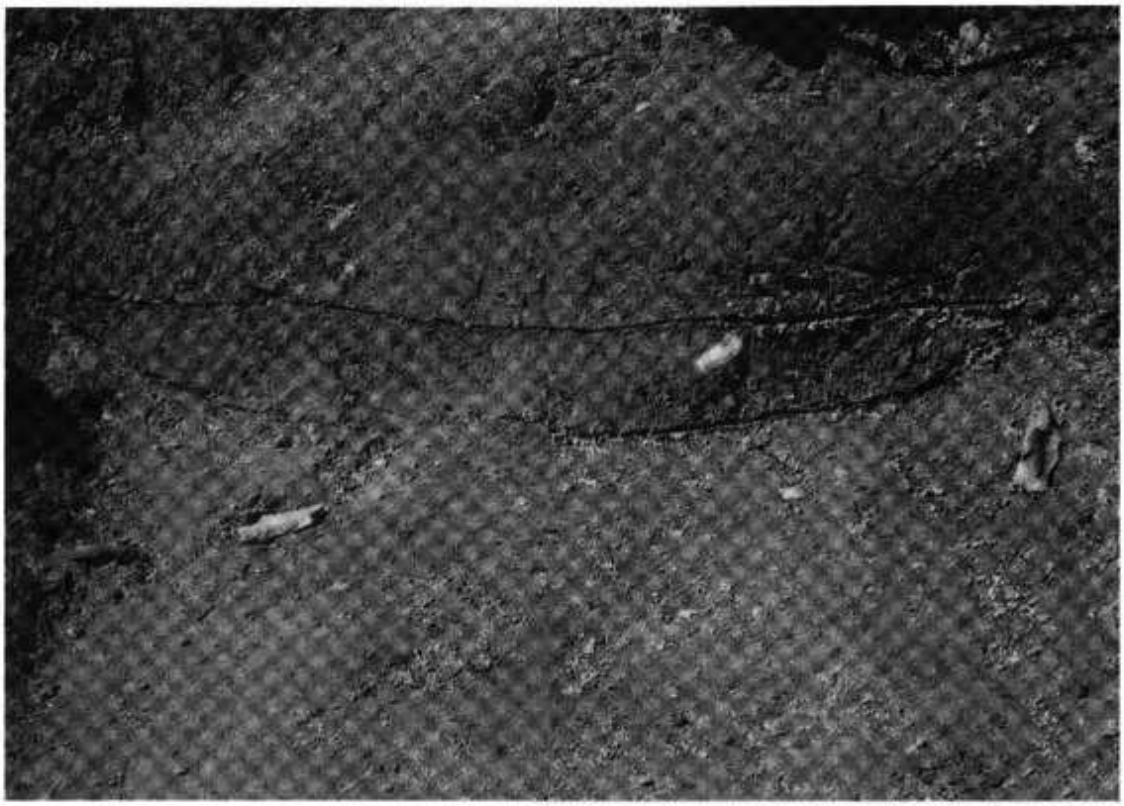
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	色調・備考
21	土師器壷	10.8	—	乳灰色
22	土師器甕	13.6	—	乳灰色
23	土師器甕	20.9	—	内面－赤褐色 外面－茶褐色
24	土師器甕	23.0	—	胴径、暗茶褐色
25	須恵器杯蓋	10.6	3.2	灰色
26	須恵器杯蓋	8.9	—	淡灰色
27	須恵器杯蓋	9.8	3.5	淡灰色
28	須恵器杯身	9.9	2.6	淡灰色
29	須恵器杯身	11.0	3.8	灰色
30	須恵器杯身	8.8	2.6	内面－灰色 外面→ 断面－灰紫色 自然釉
31	須恵器杯身	11.4	—	内・断面－灰青色 外面－灰色
32	須恵器杯身	11.5	—	淡灰色
33	須恵器壷	6.6	—	底径、淡灰色
34	須恵器壷	5.4	—	底径、淡灰色
35	須恵器壷	7.4	—	底径、淡灰色
36	須恵器壷	9	—	底径 内面－淡灰色 外面－灰色 断面－灰紫色
37	須恵器壷	17.4	—	胴径、淡灰色
38	須恵器甕	12.4	—	淡灰色
39	須恵器壷	14.7	—	胴径 内・外面－暗灰色 断面－紫灰色
40	須恵器壷	16.4	—	胴径 内・外面－暗灰色 断面－紫灰色
41	須恵器蓋	9.8	—	端径 内・断面－灰色 外面－暗灰色

調査区全景　東から

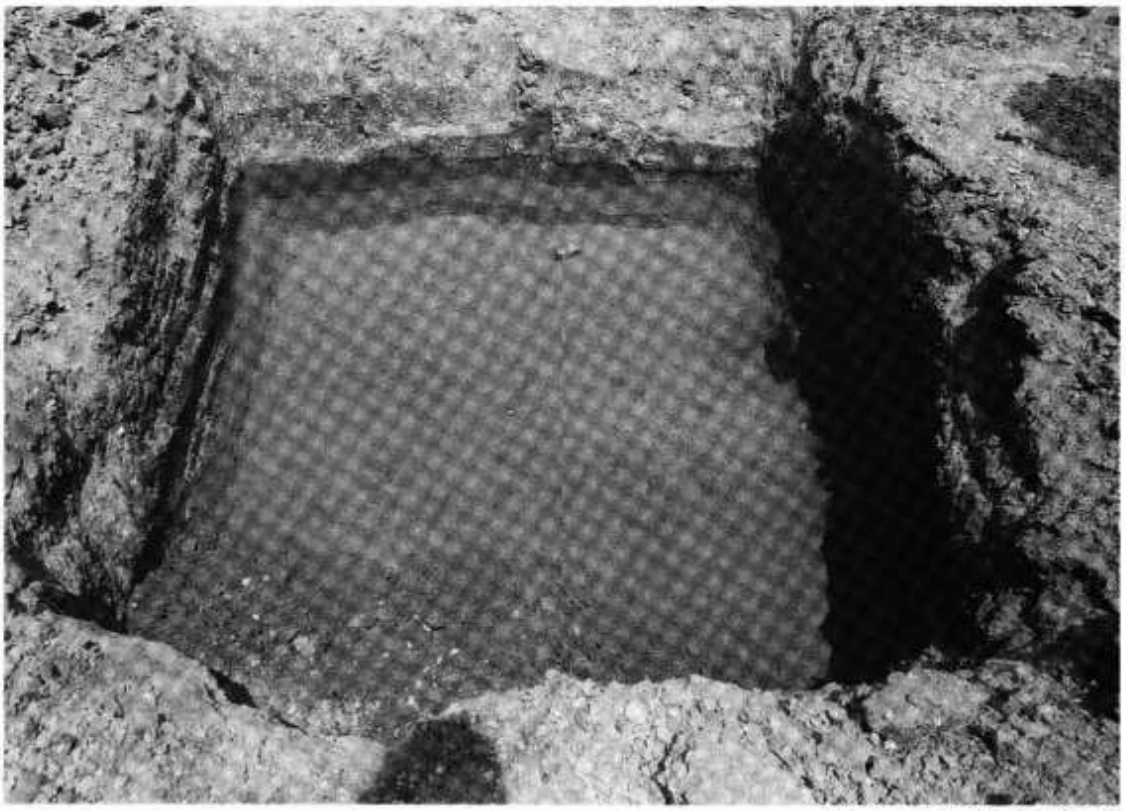
北西部 遺構検出状況 南から



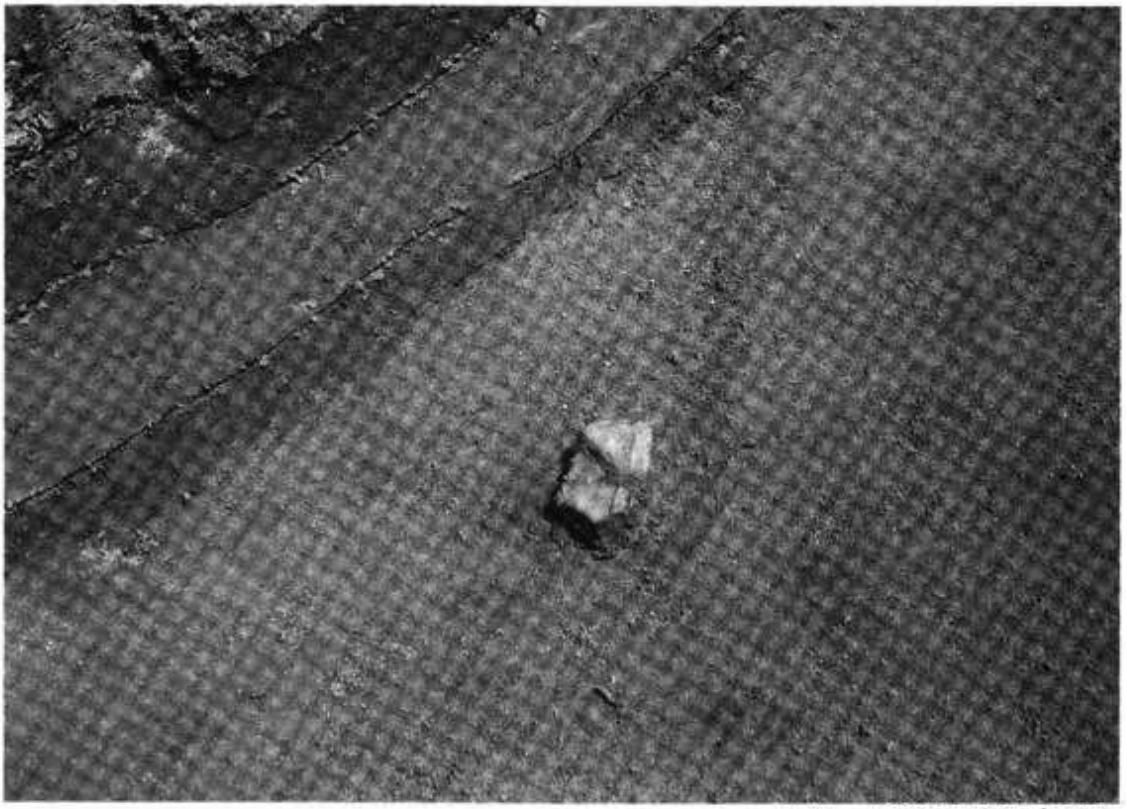
北グリッド 遺構検出状況 南から



北グリッド 溝断面 南から

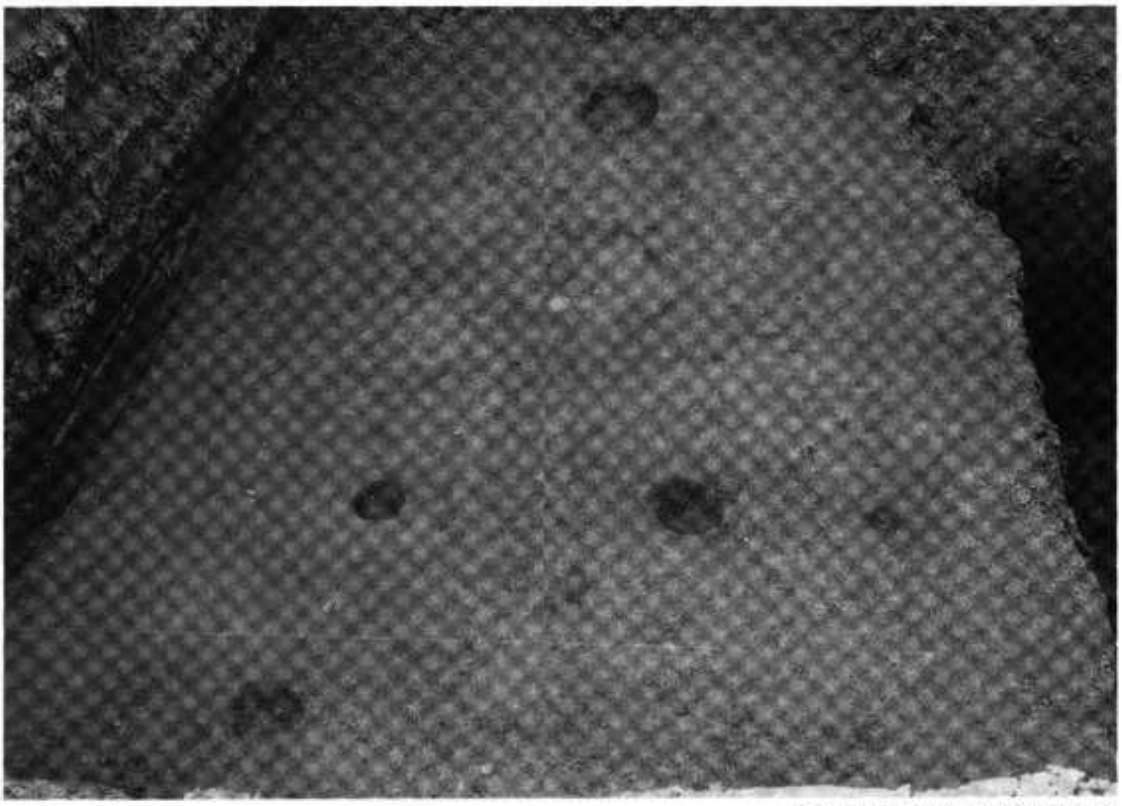


北グリット　調査区全景　南から

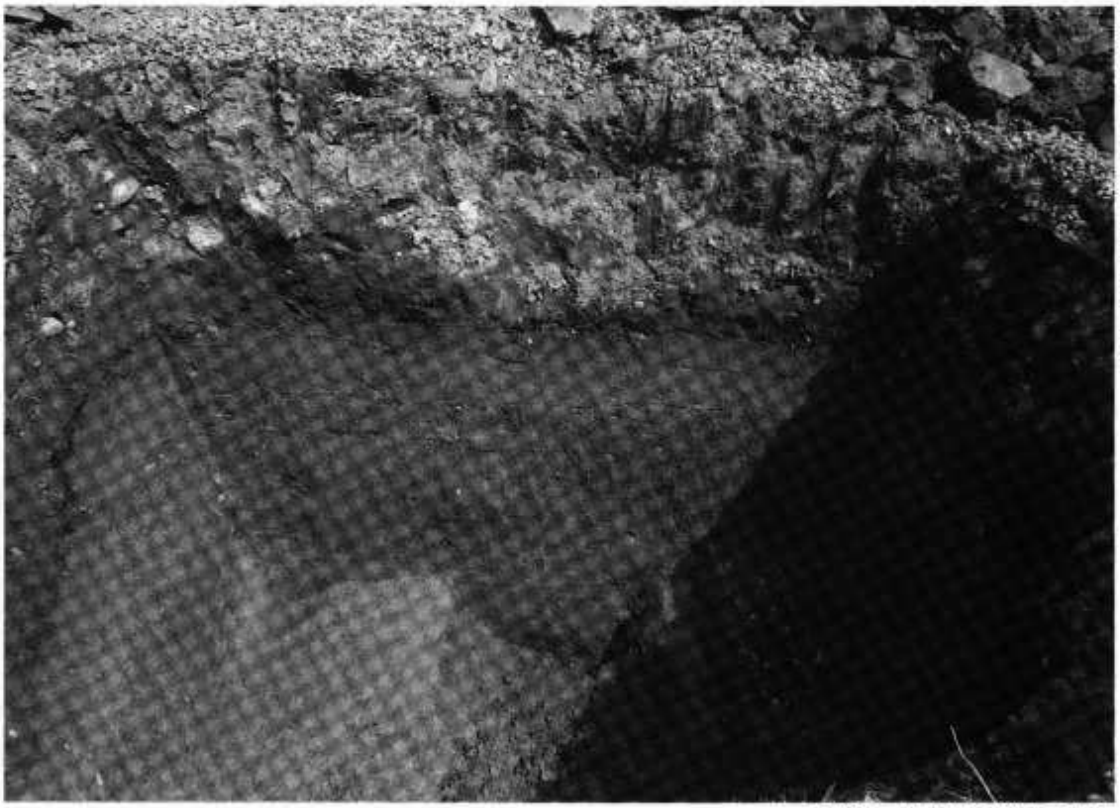


北グリッド　遺物出土状況　南西から

南グリッド 遺構検出状況 南から



南グリッド 遺構検出状況 南から



東グリッド 溝検出状況 南から

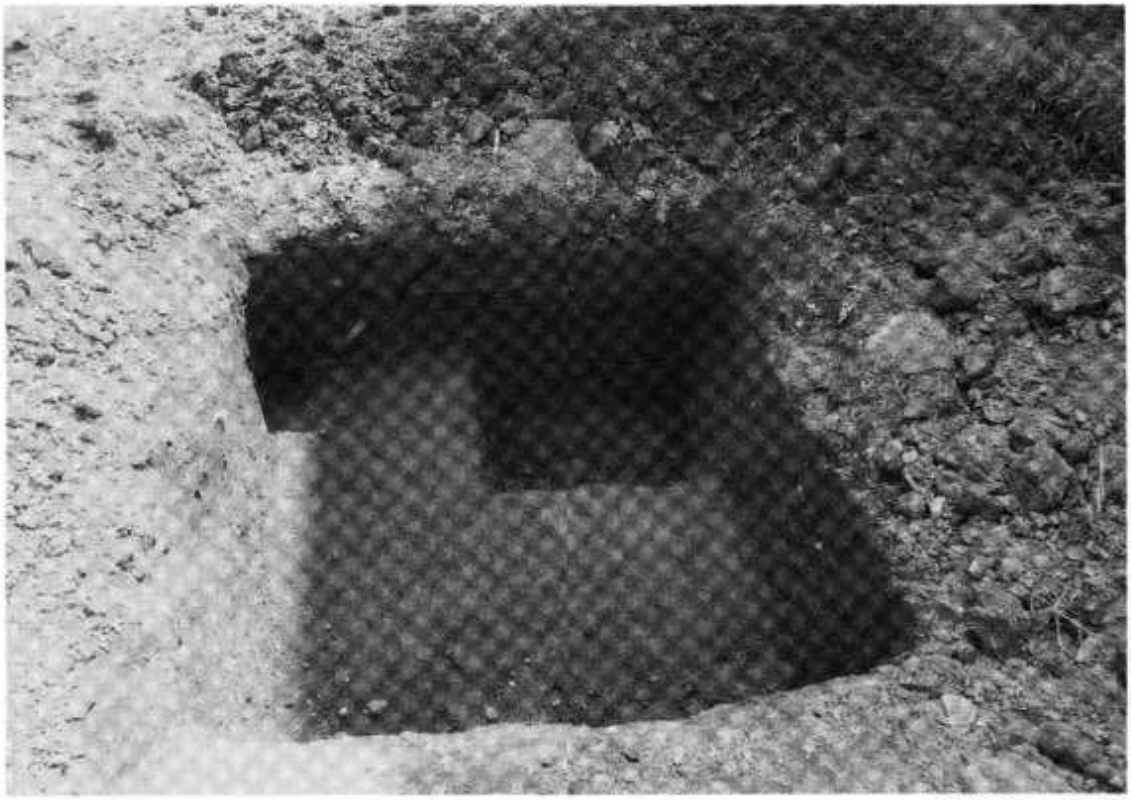
西グリッド 遺物出土状況

塚本塚古墳現状　西から

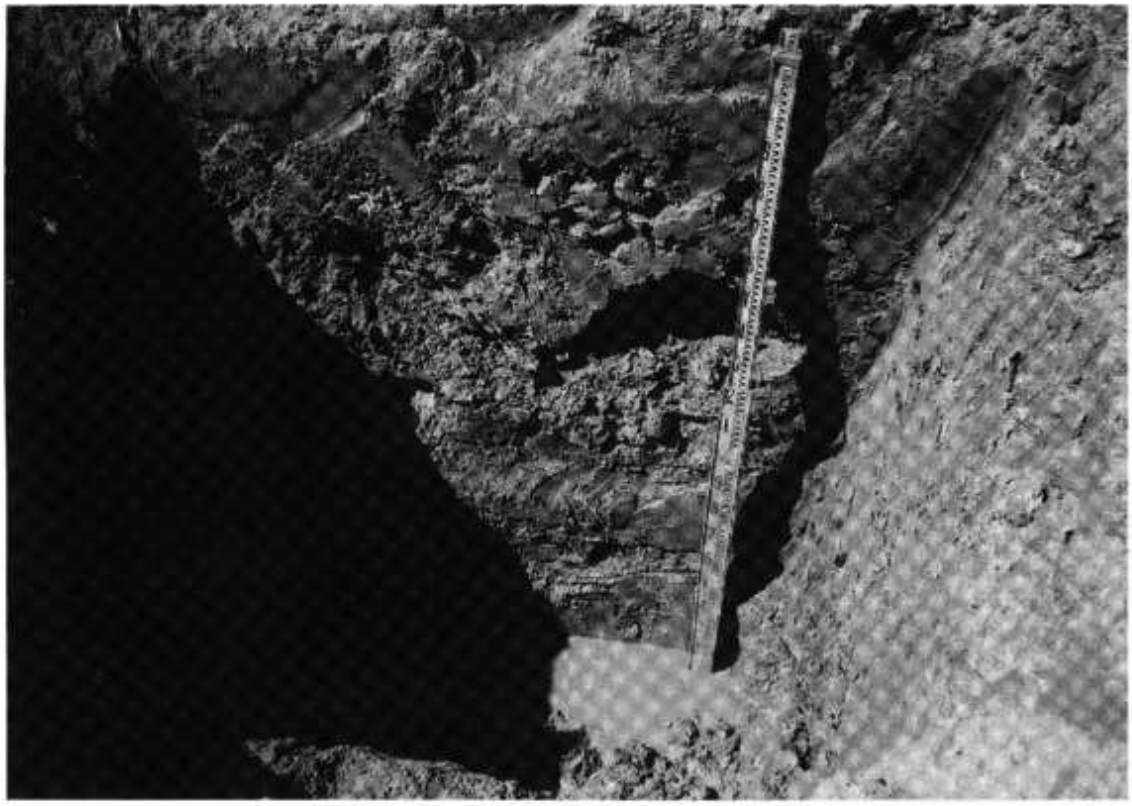
発掘　調査風景

トレンチ　北壁断面　南から

トレンチ全景　南東から



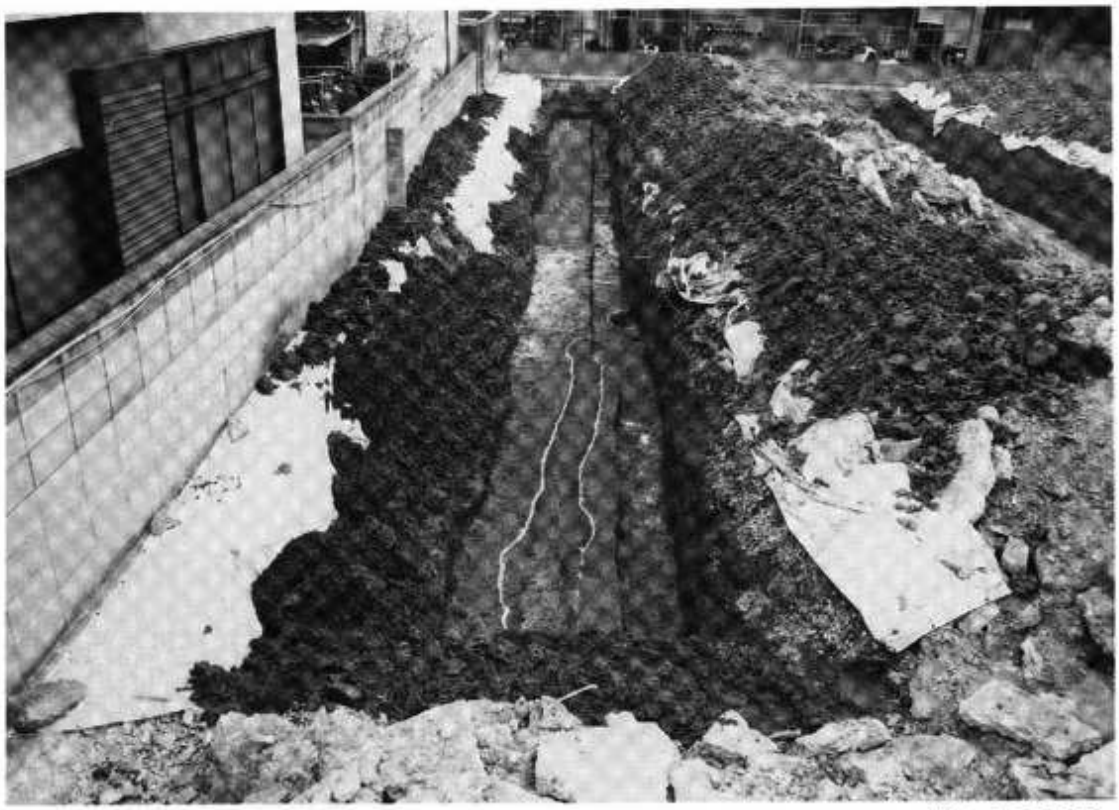
調査区全景　北から



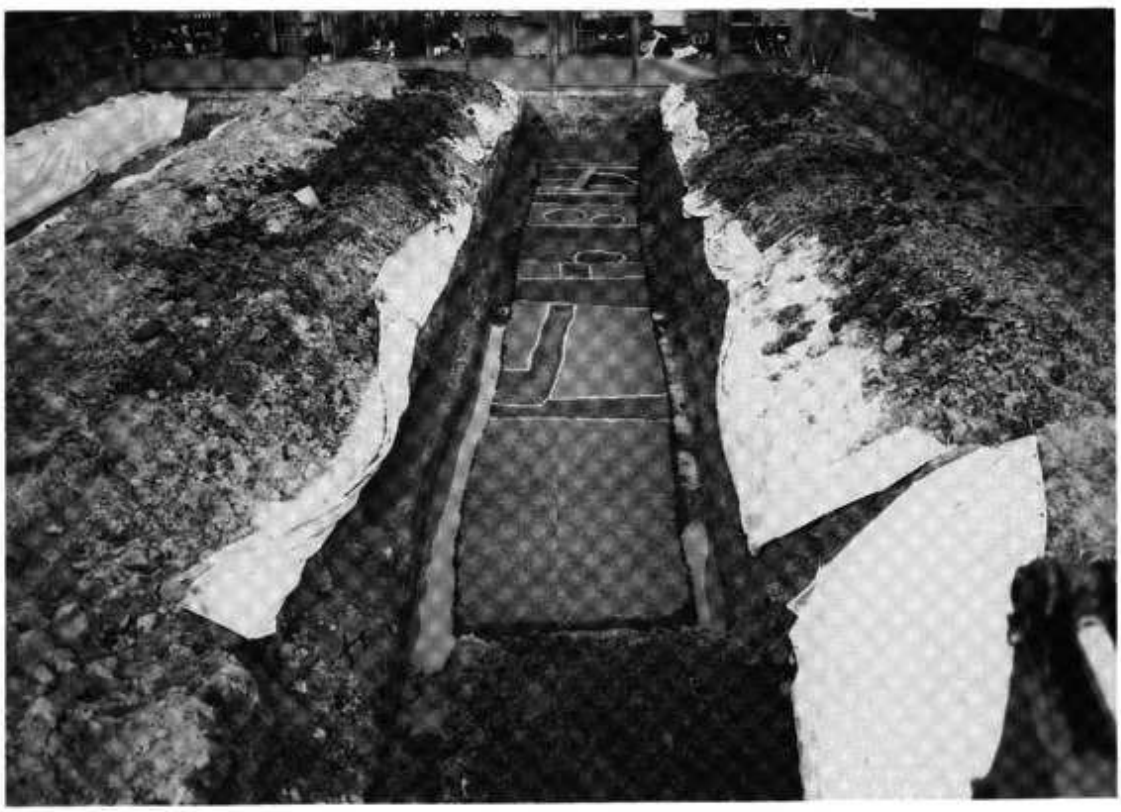
グリット断面

遺構検出状況 南トレンチ東側 北から

遺構検出状況 南トレンチ西側 北東から

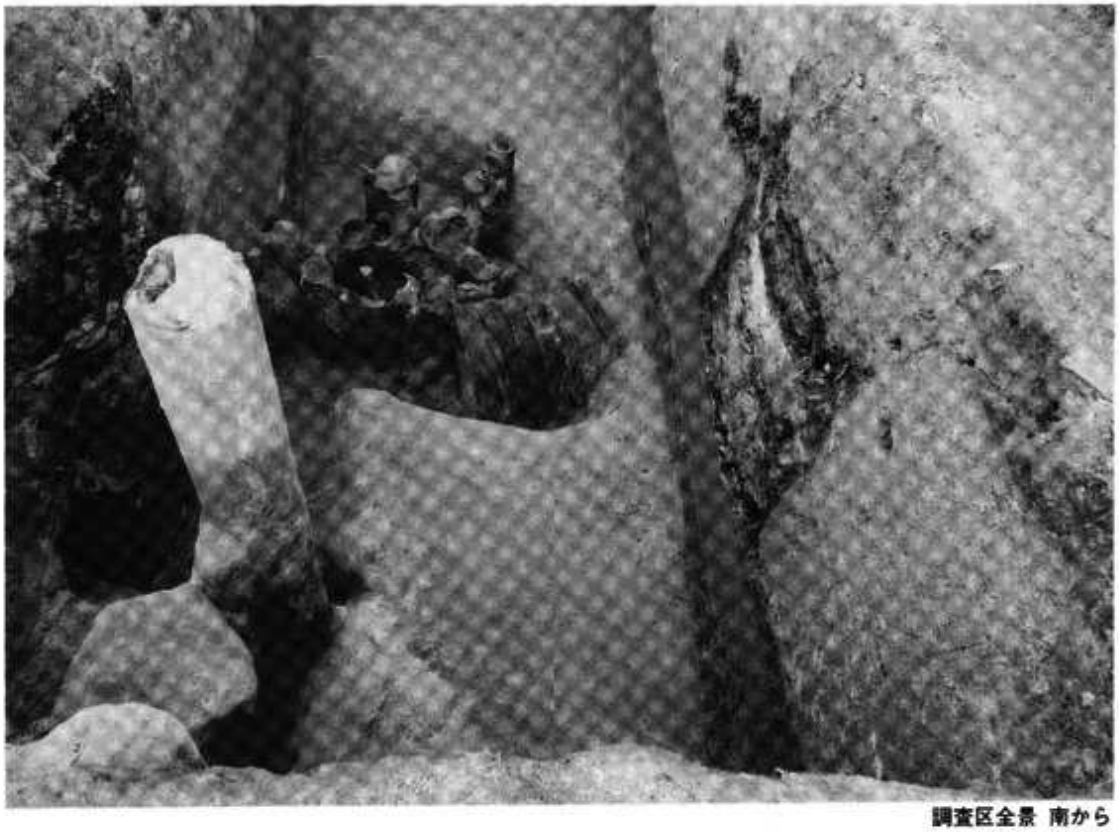


北トレンチ　西から

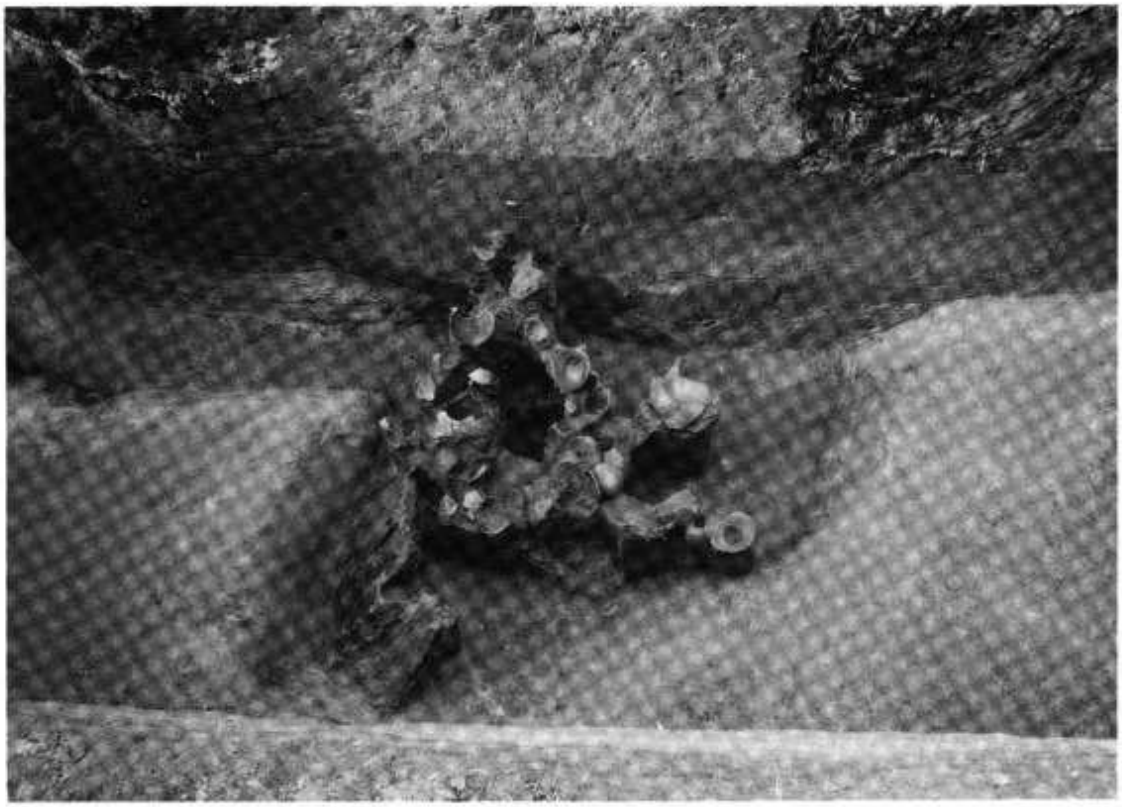


南トレンチ　西から

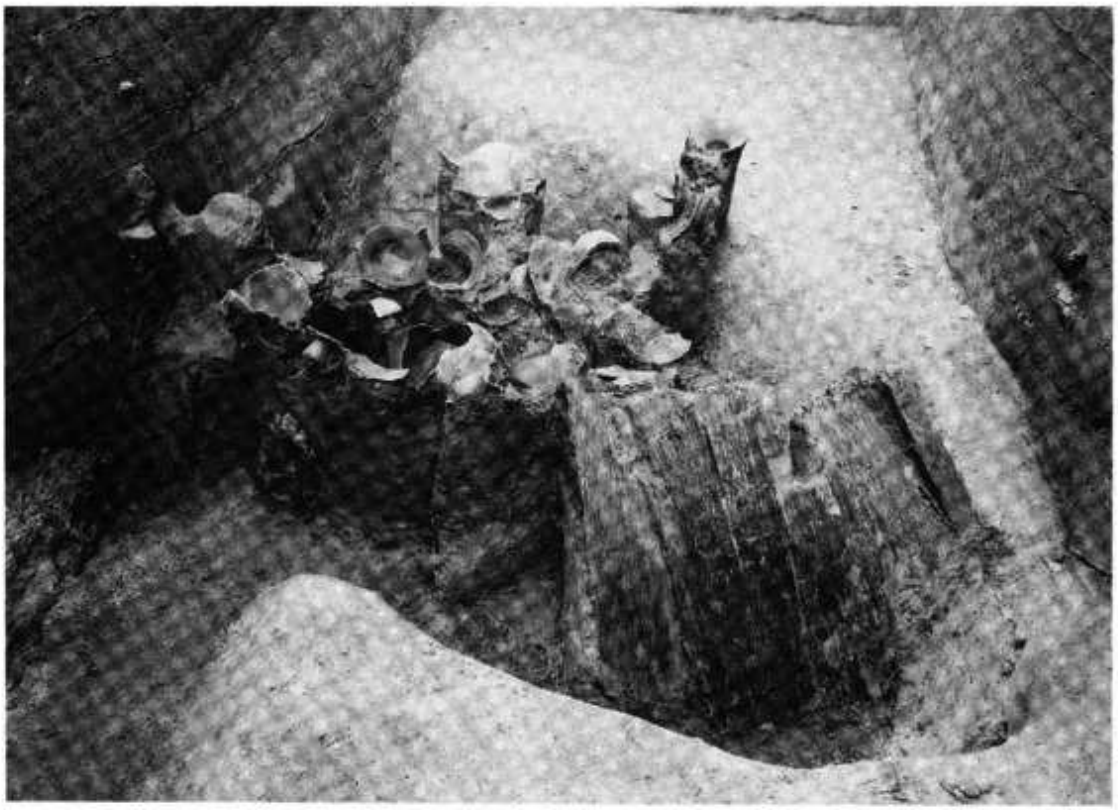
調査区全景　北から



調査区全景　南から

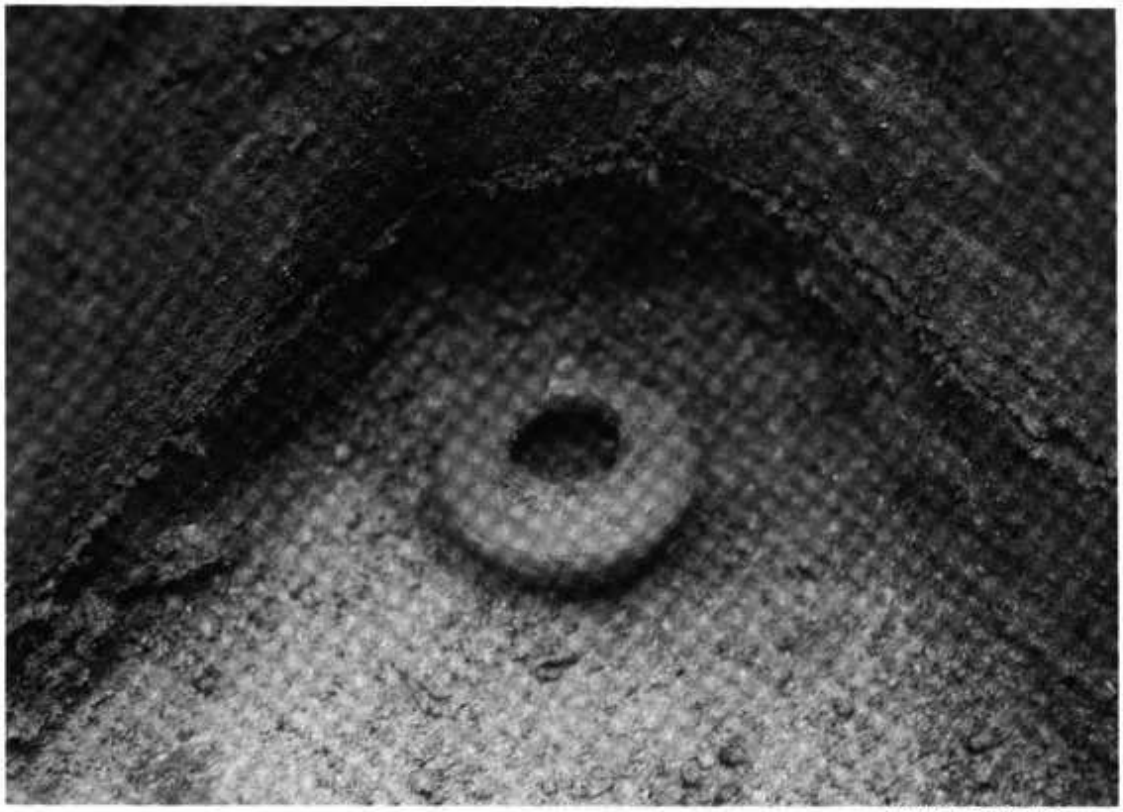


SK−02 東から



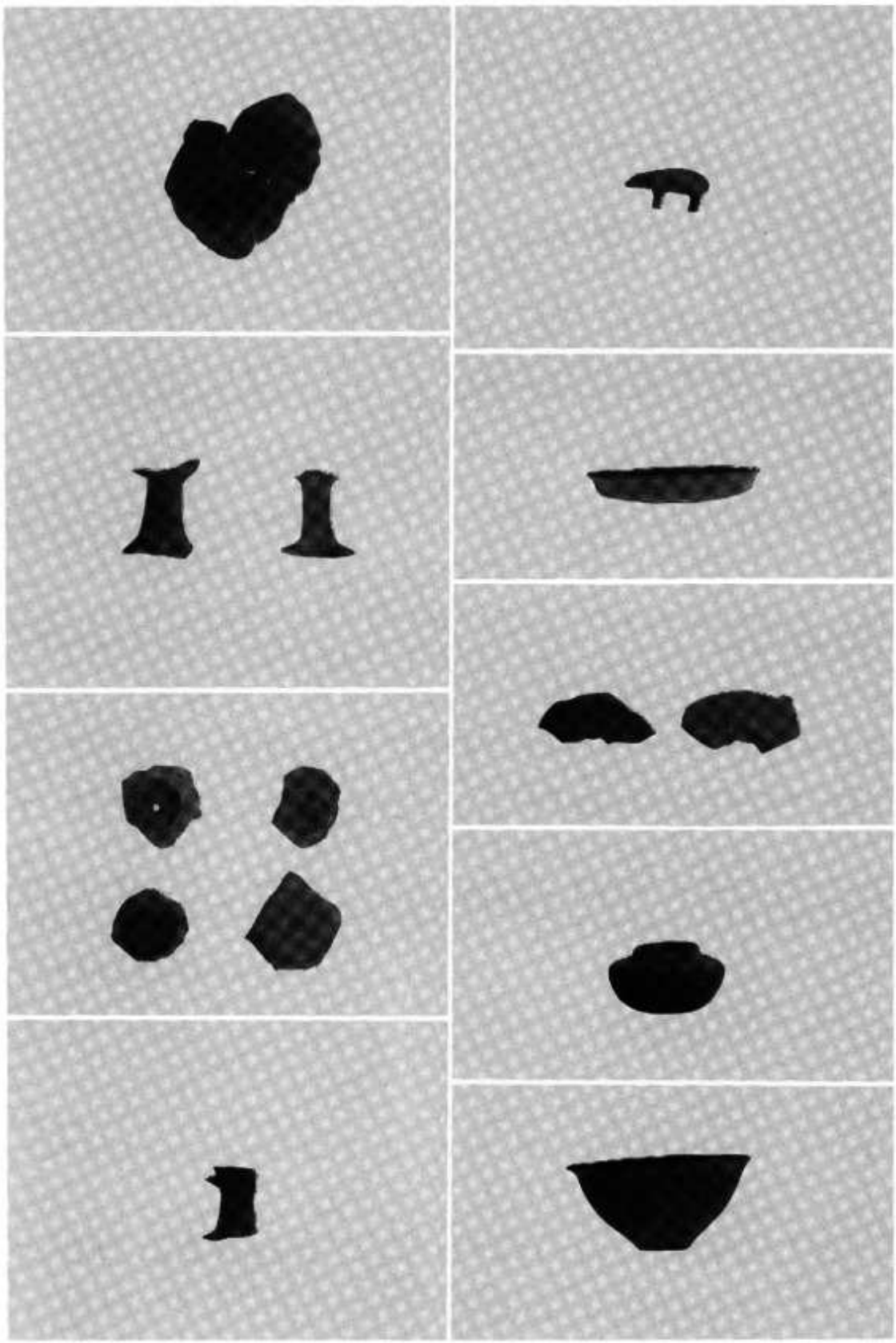
SK−02 南から

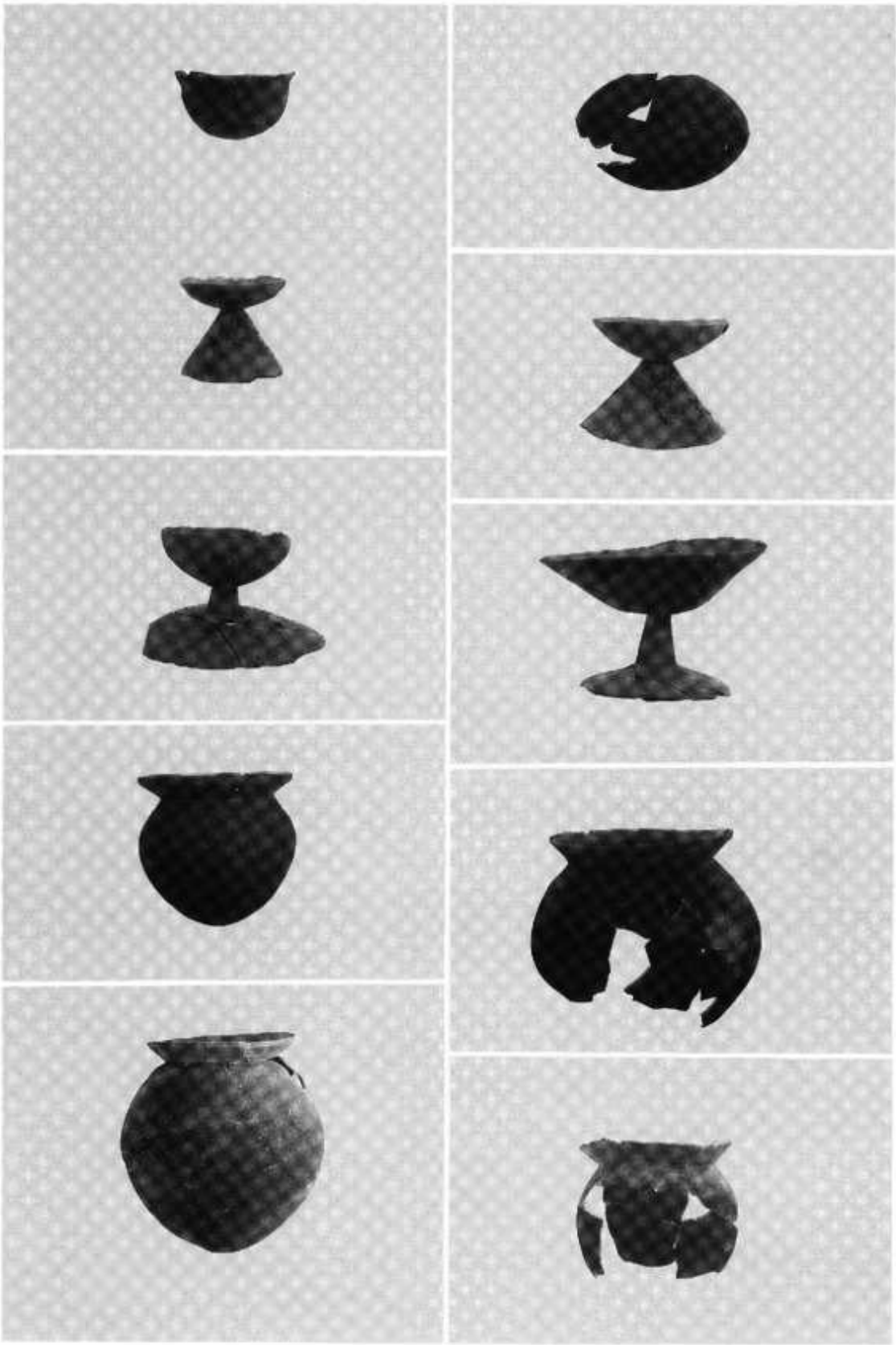
グリット全景　西から



遺物出土状況　北西から

図版十四　亀井久宝寺小阪合中田各遺跡出土遺物





八尾市文化財調査報告20
平成元年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日　1990年3月
発行所　八尾市教育委員会
印　刷　近畿印刷センター